群馬県文化財総合調査報告書第二集

群馬県教育委員会編

# 東毛地方の文化財

群馬県文化財総合調査報告書第二集

群馬県教育委員会編

# 東毛地方の文化財

# 序

夏の酷暑を瞬時にはらう豪快な雷雨、冬枯れの山野を吹ぬける苛烈な赤城おろし。東上州はもっとも群馬県らしい風土の土地柄といえましょう。

太田市東郊に墳丘の全長が二一〇メートルという東国最大規模を誇る天神山古墳と全国でも珍らしい墳丘部分が帆立貝のようよ姿をした女体山古墳が、うっそうと繁る雑木林におおわれて眠っているのを知っている人は多いでしょう。この巨大な二基の古墳は、太田市周辺に本県でもっとも早く、強大な古代権力が成立していたことを物語っています。爾来、連綿として営まれてきた人々の生活は、この地に豊かな文化を伝えてきました。しかし、社会全体が大きく変転し、生活様式が激変し、人々の文化に対する価値観さえもことなってきた現代においては、祖先が大切に育て、守り、受け継いできた貴重な文化財が破壊され、消滅しつつあるという点では、この長い歴史的伝統をもつ東上州とても例外ではありません。

そこで、群馬県教育委員会では五ヵ年計画で実施している文化財総合調査の第二年次（昭和四十八年度）の調査地区として、東毛地方（東部教育事務所管内、三市七町三村）を対象として調査を実施しました。

西と北とに奥深い足尾山地をひかえ、南は八王子丘陵をへだてて平坦な平野につづく盆地に発達した織都・桐生市。万葉集歌にニヒタヤマと詠まれた金山周辺の豊かな水田地帯を背景に、歴史上の人物を数多く育くんできた太田市。関東平野の直中にあり、悠々たる大利根の流れにのぞみ、近世史上関東に重きをなした城下町・館林市。東毛地方はこれら個性のことなる三都市を核とし、その隣接町村との関連において、特色ある文化を生み出してきました。

このたびその調査報告書がまとまりましたので公刊します。この中に示されているように、絵画、彫刻、建造物、古文書をはじめ、民衆が伝えてきた芸能、山地・沼沢地の動・植物などが豊富に残されています。

本書が文化財保護のための基礎資料であるのは当然ですが、広くみなさまに有意義に利用されることを期待しています。

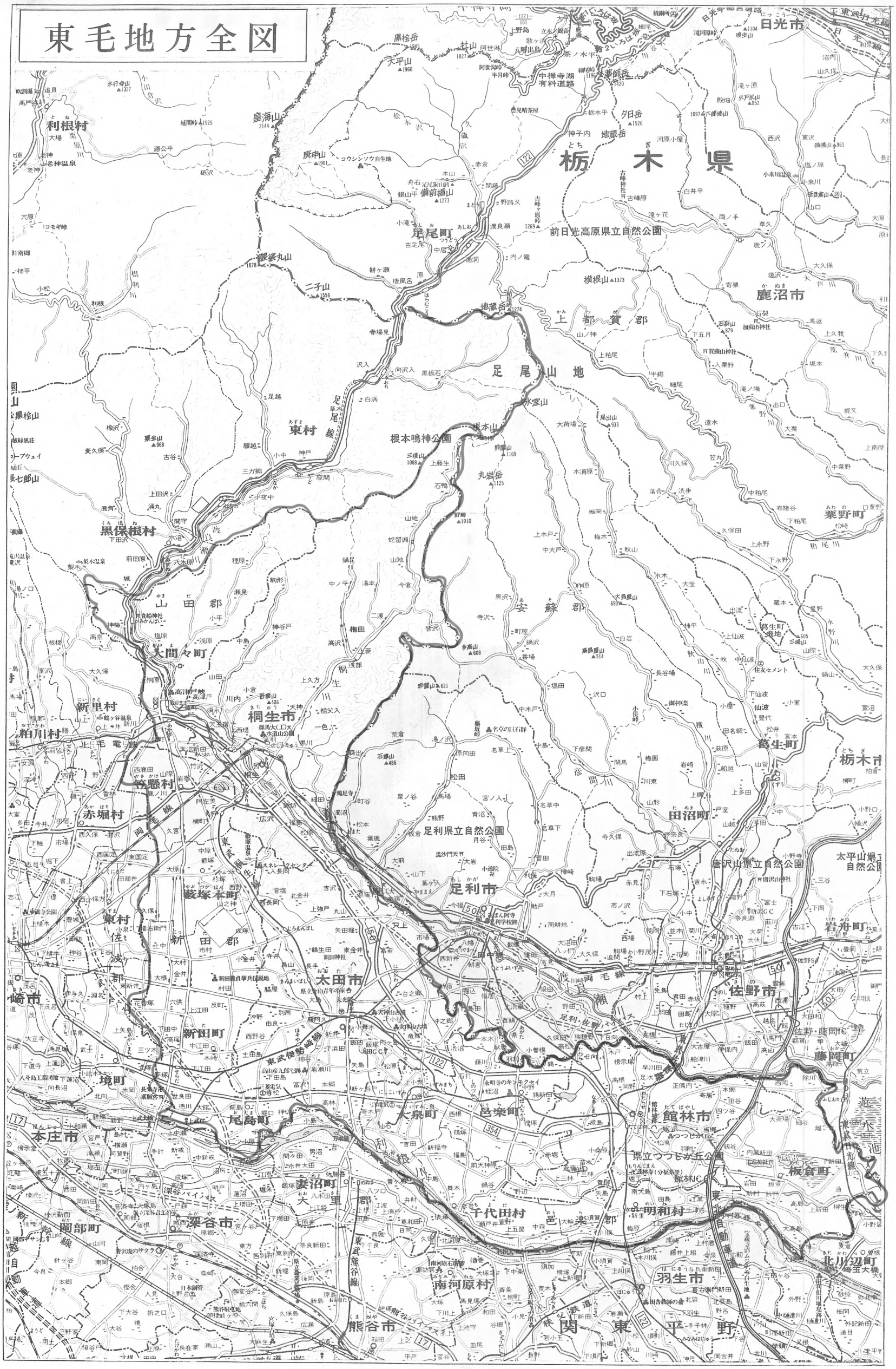
末筆ながら調査および報告書作成にご協力いただいた方々に厚く感謝の意を表します。

昭和五十一年三月

群馬県教育委員会

教育長　山川武正

# 東毛地方全図


栃木県
日光市
鹿沼市
利根村
足尾町
足尾山地
前日光高原県立自然公園
上都賀郡
東村線
根本鳴神公園
黒保根村
山田郡
安蘇郡
粟野町
大間々町
桐生市
新里村
粕川村
笠懸村
赤堀村
葛生町
田沼町
足利県立自然公園
足利市
太田市
佐野市
藤岡町
館林市
尾島町
大泉町
邑楽町
本庄市
妻沼町
深谷市
岡部町
千代田村
明和村
羽生市
南河原村
熊谷市
北川辺町
東平野

# 東毛地方の文化財　目次


序
東毛地方全図
目　次
調査の経過……一
一、文化財総合調査実施要綱……一
二、調　査　員……二
三、地区調査員……三
絵　画……四
建造物……二六
彫刻（仏像）……三五
石造美術……四七
芸　能……五九
古文書……七〇
桐生市……七〇
太田市……七六
館林市……八三
新田町……九五
藪塚本町……九六
大間々町……一〇一
板倉町……一三三
明和町……一四五
大泉町……一五三
邑楽町……一五六
千代田村……一六二
有形民俗資料―漁労用具を中心として―……一六七
植　物……一八五
桐生市……一八五
太田市……一八八
館林市……一九〇
尾島町……一九三
笠懸村……一九五
大間々町……一九五
板倉町……一九九
明和村……二〇〇
千代田村……二〇一
大泉町……二〇三
動　物……二三〇
一、東毛地方の池沼群の動物……二三〇
1　注目したい水生動物……二三〇
2　池沼群の水質環境と動物性プランクトン……二二五
二、大間々地域渓流の動物……二〇九
補　遺……二二一

# 調査の経過

## 一、文化財総合調査実施要綱

1 趣旨

諸開発事業の進展、生活様式の激変等により、急速に消滅、散佚しつつある文化財の積極的な保護・保存を図るため、文化財全搬について緊急にその所在及び現状を総合的に調査して、全貌を掌握すると共に、記録を整備し、今後の保存と活用の計画作成の資料とする。

2 対象地域

東部教育事務所管内　三市七町三村

桐生市・太田市・館林市・新田郡尾島町・新田町・藪塚本町・笠懸村・山田郡大間々町・邑楽郡大泉町・邑楽町・板倉町・千代田村・明和村

3 期間

昭和四十八年四月一日～昭和四十九年三月三十一日

4 調査主体者

群馬県教育委員会

5 調査協力機関

桐生市教育委員会・太田市教育委員会・館林市教育委員会・尾島町教育委員会・新田町教育委員会・藪塚本町教育委員会・笠懸村教育委員会・大間々町教育委員会・大泉町教育委員会・邑楽町教育委員会・板倉町教育委員会・千代田町教育委員会・明和村教育委員会

6 対象文化財

絵画　彫刻　建造物（民家は除く）　石造美術品　有形民俗資料　民俗芸能　古文書　動物　植物　地質鉱物（国および県指定文化財は除く）

7 調査組織

(1) 総務班

調査の円滑な運営と総括を行なう。

各市町村教育委員会教育長および担当職員

東部教育事務所長および担当職員

各調査班主任調査員

県教育委員会文化財保護課長および担当職員

(2) 調査班

① 絵画・彫刻班（4名）
② 建造物班（2名）
③ 石造美術班（2名）
④ 有形民俗資料班（3名）
⑤ 民俗芸能班（2名）
⑥ 古文書班（15名）
⑦ 動物班（3名）
⑧ 植物班（3名）
⑨ 地質鉱物班（3名）　合計37名

県文化財専門委員、その他から調査委員を委嘱する。

(3) 地区調査員

文化財所在調査（第一次調査）および第二次調査時の調査員の補助をするため、市町村文化財調査員等を各市町村内から委嘱する。　合計114名

8 調査方法

第一次調査

各市町村段階で、地区調査員により、各文化財の所在調査を行ない、調査カードに記入する。

絵画、彫刻、建造物、石造美術品、有形民俗資料、動物、植物

および地質鉱物については、写真撮影を行なう。

第二次調査

重要性、緊急性により記録作成を要するものを選定のうえ調査員による調査を行なう。

民俗芸能については、8㎜フィルムによる記録作成を行なう。

まとめ

(1) 調査カードを、文化財所在台帳として、県教育委員会で保存する。

(2) 「群馬県文化財総合調査報告書Ⅱ・東毛の文化財」として刊行する。

## 二、調査員

| | | （担当分野） |
|---|---|---|
| 飯島　勇 | 県文化財専門委員 | 絵画 |
| 細野正信 | 東京国立博物館美術課 | 絵画 |
| 永井信一 | 県文化財専門委員 | 彫刻 |
| 天利秀雄 | 桐生市文化財専門委員 | 彫刻 |
| 持田照夫 | 県文化財専門委員 | 建造物 |
| 桑原　稔 | 豊田工業高等専門学校助教授 | 建造物 |
| 金子規矩雄 | 県文化財専門委員 | 石造美術品 |
| 丸山知良 | 県議会図書室長 | 石造美術品 |
| 都丸十九一 | 県文化財専門委員 | 有形民俗資料 |
| 池田秀夫 | (元)県立博物館長 | 有形民俗資料 |
| 井田安雄 | (元)太田市立商業高校教諭 | 有形民俗資料 |
| 酒井正保 | (元)前橋市教委社会教育主事 | 民俗芸能 |
| 福田　稔 | 下仁田町立東中学校教諭 | 民俗芸能 |
| 山田武磨 | 群馬大学教養部教授 | 古文書 |
| 峰岸純夫 | (元)宇都宮大学講師 | 古文書 |
| 川島維知 | 館林図書館参事 | 古文書 |
| 森　安彦 | 信州大学助教授 | 古文書 |
| 五十嵐富夫 | (元)県立太田女子高等学校長 | 古文書 |
| 高木　侃 | 関東短期大学講師 | 古文書 |
| 矢島　力 | 太田市立図書館長 | 古文書 |
| 木元政雄 | 桐生市郷土史家 | 古文書 |
| 中島　明 | 前橋工業高校教諭 | 古文書 |
| 宮崎俊弥 | 桐生工業高校教諭 | 古文書 |
| 荻野朝則 | 板倉中学校教諭 | 古文書 |
| 淡路博和 | 新島学園高校教諭 | 古文書 |
| 長谷川　清 | 前橋市立敷島小学校教諭 | 古文書 |
| 金井吉雄 | (元)群馬大学附属小学校教諭 | 古文書 |
| 古屋毅士 | (元)前橋市立第二中学校教諭 | 古文書 |
| 五味礼夫 | 県文化財専門委員 | 動物 |
| 関根和伯 | 館林女子高校教諭 | 動物 |
| 堀　正一 | 県文化財専門委員 | 植物 |
| 宮前俊男 | 中之条高校教諭 | 植物 |
| 木崎嘉雄 | 県文化財専門委員 | 地質 |
| 熊井諄五 | 太田女子高校教諭 | 地質 |
| 富岡克貴 | 太田高校教諭 | 動物 |
| 橋本達夫 | 伊勢崎東高校教諭 | 植物 |

## 三、地区調査員

桐生市　森田精一　天利秀雄　野口三郎　清水義夫　中沢孝一郎
周東隆一　木本政雄　彦部四郎
太田市　篠原蔵人　島岡利雄　黒沢光業　木村義一郎　長島三郎
平　大槻三好　矢島力　服部久八郎　正田喜久　須田光衛
館林市　贄田太二郎　青木信一　島野好次　落合敏男　小林一吉
中島貴美枝　川島正一　金井恒雄　今成節男
尾島町　木本教乗　新井清武　楢原宗雄　金子規矩雄　福田文治
定方嘉津夫　関口義二　江田雅由　森清美
新田町　鈴木徳太郎　小保方紀久　木村静江　外山達　荒牧寅十
郎　松島泉　金井好道　新井良夫　栗原知章
藪塚本町　加藤一太郎　福田耕一　永田清雄　半田勝己　藤生昌
弘　富岡英夫　植木茂男
笠懸村　田村育一　高橋憲太撮　岩崎一夫　橘内文夫　相沢忠洋
高橋守夫　木村力雄　武井一枝　江原文二郎　田村重治
大間々町　松島正見　石原亀之助　伊与田愛子　須永重雄　阿久
津栄一　五十嵐昭雄　小林惣佐久　小方道憲
大泉町　小山義造　市川清七　渡部義勝　半田安蔵　津久井慶三
内田芳三　河内梧作　川島吉次
邑泉町　上武万蔵　小林俊男　新井偉太郎　中村晃　大塚孝士
大川晴一　厚川小一　岡田立真
板倉町　高瀬清一郎　荻野朝則　宮田茂　長沢康雄　荒井久七
高瀬礼次郎　松沢篤郎　田嶋武治
千代田村　栗原宗七　藤野中　石川泉一郎　三枝友治　関口義雄
小寺元次　内田倹蔵　野村耕一郎　大谷泉一　高木美幸
明和村　矢島源一郎　北島鏶蔵　田口俊夫　森尻重作　鈴木好男
苗田哲雄　栗原栄一　藤橋芳雄　和田実

（敬称略、順不同）

各市町村教育委員会、教育長および事務局職員、東部教育事務所長および職員の方に協力をいただいた。

「絵画」４－２５頁は

個人情報が含まれるため非公開

# 建造物

## 一、はじめに

建造物班の調査対象は県教委文化財保護課の示した調査実施要綱によって、民家を除いた建造物としたため、主な対象建造物は堂塔・社殿およびそれらに附随した廚子や門であった。

調査方法は昨年度と同様に第一次調査と第二次調査に分けて行なわれた。

実際には第一次調査カードの出ない地区があり、それらの地区では地区調査員もおらず、老齢の教育長および教育委員会事務局等の関係者がぶっつけ本番でいくつか案内して下さった。このようにして行なった各地区の第二次調査のうちから主に次のような遺構をとりあげ、報告する。

①江戸時代中期以前に建築されたと思われるもので保存状態の比較的良いもの。

②幕末のものでも質がよく、建築年代の明らかなもの。

③その他特に重要と思われ、保存上緊急性を要するもの。

（桑原　稔）

## 二、調査報告

### 桐生市

(一) 鳳仙寺仁王門

所在地　桐生市梅田町一―五八

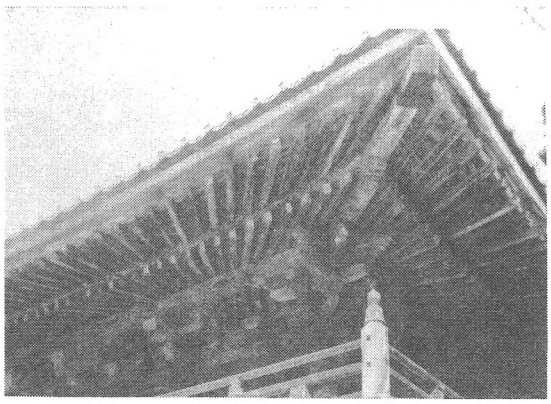
管理者　坪井良栄

三間二面の楼門で、両脇の一間は板を張り、前面に囲いを設けて中に仁王様（増長天・持国天）を配している。二階建になっていて扇垂はめずらしく、軒は出組（一手先）とし、軒支輪がみられ柱間には蓑束を用い、二階に椽をめぐらし高欄を廻している。高欄の四隅に立つ宝珠柱の頭部は唐様の逆蓮頭を用いており、屋根は瓦葺入母屋造りとしている。

建立年代は寛永年間と伝えているが、調査の結果ではもっと新しく、江戸時代中期頃の遺構ではないかと思われた。

破損少なく保存状態は良好である。

鳳仙寺仁王門



鳳仙寺仁王門軒裏

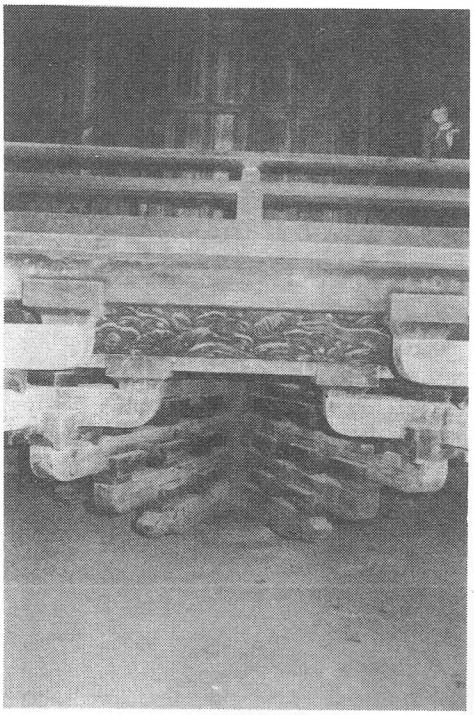
(二) 鳳仙寺輪蔵

所在地　桐生市梅田町一―五八

管理者　坪井良栄

白壁塗六メートル四方の鞘堂の中にある。中心にある一本の柱の六

面に書庫を設け、鉄眠版一切経六千七百巻を藏する。柱が回転することによって経巻を自由に出し入れできるところが珍しい。中央には双林大士を祭っている。



輪蔵の書庫および椽を支える差し肘木

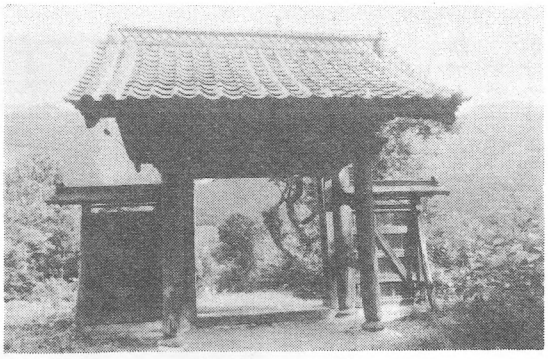
鳳仙寺輪蔵正面
（双林大士像）

書庫の前面周囲には椽が張られ、高欄をめぐらし、宝珠柱の頭部は唐様の逆蓮頭を用いている。書庫と椽は柱への幾重もの差し肘木によって支えられているにもかかわらず、今日でも柱と差し肘木との仕口に弛緩がみられず、破損は極めて少なく、もちろん書庫は回転もし、往時のまゝの状態がよくしのばれる。このような建築様式は本県ではめずらしく貴重な存在であろう。製作年代は天明三（一七八三）年と伝えている。

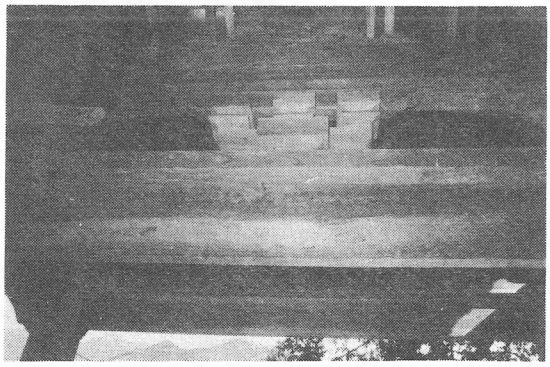
㈢ 鷹林寺山門

所在地　桐生市梅田町四ー五二八

管理者　大沢昌栄



鷹林寺山門



鷹林寺山門の冠木
冠木の側面に建立に関する記録が掘込んである。

いわゆる四足門で各柱の上下に粽があり、柱下には木造の礎盤を置き、柱上には台輪を置いてその下に頭貫を入れ、木鼻に拳鼻をつけて

いる。以上の様式はいずれも唐様の特徴である。軒は二重吹寄垂とし、屋根は瓦葺である。

当山門は冠木（カブキ）の側面裏に次のような記録が掘込んであるので享保十七（一七三二）年に建立されたことが明らかである。

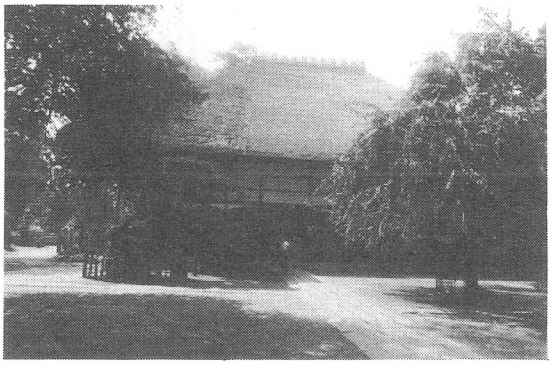
「享保十七　　人足　當檀中寄進
奉建造門一宇與修理科都合而爲二親施主免仙壬子仲秋中旬」

## 館林市

### (一) 青竜山茂林寺

所在地　館林市大字堀工一五七〇
管理者　古川正山

青竜山茂林寺山門



青竜山茂林寺本堂

青竜山茂林寺本堂棟札

いわゆる分福茶釜で名高い県下の名刹である。建造物より童話・民話で有名となった。

本堂は建立に関する棟札が残っており、享保十三年から同十五年にかけて建築工事が行なわれたことが明らかである。屋根は草葺寄棟造りで、改造少なく保存状態は良好である。

山門は三間二面の楼門で、屋根は草葺寄棟造りである。破損少なく保存状態は良好である。棟札が残っており、元禄七年（一六九四年）に建立されたことが明らかである。

この他に本堂の裏手にある開山堂の棟札（寛文十庚戌年正月吉日造立）も残っているが、開山堂は近年改造され装いを全く改めてしまっている。本堂・山門は比較的建築年代古く保存状態もよいので、今のうちに文化財としての処置をし、後世に伝える必要があると思われる。

### (二) 薬　師　堂

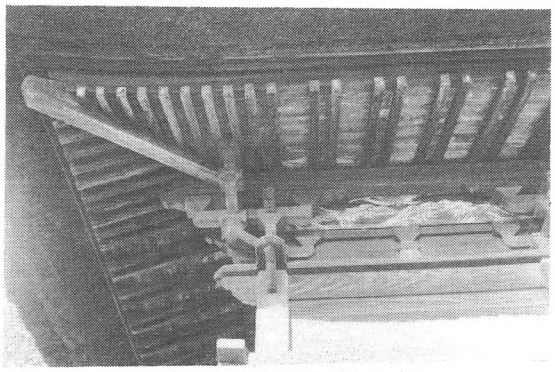
所在地　館林市大字当郷

三間三面の草葺屋根の正面に銅板瓦棒葺屋根の向拝を付けているが、

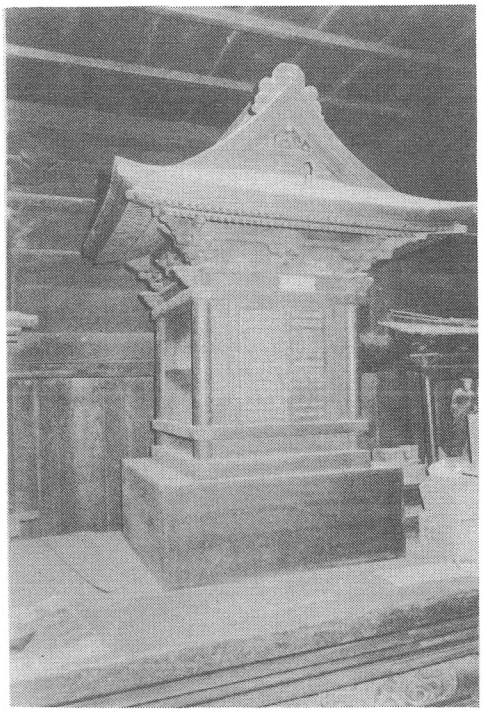
この向拝は後補のものである。軒は一軒で吹寄棰とし、柱上には台輪を置いてその下に頭貫を入れ、形のくずれた唐様木鼻を付けている。柱間の台輪上には簑束を用い、柱上は出組（一手先）としている。堂内には立派な厨子が安置され、その中に月光菩薩造立に関する棟札があり、裏側に明和六（一七六九）年の年号が記されている。各部の特徴からみて厨子と堂は同年代に造られたものと推定され、その時期は明和六年頃とみてよいであろう。

堂は錠もかけられておらず、内部へ自由に出入りできる状態であるので、管理上何らかの対策を講ずる必要があろう。

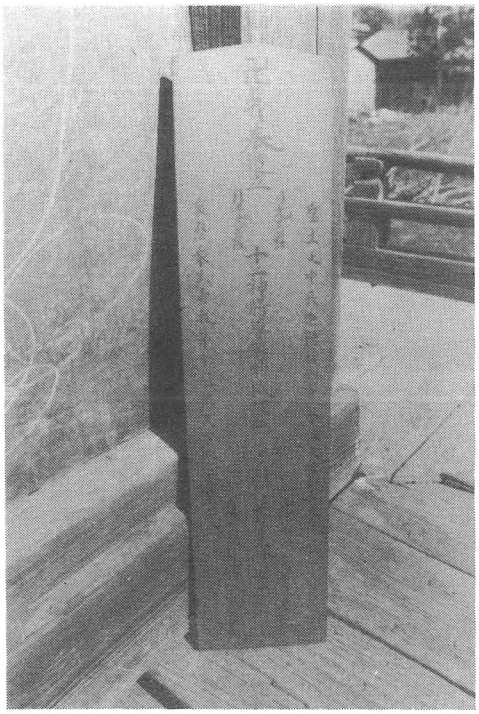
薬師堂外観



薬師堂　軒裏および柱上部



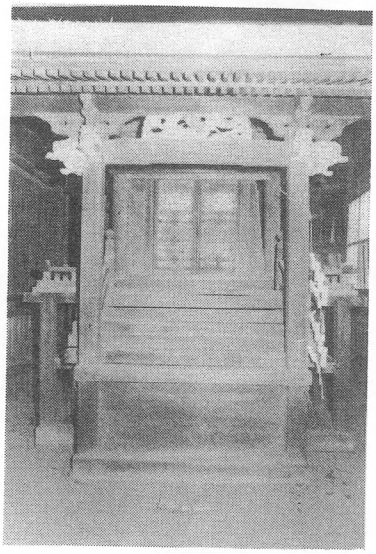
薬師堂内に安置されている厨子



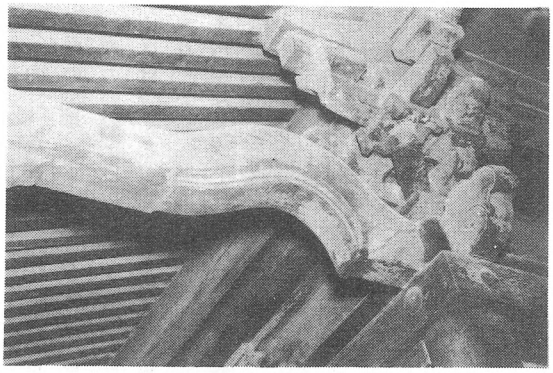
薬師堂厨子内にある棟礼

## (三) 長良神社

所在地　館林市台宿町五―三九
管理者　中島国雄



長良神社本殿



同上の本柱上部

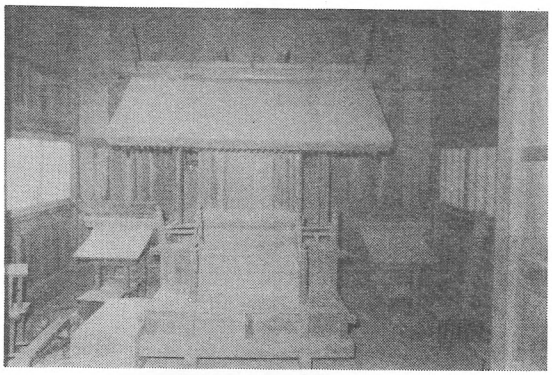
柿葺の一間社流造りである。高欄の架木（ホコギ）がなくなっていたり、蟇股内の彫刻が一部なくなっていたりはするが、保存状態はやゝ良好である。向拝柱上部の象鼻は鼻の長さが短かく、宝珠柱の擬宝珠などは丸みをおびていて全体から受ける感じは江戸時代中期以前の建築を思わせる。伝承では当社は元禄九（一六九六）年の創建といわれているので、当本殿は創建当時の建物とみてよいであろう。

## (四) 神明宮

所在地　館林市大字下早川田

本殿は伊勢神宮本殿の形式によく似た造りである。すなわち、屋根は柿葺切妻造りで反りがなく直線形とし、両妻には棟持柱を構え、頂部の障泥板（サワリ）、甍蔽（イラカオウイ）は左右に長く突き出させ、その上に堅魚木を置く。また、棟の左右に千木を設けているが、置千木のようでなく、破風板が貫通して千木となっているようにみせている（伊勢神宮の場合は破風板が貫通して千木となっている）ところ、および白木造りである点など伊勢神宮の造りによく似ている。

建築史学の方では、伊勢神宮のような造りに類する神社形式を神明造りとよんでいるので、当社の本殿は神明造りの系統に入るものである。

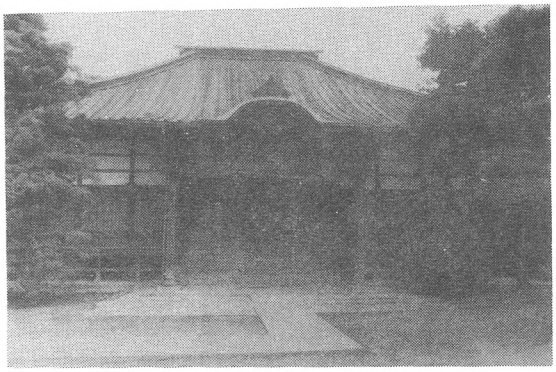


神明宮本殿

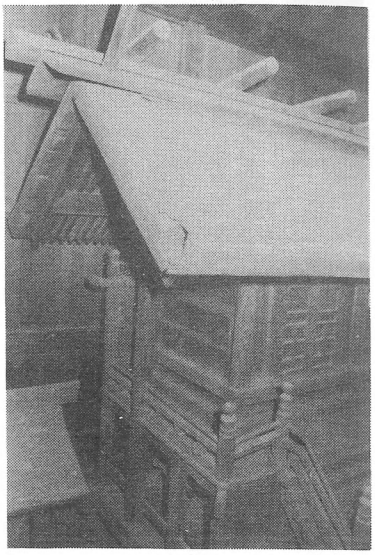
本県では神明造りの系統に入る社殿はあまりみられないが、館林市内ではこのほかに渡良瀬川に添った地域に二・三みられたので特に印象に残った。

なお、当神明宮の本殿内には次のような棟札が残されているため、寛政三（一七九一）年に建立されたことが判明した。

寛政三辛亥年
青木仁右衛門行近
御造宮　大工
原　惣　八
五月六日　元知



全性寺本堂



神明宮本殿

## 藪塚本町

(一) 全性寺本堂

所在地　新田郡藪塚本町大原

管理者　木戸三四二

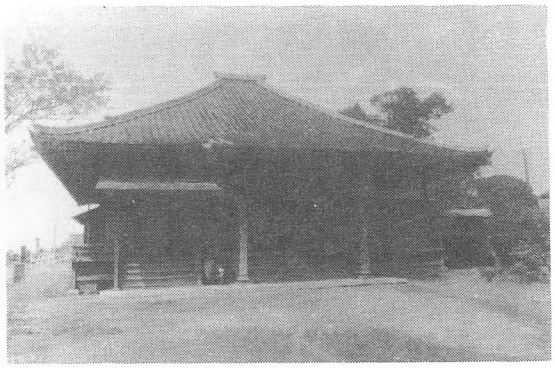
寄棟造鉄板瓦棒葺であるが、当初は茅葺であったものと思われる。寺の本堂の造りとしてはそう立派ともいえないが、内部のランマ彫刻の裏側に銘があり、山之神に住んでいた岸大内藏の名と弘化四（一八四七）年の年号が記されているので、本堂はこの彫刻と同じ年の弘化四年に完成したものであろう。

(二) 長建寺本堂

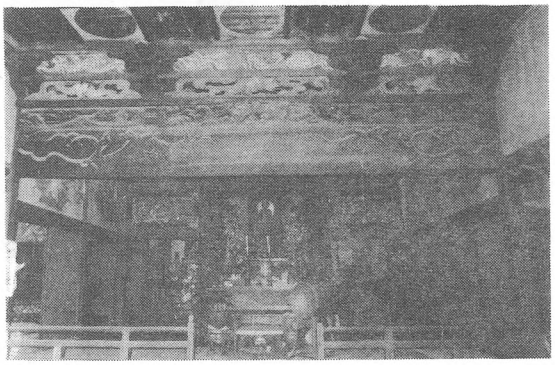
所在地　新田郡藪塚本町大原

管理者　星野英吉

瓦葺寄棟造りで、全性寺と調子の似た彫刻が内部に沢山みられる。やはり同一人の作品で、ランマの裏側には次のような銘が刻まれている。これにより当本堂は文久三（一八六三）年に完成したことが知られる。当本堂も全性寺本堂と同様建築的には特に優れたものと言えないが、地元の彫刻家が活躍して豪華な彫刻作品を残している点で、地元藪塚本町にとっては貴重な遺産となることであろう。



長建寺本堂



長建寺本堂内部

山神住
七十二翁
彫　岸大内藏
工　同苗太助
　　同幸作
世話人　西村金右衛門
同　山津甚助
干時文久三癸亥
　　正月日
當山拾九主
　　到誉代

銘の間蘭

観音堂外観

## 明和村

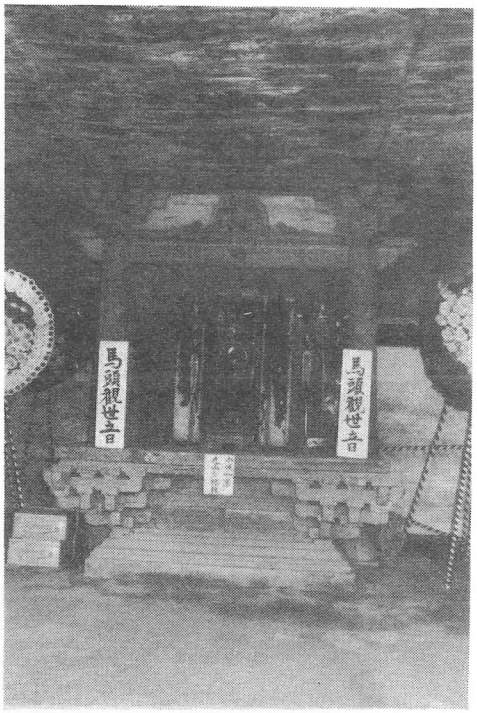
(一) 観音堂

所在地　邑楽郡明和村江黒七二〇

管理者　塚田伊三郎

三間三面で屋根は瓦葺方形造りである。内部は天井をはじめ組物および柱まで極彩色で色どられていたが、現在は色がはげ落ち、かつあせてしまって天井などは何が描かれていたか判明しがたい。

柱頭には台輪をのせその下に頭貫を入れ、くずれた形の唐様木鼻を付けているが、軒組物は三ツ斗組になっているため簡潔な表現となっている。建立についての記録や伝承はないが江戸時代中期頃の建立とみておけば無難であろう。




観音堂内部

## 千代田村

(一) 円福寺本堂

所在地　邑楽郡千代田村大字舞木三一九

管理者　中島善道

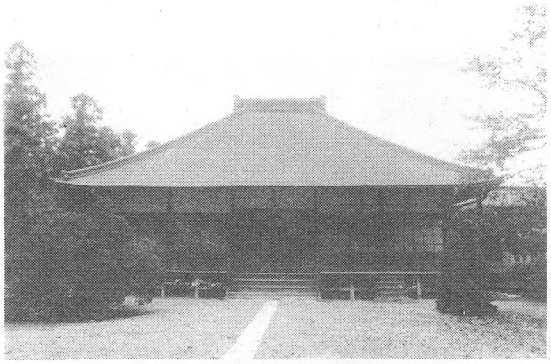
寄棟造りで現在トタン葺になっているが、これは昭和三十九年に草葺だったものを改修したためである。建築時の棟札が残されており、正徳三(一七一三)年に起工し、正徳四年に完成したことが明らかである。また、須彌壇の裏側に次のような墨書が残されている。

「當山二十六世中興桂光院覚阿上人無涯大和尚敬白

大工　江戸神田ニハ乗物町

和泉五郎次

須彌仏壇寄進願主但阿霊伝内田次郎衛門
干時享五庚子六月吉日」


円福寺本堂

同上同部

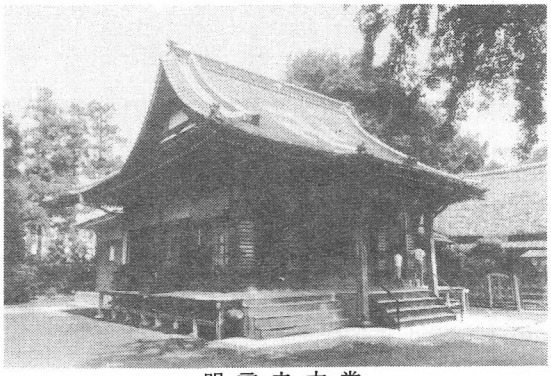
はその後ただちに再建されたものといい伝えているところから、寛政六年頃の建立と考えてよかろう。また、水屋は火災時に燃え残ったということから、寛政五年以前のものと考えられるが、様式から推察してそう古いものではない。一八世紀中期頃の建立ではないかと推定される。

## 邑楽町

(一) 月音山明言寺
所在地　邑楽郡邑楽町石打一九三
管理者　石本実禅

本堂は現在瓦葺になっているが、これは昭和二十六年に茅葺を改修したものである。

寛政五(一七九三)年に火災にあい、本堂は焼失してしまったが水屋はかろうじて難をまぬかれたといい伝えており、水屋の破風板・茅負いの一部が焼け焦げているのを認めることができる。そして、本堂


明言寺本堂

明言寺水屋

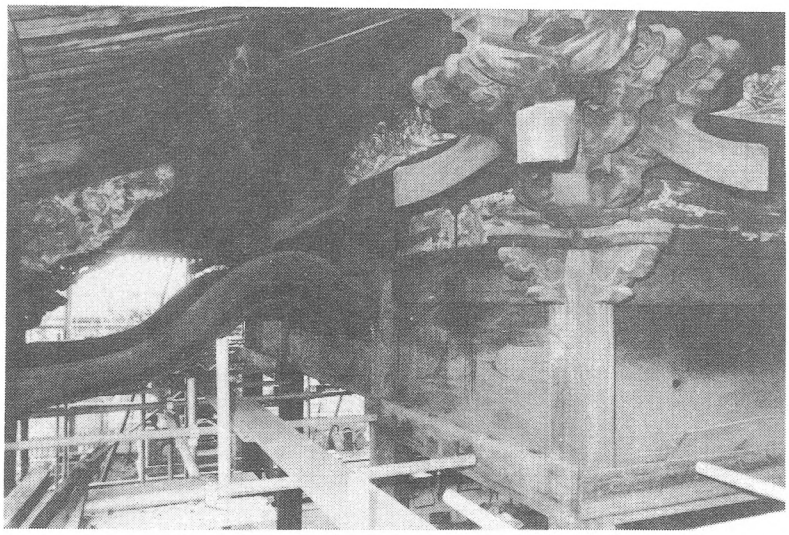
## 大泉町

(一) 成就院本堂
所在地　大泉町上小泉
管理者　井上加納

本堂は調査に訪ねた時、屋根の大規模な葺替え工事中であった。この工事中に屋根裏から棟札が発見されたため、本堂は天保十二(一八四一)年に建立されたことが明らかとなった。柱上に台輪をのせ、そ

の下に頭貫を入れ、曲線の強く表われた木鼻をつけている。大斗の上部には尾垂もみられ、唐様を基調とした幕末の様式がうかがわれる。

屋根替以外に部分的に修理がなされるようであるが、古建築に関する専門家がタッチしていない純然たる民間事業であるだけに、改修後の姿が心配される。



成就院本堂軒裏

# 彫刻（仏像）

## はじめに

桐生地域彫刻一覧表

| 番号 | 名称 | 数量 | 材質 | 姿勢 | 時代 | 所有者 | 指定有無 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 光性寺不動明王像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 平安 | 光性寺 | 桐生市指定 | |
| 2 | 浄運寺聖観音像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 平安 | 浄運寺 | 無 | |
| 3 | 最勝寺地蔵菩薩像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 平安 | 最勝寺 | 無 | |
| 4 | 西方寺菩薩像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 鎌倉 | 西方寺 | 無 | 頭部背面、両臂欠失顔面其他、損傷多し |
| 5 | 崇禅寺阿弥陀如来像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 鎌倉 | 崇禅寺 | 群馬県指定 | |
| 6 | 青蓮寺善光寺式阿弥陀三尊像 | 三軀 | 鑄銅 | 立像 | 鎌倉 | 青蓮寺 | 群馬県指定 | |
| 7 | 西方寺阿弥陀如来像 | 一軀 | 木彫 | 座像 | 南北朝 | 西方寺 | 群馬県指定 | 胎内墨書銘 |
| 8 | 渭雲寺大聖歓喜天像 | 一軀 | 鑄銅 | 立像 | 南北朝 | 渭雲寺 | 無 | 秘仏 |
| 9 | 東禅寺藏御正体 | 一懸 | 鑄銅 | 座像 | 南北朝 | 東禅寺 | 無 | 東禅寺鎮守神社御神体カ |
| 10 | 旧賀茂神社御正体三体 | 三懸 | 木彫 | 座像 | 室町 | 法楽寺 | 無 | 明治初年廃仏キ釈ノ際賀茂神社ヨリ当寺ニ移ル |
| 11 | 法楽寺千手観音像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 室町 | 法楽寺 | 無 | 像容持物ニ混乱アリ |
| 12 | （飯塚家藏）勢至菩薩像 | 一軀 | 木彫 | 立像 | 室町 | 飯塚家 | 無 | 善光寺三尊像ノ一体旧賀茂神社藏ト伝フ |
| 13 | （園田家藏）楽師如来像 | 一軀 | 木彫 | 座像 | 戦国 | 園田家 | 無 | 銘文朱書銘 |

桐生地域における文化財調査において彫刻の部の対象となったものは、別表に示すように

佛像の御正体　十三体

である。佛像においては、時代は下限を戦国期（室町時代）において、様式と郷土史の二面よりの考察することゝした。

1光性寺不動明王像　一軀

桐生市東四ノ一（旧今泉町）光性寺本堂安置

木造寄木造。材質桧材。彩色。胸綴瓔珞銅製。硝子玉吹付。釧銅製。持物羂索糸撚製。鐶及錘木製。剣木製。

立像　肉身紺色。巻髪。弁髪左肩ニ懸ル。右眼瞋目。左眼眇。彫出。胸綴瓔珞ヲ懸ク。条帛ヲ懸ク。彩色地ニ彩色文様ヲ置ク。（彩色地文様共ニ茶色ニ見ユレドモ現在甚ダ明確ナラズ）左手垂下。羂索ヲ執リ、右手屈臂宝剣ヲ握ル。共ニ臂釧腕釧ヲ著ク。腰ヲ少シク右ニ捻ル。裙彩色地ニ彩色雲文ヲ置ク。（後代の修補の際の彩色なるべし。）一段折返シ。腰布ヲ巻キ腹前ニテ結ブ。右足ヲ重ク左足ハ軽ク踏ミ立ツ。両足首ニ釧

光性寺不動明王像頭部

仝左全身像

ヲ付ク。

法量　像高　三尺二寸

台座　木造彩色。岩座及ビ框座

〔備考〕　彩色、文様、後世ノ補色アリ。瓔珞持物、台座等、スベテ後世ノ作。光背逸失。厨子後世ノ作。

以上の容相を概観すれば、眼は彫出、玉眼は用いず憤怒相も穏雅で威圧感はなく、その上姿勢も肉付も安静で、全体的に親しみやすい風貌といえよう。更に彫りの浅く襞、衣紋の並行的である点も藤原期のものの特長を示している。これらの点も京都本流の作風を示し、地方作でないことを証明している。製作時期については、背面に背くりがあるにしても類型化のみられる点からして藤原末期のものと推定すべきものと考えられる。

次に本像の伝来についてであるが、此の像が古くから此の地若しくはこの寺に伝来したものであれば、その郷土史的意義は深くなるものであるが実は案外に所伝が新しい。此の寺の第十九世である妙宏良湛和上が、文化十四年にこの寺の住持となったが、その節本像を当寺にもたらしたものであるという。現在同師の墓名には次の如く記されている。

師下野国都賀郡七石村道士戒定坊第二子也。為洛北石倉山大雲寺不二坊霊玉比丘之弟子。文化十四季丁丑来而住本寺。（下略）

右の碑文によれば師は元来現在の栃木県の出生であり、父も修験者であった事が知られる。長じて京都洛北の石倉山大雲寺で霊玉師の弟子となり修験の道に入って修行したようである。其後文化十四年に当寺の住持として来住したとあるから、故郷へもそう遠くないこの桐生の光性寺の住持となったのであろう。光性寺は元来江戸時代になってから建立された寺で始めは石原家の持佛堂であったものから独立し正式に三井の園城寺末寺となったのはそんなに古い事ではなかったようである。したがって妙宏師が入寺した時、この明王像を京都から将来して、この寺の愛染堂の一部に安置したもので、以前は大雲寺の不二坊に安置

されていたものを師の坊から授けられて持参したものと思われる。それ故本像が京都本流の佛師の作であることも、藤原期の古佛であることもその由来を知れば首肯できることである。もっとも桐生の地に来って僅か百六十年前後でしかないのでこの郷土との結びつきは浅いことも止むを得ない事である。（桐生市史、同別巻）

2浄運寺聖観音像　一軀

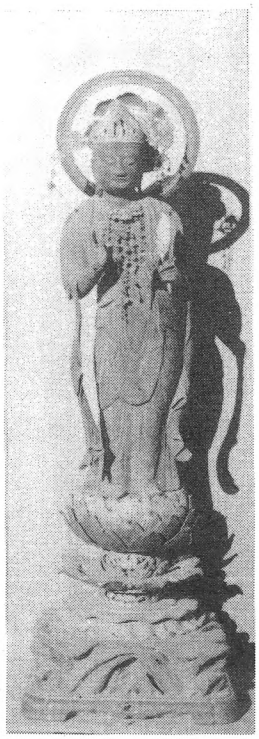
桐生市本町六丁目　浄運寺観音堂安置

木造　材質桧材。寄木造。宝冠銅製（現在逸失）胸綴瓔珞銅製。硝子玉付

立像　垂髻　白毫嵌入。眼彫出。胸綴瓔珞ヲ懸ク。条帛ヲ懸ク。左手屈臂、蓮萃ヲ執リ、右手屈臂ヲ前ニ向ケ五指ヲ開キテ竪ツ。天衣両肩ヨリ臂ニ懸リテ両脇ニ垂ル。腰ヲ少シク左ニ捻ル。裙ニ段折返。両足ヲ揃ヘテ立ツ。

法量　像高　一尺五寸

台座　木造八重座（五遍葺蓮萃。敷茄子。花盤。敷茄子。蕊。反花。岩座。框座。）



浄運寺観音菩薩像

〔備考〕像ノ彩色剝落。宝冠ハ現在紙製。宝冠、瓔珞、持物、天衣（両肘ヨリ垂下ノ部分）及台座全部等後世補作。円光背モ後補

宝髻は低く、眼は彫出で顔面は丸く小児のようにやさしい面立、肉付の薄い細身、衣紋の浅い彫り方等藤原佛の特長を示している。然し乍ら類型的でアクセントがなく作柄すべて単調であるのは藤原期も末期のものであることを示しているものといえよう。

次に本像の伝来についてであるが当寺が此の地に移ったのは慶長の頃であり、その以前は新宿の地にあり、更にその以前は広沢町の後谷にあって戦国末期天正年間に由良氏の家臣堀越氏の寄進により、開山玉念上人によって開創された寺であった。それ故当寺にこのような古佛が古く伝来している筈はなく、途中で本寺に迎えられた事は自明の理であった。本寺に伝承する由来は「浄運寺子安観世音菩薩畧縁起」にも記されている如く、もと下総国古河城主本田家に守本尊として安置され、本田家に仕えた老女がたまたま当寺第十世光誉旭円上人の養母で、栄寿尼と号した婦人が、当寺に本像をもたらし且つ終生これに奉仕したという。この縁起書は幕末頃の成立らしいから全部は信じ難いが、当時に伝わる書継文書風の由来書によっても第十世の光誉上人の時に、観音堂建立の記事があり、その下に「寄進者有之」云々の句がある。これをみても観音堂建立の事実は、江戸中期の正徳頃のことであったと考えられるし、同時に観音像を迎えたのも、このときに違いないと考えられる。それ故本像も郷土史との結びつきに於ては、近々三百年足らずで決して古いものではないのは少々残念な気がするのである。

3最勝寺地蔵菩薩像　一軀

桐生市（新宿）錦町壱丁目　最勝寺本堂安置

木造寄木造　材質桧材　宝珠、錫杖木製

立像　白毫嵌入。眼彫出。通肩衲衣。袈裟ヲ懸ク。右手屈臂錫杖ヲ執リ、左手モ屈臂宝珠ヲ掌上ニ置ク。両足ヲ揃エテ立ツ。

最勝寺地蔵菩薩像

台座　木造五重座（五遍葺蓮華。敷茄子。蕊。反花。框座）
法量　一尺三寸六分
〔備考〕　像ノ彩色剝落。処々ニ下塗ノ胡粉ヲ残ス。円光背。錫杖、宝珠、台座等皆後補

本像も彫眼で温雅な姿である。衣紋の彫りは全く浅く襞の並行的表現は袈裟の衣紋の前部に現れて、波紋の広がりのように下部に拡大されて行く。この静的な手法は藤原佛像の特色であろう。

本像の所伝に関しては当寺との因縁はごく浅いようである。当寺にもたらされたのは、昭和の初め頃で当時桐生に住していた佛師が、各部の破損を修理してここにおさめたものであるという。従ってこゝにくる以前どこに安置されていたものかは現在では全く不明である。佛師はすでに他界して三十年に近く、勿論本像を佛師の許にもたらした人物も不明である。

若し前の安置された場所が判明すれば、郷土史的な研究課題が提供されて興味あることになろうが、現在では先ず絶望に近いと思われる。

4西方寺菩薩像　一軀
桐生市梅田町壱丁目　西方寺本堂安置
木像　寄木造　材質桧材　黒古色
立像　宝髻（後頭部欠失）白毫欠失　眼彫出　胸綴等スベテ失フ。両臂モ失フ　腰ハ少シ右ニヒネリ左足ヲ浮カシテヤヽ前方ニ出ス。衣紋ノホリハ力強ク、裳ノ折返シモ短カシ。天衣モ身体ニ密着スル部分右肩ヨリ左脇腹ニ至リ、再ビ右肩ニモドル部分ノミアリ、別ニ彫出スル部分ハスベテ欠落ス　足指先両方欠落　蓮肉ニ差シ込ミタル　一部分ハ残ル
台座　蓮肉、蓮弁、以下框座マデ全部欠失。
法量　像高　三尺四寸

西方寺菩薩像

以上の如く此の菩薩像は損傷が多く極めて保存が悪いものであるが、

実は保存が悪くて現状になったものではなく、もともと三尊形の中尊脇持のうちの左右何れかの一体で、他の二体は古く火中に灰燼となり、この菩薩像だけが焼失をからくもまぬがれて損傷多き姿ながら今日に伝来したものと思われるのである。したがって保存の悪さというより実は、火災の中から辛うじて残ることが出来た不運の三尊中の幸運の一体であったかも知れぬ。それ故この像は、美術的価値は大部分失われていると考えられるが、然し此の地の郷土史料としての価値は、充分あるものと思われるのである。

次に此の像の特長からみた製作年代等についてであるがその前にこの像の伝えられた西方寺について一言しておきたい。

西方寺は正式には南北朝の頃の建立とされているが、その開創の伝承は鎌倉時代にさかのぼり、頼朝の家人宇都宮弥三郎頼綱が京で法然上人の弟子となり蓮生との法名を授けられて念佛の徒となった。その折彼の家来六十余人も主君と共に念佛の徒となり各地に分散して行ったが、その内の一人が安貞六年の頃この場所に菴をかまえて阿弥陀の像を安置して往生極楽を願い日夜称名念佛怠りなく勤めていたと伝えている。此の伝承は当時の此の地の状勢から判断すると可なりの真実性がある説と考えられる。現在こゝより六キロ程離れた同宗の崇禅寺の伝承も此の寺の伝承と時期と信仰の形態を等しくしている。そこでこれらの伝承は単なる郷土伝説というよりも歴史的真実性をもったものであると信ぜられているのであるが、この伝承の年代と此の損傷の多い菩薩像の造立年代は、その時期を等しくしているのではないかと考えられるのである。

即ち寄木の技法や彫眼などには平安末期の手法のまゝであり、一方衣紋の彫りや高い宝髻などは鎌倉期の特長を示している処から、中央製作ではなく地方作としてもやはり鎌倉も中期以前のものであろうと推定されるのである。

したがって此のような美術資料としての価値はひくいものであるとしても、一方郷土史や地方信仰史の上ではやはり大切な資料として保存に力をつくすべきではないかと考えられる。

5崇禅寺阿弥陀如来像　一軀

桐生市川内町二丁目　崇禅寺本堂安置

木造（桧材）寄木造

立像　螺髪植付。肉髻、白毫共ニ水晶嵌入。玉眼。右手屈臂。掌ヲ前ニ向ケ第一指第二指ヲ屈シテ三指ヲ堅ツ。左手ハ左ニ垂下シテ掌ヲ前面ニ向ケ指ハ右手ト共ジクス。肉身漆箔。衲衣彩色。

法量　像高　四尺三寸

台座　七重蓮華座（五遍葺蓮華。敷茄子。花盤。蕊。反花。二重框座）

光背　舟型式光背。外側透彫渦雲状炎光。化佛三体ヲツク

〔備考〕　漆箔モホトンド剝落。彩色部モ同ジ。光背ハ恐ラク後補。台座ハ当時ノモノナルベシ。

さて本像については、当地に伝わる伝承とその様式がいかなる関係に置かれるかという問題がある。その伝承の要点は、鎌倉時代のはじめの頃園田成家と称する当郷出身の武士が、京都在番中、法然上人の説法をきゝ、大いに心を動かされて一念発起、上人の弟子となり、念佛修行にはげんだが、たまたま郷に帰ることとなり、師の坊より当本尊をもらい受けはるばるこの地にうつして、一心に礼拝、念佛修行につとめたその本尊であるというのである。この伝承についてはたしかに法然上人の伝記の中に伝えられているがその歴史事実については多少の疑問もある。それと同時にこの仏像も鎌倉時代の作品である点には何人も異論もないが、その写実性の大いに進んでいる点などよりすると、初期の製作であるとするには多少の難点があり、中期を多少下るものではないかとの見方もある。然し鎌倉時代の彫刻作法を忠実に守り木寄法を行っている点、或は巧緻な刀法、又全体的にみて均整のとれた姿体など地方佛師のよくなし難い技法である。よって最終的に之をまとめていうならば

1.本像は郷土伝承とは多少年代的に一致しない処もあるが、鎌倉期の製作であることは間違はない。

2.しかもその製作技術の優秀な点においては正に京都本流佛師の製作であるとすべきであろう。

しかも此の地に長い間守りつゞけられて、郷土の伝承と結びつき、多くの人の心を安心立命の境に進めさせている点においても郷土史上貴重なる文化財とすべきであろう。

6 青蓮寺阿弥陀三尊像　三軀

桐生市西久方町一丁目　青蓮寺本堂安置

銅製　鑄造　台座ハ別ニ鑄テホゾヲ以テ連結ス。三軀共ニ同ジ

立像　渡金（現在殆ンド剝落、脇ノ下ナドニワズカニ金色ヲ残スノミ）

中尊　上品下生ノ印（来迎印）ヲ結ンデ蓮肉上ニ立ツ。肉髻玉眼嵌入

脇佛　両佛トモ殆ンド同型。宝冠ヲ着ケ、化佛・宝瓶等ノ標式ナシ。法衣ヲ着ケ裾ニ段折返シ。両手ハ胸ニアテ掌ヲ合ハセテ宝珠ヲ持ツ形ヲナス（梵筐ノ印）天衣ハ左肩ヨリ右脇下ニヌケ更ニ右肩ニカカリ左脇下ヘ出テ裾ノ折返シタ部分ヘ二条ノ線トナリテアラハレル。勢至菩薩ノ天衣ノ前部ハ一部欠失ス

台座　中尊ハ蓮肉、二段反花、框座、脇佛ハ共ニ蓮肉、一段反花、框座

法量　中尊　高サ　台座共一尺八寸

脇佛　各高サ　台座共一尺四寸

光背　欠失

当寺は現在は桐生市西久方町（旧称六反ヶ谷戸）に存しているが、桐生城を落城せしめた由良成繁が桐生入城後嘗って由良氏の致仕した新田氏の一菩提所たる新田郡尾島に存した青蓮寺を、その本尊と共に現在地へ移築したものである。伝承に依ればこの三尊像は新田義貞の念持佛であったというが別に確証はない。然しこの寺に保存される古位牌には、義貞に始めて付せられたという「覚阿」なる時宗の戒名が残されているのをみると縁故の深かった点も推測できるのである。

扨此の三尊佛は所謂善光寺式如来といわれる一光三尊佛で、長野善光寺に安置される本尊三尊佛と同型のもので、三尊佛が各自に光背を持たず三尊共通の一つの大きい舟型光背を共有している形式のものである。この寺の場合この光背が欠失しているのは甚だ残念の次第であるが果して何時失われたものか不明で、唯この像の製作地が京都であるとすれば、或は始めから遠方の地へ持参せなかったものなのか又移建の際失ったものなのかわからない。又鎌倉時代善光寺信仰が、特に時宗を奉じた信者――即ち時衆――の人々によって各地に広められた折、その人々は善光寺如来のうつしのお姿を多く製作させ、諸国修行（遊行）の折各地に負うてあるいたとも伝えられているので、重い光背は持参しなかったという話もある。上州各地にいくつかの善光寺如来は存するようであるがこの光背まで伝えているものはあまり存していないのは此の関係であるかも知れぬ。

桐生市西久方町　青蓮寺本尊
（善光寺三尊如来像）

とにかく此の尊像の特色は、何といってもその像の美しさにある。勿論礼拝の対象として作られる佛の姿であるからには慈悲の相として顔容が尊厳で秀麗なのは当然といえば当然ではあるが、そこだけでなく各部分のかたちから全体の容姿までまことに行き届いて美しい。更に技術面でもその鑄肌の美しいのは鑄型に使用した材質の関係でもあろうか。とにかく面部、法衣の衣紋の線、天衣の曲線の美しさ等まことに洗練された美しさである。それ故この作品も決して地方作ではありえず、都の本流佛師の作であろうといわれる所以である。

7 西方寺阿弥陀如来像　一軀

桐生市梅田町一丁目　西方寺本堂安置

木造（桧材）　寄木造　肉身漆箔　衲衣彩色。截金文ヲ置ク

座像　螺髪彫出。額波状。玉眼。肉髻共ニ水晶。右手屈臂掌ヲ前ニ向ケ第一指第二指ヲ以テ輪ヲツクリ第三指以下ヲ堅ツ。左手ハ膝上ニ按シテ上ヲ向ケ右手ト同ジ形トス。上品下生印ニテ来迎ヲ示ス。蓮肉上ニ結跏趺座。彩色地ニ截金ヲツク。文様ハ卍字ツナギ、直線文、草花文、雷文等ヲ衲衣ノ全部ニ渡ツテ表ス。

台座　蓮華座ヲ残シテ他ハ全部欠失。蓮弁ハ彫付ナリ。

法量　像高　一尺九寸五分

〔備考〕　漆箔ハ後世修理。彩色文様二色補色アリ。後背。江戸時代ノ補作

本像の特色は何といっても写実的な作品である。顔容は美作で鎌倉大佛などに著しく類似し、額の線は波状に作られ、玉眼、白毫共に水晶をもちい、衣紋の線も並行的でなく変化に富み写実的である。衲衣の上におかれている截金文も精巧に施されて北麗な品位はあるけれど工芸的な感じもする。又像の指の間にはっきり残される縵網相も、衆生を摂受してあまさざる如来像の特色であるが特に右手によく表現されている。総じて此の像は写実的で温雅な作風であるが、京風な特色よりも関東色が強いように思われ、時代も鎌倉室町の交流期とも考えられる。

更に此の像の今一つの特色は郷土史との結びつきにある。それは次の如き胎内墨書銘の存在によって明らかである。

大日本国上州桐生郷宝樹山西方禅寺住持、前禅興天叟中樹和尚、大檀那佐野大炊助助綱、択以吉日良辰、彩色之。仰願山門繁昌、福楽増長、災障不侵、吉祥如意、如此

永正竜集辛巳四月

この文中「桐生郷」というのは現在の桐生市梅田町一丁目、及び天神町二丁目三丁目のあたりを指す。天満宮以南の本町及び各町は当時は存在せず江戸時代に入って新町として開発される。「宝樹山」は西方寺の旧山号で此の寺は南北朝のはじめ桐生城と共に桐生国綱によって開創、その頃浄土宗から臨済宗にかわったが、山号は寺号と共にそのまゝ用いられたようである。

「前禅興」とは禅僧の一種の資格ともいうべきもので、鎌倉五山の住持となるべき資格の前提として五山の下の筆頭寺院たる「十刹」の禅興寺の入寺資格を得ねばならなかった。そこで当時の西方寺住職となった天叟中樹和尚はその資格を得ていたので「前禅興」と称することが出来たのである。たゞ此の天叟中樹和尚については他の記録をみたがその経歴等については不明である。「大旦那佐野大炊助助綱」についてはこの寺の旦那即ち外護者であり施主であって第九代の桐生城主であり、特に歴代城主の中でも有力な武人として今日までその勇名は伝承されている人物で永正年間より元亀に渡ってこの地の支配者であった。

次の問題点は「択以吉日良辰、彩色之」なる文である。文意は甚だ明らかで、よい日を択んで佛様を彩色したということである。然しこゝで問題になるのはこの文は「造立銘」か彩色だけを施した一種の「修理銘」かという点である。これについて従来当寺では「修理銘」として伝承されてきた事と、佛像専門の調査官が此の像容手法からみて鎌倉末期のものとみてよいであろうという証言によって現在まで修

理彩色の説にしたがっているが、一部には造立銘説の存在することもたしかである。何れにしても五百年に近い年月を経て、しかも郷土史との結びつきの明らかな銘文の存在は尊重さるべき文化財として重視して行きたい。

西方寺本尊阿弥陀如来像

8 渭雲寺大聖歓喜天像　一軀

桐生市梅田町一丁目渭雲寺本堂・安置

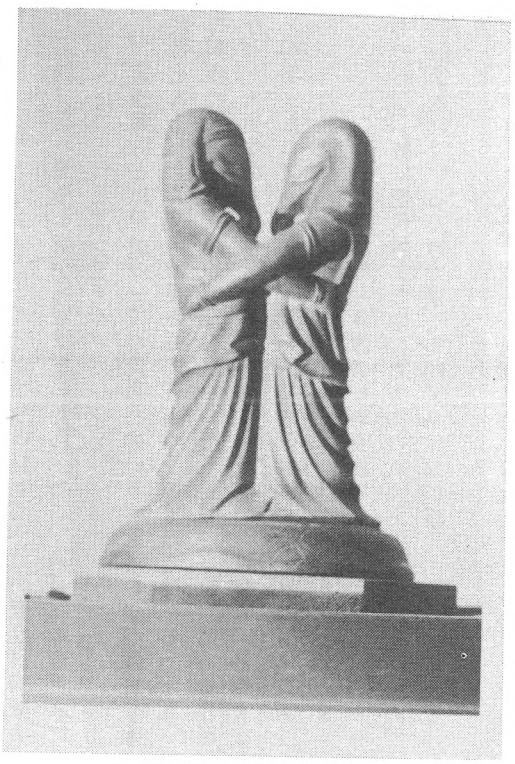
銅製　鑄造　台座モ共ニ鑄ヌキナリ

立像　渡金（現在殆ンド剝落ス）象頭人身。二天相抱キテ正立ス。左ノ天ハ天花冠ヲ著ケ、目細ク鼻牙短シ。右ノ天ハヤ、鼻長ク目広シ。面目モ慈ナラズ。二天共ニ持物ナク腕及ビ手首ニ釧ヲ著ク。裙ハ一段折返シ。スソハ台座ニ達シテ下脚ヲ全部覆フ。

台座　円形ノ伏鉢状ノ低キ台ニ陰刻ノ文様ヲ置ク

法量　像高　五寸

円形台座　直経　三寸三分



渭雲寺大聖歓喜天像

此の像はいつ頃から当寺に伝えられているのか不明であるが、一寸禅宗寺にはあまり縁故のなさそうな天部像で、ごく最近まで秘佛として保管されていたものである。昔は当寺は隣寺西方寺の末寺総代の寺院で、その開山は西方寺三世の雷溪禅師がなっている。古記録古文書の類をみても聖天堂のようなものはなかった。然しこの裏山の一つにお聖天山なる地名が存しているからこの像もそこの堂宇に祭られていたものが、此の寺に移されたものかも知れぬ。又此の山は桐生城本丸から辰巳の方角に当っているが、何か方位的に意味があって、此の像が祭られていたのかも知れぬ。年代的にみても桐生城の完成は南北朝

のはじめのころであり、この像も鑄肌のなめらかさといゝ、その重量のある点からみても、その頃のものかと推定されるのである。以上の推定が当を得たものであるとすれば此の像も又郷土史において重要な意味をもつ文化財の一つということになるかも知れないのである。

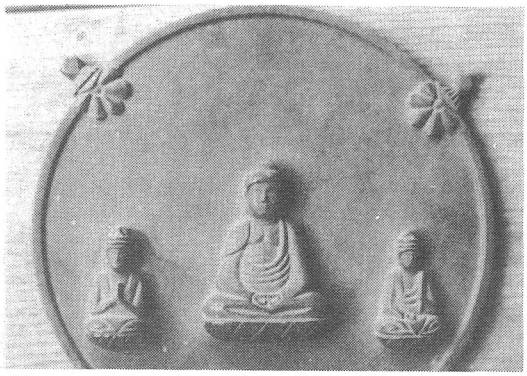
9 東禅寺鎮守
吾妻山神社　御正体三体　一懸

桐生市川内町一丁目　東禅寺本堂　保管

銅製　鑄造（俗ニ懸佛ノ名称デ呼バレテキルモノ）

座像　半肉彫　円形金属台板ニ縁ドリシ両肩ノアタリニ花弁状ノ懸垂ノ為ノ吊手ヲツケル。台板ノ中央ヨリヤヽ下ツテ中尊ヲ鑄出シ左右ニ脇佛ヲ鑄出スル。中尊ハ如来形座像定印ヲ結ブ。左右菩薩形。右方ハ未敷蓮華ヲ持シ左方ハ合掌形　阿弥陀観音勢至ノ三尊ナルベシ。背面ニ「御正体三躰」ノ陰刻アリ。

法量　懸盤直経　六寸六分



東禅寺蔵　御正体三体（懸仏）

中尊　二寸五分
脇佛　各一寸七分

この懸佛の保管されている東禅寺は鎌倉建長寺派に属する臨済宗寺院で、鎌倉末期に佛乗禅師を開山として開創された寺であるが、同寺には桐生市指定文化財となった建武五年在銘の石造角塔婆が残されている。この事は少くとも此の寺が当時すでに寺号を称さないまでも堂なり菴なりの信仰施設を保有し、同時この処の東山（吾妻山）の信仰も東山神社なり愛宕山明神なりが祭祠されて居り、このような御正体をかゝげて礼拝する信仰の実体が存したのではなかろうか。何故とならば、東禅寺の本尊が阿弥陀如来であり、御正体の本地佛が弥陀三尊であり、角塔婆の四面には南無阿弥陀佛の六字名号が大書されているのをみても、此に三種の信仰的遺物が同一信仰によって結ばれているのが明らかであるからである。換言すれば此のような時代と信仰を背景としてこの御正体も造られたのであるから、多少その製作年代が下ったものとしても信仰状態に急激な変化が発生したとも考えられないから、さほど不思議とする必要もあるまいと思う。

10 法楽寺御正体　三軀（旧賀茂神社本地佛）

桐生市広沢町六丁目　法楽寺安置

木造　材質欅材　像ト円形光背一木丸彫素地

毘沙門天像　正面ヲ向キ、甲冑ヲ付ケ両手屈臂。両足ヲ組ンデ岩上ニ座ス
像高　五寸九分　光経　七寸三分五厘

吉祥天像　正面ヲ向キ宝冠ヲイタダキ美裳ヲツケ岩上ニ座シ両足ヲ踏ミサゲル
像高　四寸八分　光経　五寸八分

善賦師童子　斜左方ヲ向キ美豆良ヲ結ビ袍ヲ著ケ、両手デ宝筐ヲ捧ゲ岩上ニ端座ス
像高　五寸〇分　光経　五寸五分

我が国では平安朝以降、神仏混淆ノ信仰がさかんとなり、その結果、神像も仏像の形によってつくられたものが多く出現する事となった。特に密教の加持祈禱は、日本の古来の山岳信仰と多くの類似点があった結果、いつしかこの両信仰は次第に接近し融合して両部の信仰となり、以后各時代を通じて、民間信仰中有力なる地歩を占めて来たのである。これらの信仰団体ははじめは単に「神鏡」を御神体として崇拝したが、仏教信仰と結合した後は、いつか鏡面に毛彫の藏王権現の神像が彫刻されるようになり、やがては「御正体」と称されて垂迹の仏

体が次々と彫り出され、更には押出佛として鑄造されるようになっていった。こうして所謂「本地佛」と称されて、弥陀三尊や観音、薬師等の像が神社の奥や持佛堂の本尊として崇拝されるようになった。これが即ち「御正体」又は「懸仏」として鎌倉、吉野、室町時代に盛行したのである。

本像はおそらく室町期の製作と思われるが、丸味のある表現は、刀法こそ鋭さはないにしても穏雅な尊容はまことに親しみのある姿である。この尊像が、神社では毘沙門天像が健津身命、吉祥天が玉依姫命、善賦師童子像が別雷命として拝されていたようである。これらの諸神は賀茂上下社の主祭神であるのでかく称されたものであろう。たまたま明治の神仏分離の際、いろいろな事情があって、当寺に伝えられるようになったという。

11法楽寺千手観音像　一軀

木造（桧材）　寄木造　肉身金箔押。著衣黒古色塗。玉眼。冠。胸綴瓔珞銅製。持物木製

立像　頂ニ佛首、菩薩首、正面ニ立像化仏ヲ著ク。天冠台彫出。冠ヲ著ク。三眼玉眼嵌入。胸綴瓔珞ヲ著ク。八臂。（合掌ノ手。宝鉢ノ手。日月牌ノ手。三叉戟錫杖ノ手。）条帛ヲ懸ク。天衣両肩ヨリ懸リ両脇ニ垂下ス。裙三段折返。両足ヲ揃エテ立ツ。

法量　像高　三尺七寸五分

台座　五色（切付蓮華。反花。岩。二段框座）

〔備考〕　肉身漆箔。著衣古色後補。頂上仏首後世作。冠持物後世補作。台座後世補作。光背後補。

寺伝に依れば、千手観音となっているが、この尊容は少し違いがある。千手観音は双眼四十臂であって三眼八臂の姿はない。三眼八臂の観音は不空羂索観音であるが、この場合は頭頂に佛首を着けず、腹前に宝鉢の手をつけないものである。頭上の佛首、佛面は十一面観音と同じであるが、十一面観音は三眼八臂の場合はなく普通の場合は双眼二臂であり、密教では四臂の場合も時にはある。それ故この像は、千手観音に類する像容、不空羂索観音に共通するところ、又十一面観音に類似する特長があり、同時に何れにも類しないところもあるので全くその正しい名称が付し難い。そこで此のような姿は当初からのものなのか、途中で修理の際に誤ったものなのかよくわからないが、名称は寺伝の千手観音としておく外はないであろう。

法楽寺　千手観音像

扱製作手法に於ては、鎌倉期の写実主義を基調においているのは明らかであるが、類型的で気力に乏しい点などを考え合わせると、室町期の作品であろうし、又地域的にみても地方作であろうと考えられる。

12勢至菩薩像　一軀

桐生市広沢町六丁目　飯塚癸巳三氏蔵

木造（欅材）　一木造　素地　衣文ニ墨書文様アリ

「彫刻（仏像）」４５・４６頁は

個人情報が含まれるため非公開

# 石造美術

## 八幡神像

新田郡尾島町大字世良田
天台宗普門寺

右志者源政氏當自
義家第八代孫八幡　正元々年
大芹奉造立仍壽福増　巳未十月六日
長息災延命恒受快樂也

高三十三cm。
素木衣冠束帯立像、冠のみ黒く塗る。
台高一・七cm、巾二〇・五cm、奥行十三・八cm、木造雲綱（ママ）寺境内にありし八幡宮の神体なりしという。
銘は像の背面帯より下方にあり、紀年銘は袴に書す。

## 板碑

新田郡尾島町大字堀口
真言宗静蔵寺
同郡同町大字堀口字ザラメキ出土

大壇（ママ）那沙弥西願
秋平二入道　沙弥
沙弥實阿　菅原國文

毎月十四日于時文永十弐年戊甲八月時正第三番白

僧榮円　藤原時□　源常家
僧幸信　源清重　藤原富光
沙弥如蓮　源富村　高麗景吉

総高百五十六・八cm、幅四十九・五cm、厚五・三cm、上部及右下半欠。
種子弥陀三尊。
時正は彼岸の仲日にて秋平、高麗等武蔵武士の名も見ゆ。
昭和十一年五月八日地下一六五cmの旧利根河道より発見さる。

## 板碑

山田郡毛里田村大字東今泉
曹洞宗曹源寺

右志者爲一結現當
丙中春敬
建治二年
子十七人白
二世悉地圓満也己上

総高約百十五・五cm、幅五十二・八cm。
中春は二月、十七人結衆造立せしものである。

## 板　碑

新田郡尾島町大字堀口
真言宗浄蔵寺

右志者爲過去
建治二年丙子七月
慈父往生極　（下欠）

下欠、総高百二十八・七㎝、幅三十七・六㎝、上方三十三・六㎝。種子弥陀三尊。各種子に蓮台あり。次に、ア、ピ、ラ、ウン、ケンの胎蔵界大日真言を書き、上部に浮彫の精巧なる天蓋を表現す。

## 多宝石塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

敬白
奉造立多寶石塔
右所造立如件
建治二年丙子十二月廿五日
第三代住持比丘院豪

総高二百三十四・三㎝、塔高二百一㎝、胴囲二百十九・五㎝、基台高四十九・五㎝、幅八十二・五㎝角。基台の底面に秘して雄渾なる筆致で銘文を表す、恐らく院豪その人の筆蹟であろう。院豪は本朝高僧伝に依ると「字一翁、寛元初年入宋、弘安四年寂、勅諡圓明佛演禪師」とある。

## 板　碑

新田郡尾島町大字岩松
真言宗金剛寺

㈠右志者爲沙弥円佛逆修
正和四季乙卯八月時正□□
善根出離生死證大芹也
㈡右志者爲比丘尼妙蓮逆修
正和四季乙卯八月時正敬白
善根出離生死證大芹也

全長約九十九㎝、幅五十二・八㎝余。緑泥片岩。種子弥陀三尊。同一形式のもの並立す。芹は菩提の略字。

## 宝篋印塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

正和五年
（梵字ア）
四日八日

台座のみ高二十六・四cm、幅四十六・二cm。

## 板碑

山田郡毛里田村大字東今泉
村社鹿島宮

文保元年丁巳四月六日　生年四十八
沙弥行全滅

全長九十九cm、幅四十九・五cm余。

## 五輪塔

新田郡宝泉村大字別所
真言宗円福寺

沙弥道義七十二□去
元享四季甲子（ア）六月十一日時巳

総高百五十五・一cm、地輪高二十八・一cm、幅四十九・五cm方。
水輪高三十八cm、火輪高三十六・三cm、底辺五十六・一cm、空風輪高五十六・一cm。
地輪正面種子を挾んで記銘あり。
各輪には種子を配す。

## 宝篋印塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

慈阿弥陀佛生年五十一
暦應貳年己卯五月十九日

総高百二十二・一cm。
塔身四方に胎蔵界の四仏の種子を配し、南開敷華の左右に銘を記す。
今北向。
上野名跡志には五月十五日とあり。

## 板碑

新田郡尾島町大字安養寺
新義真言宗明王院
同寺境内出土

前刑部卿
源　義助

康永元年壬午六月五日　生年四十二
逝去

高百四十cm、幅四十九・五cm。
種子弥陀一尊、蓮台あり。

紀年銘の左右に梵字光明真言があり、下方部に銘文がある。
銘につきては論争盛に行われしが尚定説なし。

## 五　輪　塔

山田郡川内村大字西小倉（現桐生市）
臨済宗崇禅時
門前水田中より発堀

康永三年甲申十一月十八日妙阿

地輪高二十九・七cm、前幅四十二・九cm、横幅四十一・二cm、上面中央に径十八・二cm、深十二・二cmの孔を穿つ。
凝灰岩。
空風両輪無く、火水両輪と断ず可きものあり。

## 五　輪　塔

山田郡毛里田村大字市場字道場

喜阿弥陀佛
貞和二年七月

## 板　碑

新田郡尾島町大字岩松
無格社義国神社

世良田臣

逆修結衆
観應二年辛卯十二月十五日
四十六人

上欠高九十二・四cm、幅四十二・九cm。
キリクを欠けるも種子は弥陀三尊と推定。
右端に「世良田臣」の後世の追刻があり、大正末期、丸山瓦全、岡部福蔵両氏の論争が「上毛及上毛人」誌上に展開さる。
（五八）に酷似す。

## 宝　篋　印　塔

山田郡毛里田村大字今泉
曹洞宗曹源寺

右□法謙
法性□
（聖力）
諸□靈
頓證□
乃至法界衆生
平等利益也
延文五年庚子八月日敬白

## 宝　篋　印　塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

（向右）
貞治四年□□仲
（向左）
（不　明）

台座のみ高三十六・三cm、幅三十九・六cm角、反花高八・二五cm。
いわゆる関東型、二間の繰込を作り銘を分刻す。

## 宝　篋　印　塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

十　月
貞治五年丙午
十三日

高百十五・五cm、台高三十八cm（繰出共）、幅四十九・五cm。
基台東面に銘文あり。
塔身には東西南北にバ、バム、バー、バクを書す。

## 宝　篋　印　塔

新田郡木崎町大字中江田
旧来迎寺境内

大才
應安三天
庚戌

結衆
六月十五日
敬白

総高百四十八・五cm。
相輪及塔身欠除、相輪は五輪塔の空風輪、塔身は他の角石を以て補う。

## 宝　篋　印　塔

山田郡川内村大字西小倉
臨済宗崇禅寺

七分　（向って右側）
全得
浄慶　（正面とすれば）
逆修
永和四　（向って左側）
十一月廿

台高のみ高十六・五cm、幅二九・七cm角。
二間の繰込に各一行宛刻名し、三面に及ぶ。
七分全得は「追薦七分獲一」の俗語。他の為に追福を為せば他は一分自らは七分全く得の意。地蔵本願経に出づ。現在寺の後庭に（一〇〇）（一〇八）等の台石二、三と共に積み上げあり。

## 木　像

新田郡世良田村大字世良田

天台宗長楽寺（開山堂）

（背銘）
至徳三年丙寅六月五日是修理都寺了方

（前衣裏銘）
文明十戊戌年十二月晦日
重而修理施主琠首座敬書
明應乙卯九月上旬重修理
施主祝典

高九十五・七cm、身底迄六十四・四cm、膝張五十四・五cm。
座像、椅に座し衣を垂る。
玉眼入り寄木造り彩色。
寺伝　新田（徳川）義季公像、銘は二処に在り、尚寺伝の書に「康永元年壬午再興」の銘ある由を記せど今不明。
夫人の像もあれど此の方には銘なし。

## 宝篋印塔

新田郡世良田村大字世良田
天台宗長楽寺（境内文珠山）

預修造立
沙門礼□
至徳三丙刃
六月晦日

台座のみ、高二十三・一cm（繰出二段）、幅二十三・一cm角。

いわゆる関東型にて銘を二間に二行宛書分く。
晦日と記したのは珍らしく美濃国龍安時鐘銘に「至徳元年甲子季秋朔丙申晦日乙丑」とあり。

## 地蔵石像

山田郡川内村大字西山田（小学校北方）

（向右）
爲妙音禪尼證大菩提也考子志□（力）

（向左）
應永己丑佛生日

高六十六cm（台除）。
舟型、地蔵尊像陰刻。
路傍約六十六m²位の地に石碑十数基立てる中の西側列中央。
碑面殆ど一杯に像を刻し基の左右に銘を附す。佛生日と書けるは珍し。

## 宝篋印塔

山田郡川内村大字西小倉
臨済宗崇禅寺

㈠ 頓菴俊公
大禅定門
永卯八月
十四日

㈡ （頓菴力）
歸眞□□

俊公大禅
門靈位

于時應永十
八年辛卯八月
十四日□□

台座のみ、高十四・九cm、幅二十八cm角。
いわゆる関東型、（八九）（一〇八）等の台石二、三と共に積重ねられてあり。
(一)の銘の向って左の側に(二)を刻す。
何れも二間に書割る。

## 宝篋印塔

新田郡世良田村大字世良田
天台宗長楽寺（旧墓地）

逆修
了性禪尼
壽塔
應永廿四年
七月日

基台のみ、高十六・五cm、幅三十・三cm。
安山岩
いわゆる関東型。了性禅尼、寿塔の間に於て書分く。

## 宝篋印塔

山田郡川内村大字西小倉
臨済宗崇禅寺

造立旦那全教
道音
應永二十九壬
寅
十一月七日

台石のみ、高二十三・一cm、幅三十九・六cm。
いわゆる関東型にて左銘面を二間に分ち刻銘す。
（八九）（一〇〇）の寶篋印塔台石その他と共に寺の後庭に積重ねあり。

## 五輪塔

新田郡尾島町大字岩松
時宗青蓮寺

青蓮寺十一代
預修　相阿弥陀佛
文明九年丁
酉六月日

地輪高二十五cm、幅三十二・七cm。
他の四輪は異物。

## 石燈籠

新田郡宝泉村大字別所
真言宗円福寺（境内）

性佛上座　法界衆生
千代松女　平等利益
宗悦上座
長享三年己酉十月廿四日
性王禪尼
宮一　　本願道見上座
妙禪尼
徳松
宝泉禪門

総高百四十八・五cm。
火袋に七体の地蔵を浅く浮彫してある。
道見が本願主となり性仏、千代、宗悦外八名の供養のために造立したものであろう。
宗悦上座は「新田正伝記」に「横瀬信濃守国繁長享三年五月十五日逝去、法名笑山宗悦庵主」とある。

## 石燈籠

山田郡川内村大字下山田
天台宗観音寺（門前）

大日本上野加山田郡須永卿
下仁田山窟佳

奉爲逆修功徳主妙霊位
于持永正九天壬春
申三月五日敬
白

総高約百六十五cm、角竿部高五十六・一cm、幅二十三・一cm、台座高二四・八cm、幅三十三cm。
粗鬆安山岩質熔岩
「大日本」と頭に書けるのは県下に他に例がない。この辺一帯須永卿で、川内村は下仁田山とも呼ぶ。
火袋に七地蔵を浮彫すれど火袋以上は異物。

## 宝篋印塔

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺（旧墓地）

前長楽寺
叟叔和尚
大永二年壬
午
五月十四日

台石のみ、高二五・四cm、幅二九・七cm。
いわゆる関東型。
側面を二区に分ち輪郭をとり刻銘す。
石質砂石か。

## 宝篋印塔

新田郡尾島町大字小角田
真言宗観音寺（境内）

隆筭法中
大永二年八月彼岸壬午

台座のみ、高三十四・九cm、幅三十一・三cm、台座に二段の造出あり。
安山岩。

## 石燈籠

山田郡川内村大字西小倉字掘内
薬師堂（境内）

奉彫刻石塔六地蔵大菩薩
右意趣者爲奉納
大乗妙典六十六
部之供養也伏願
依此功力現世安
穏後世善処乃至
法界平才利益焉
大永三年关三月吉日
未
願主光因坊
權少僧都榮賢敬
白

高二百十三・八cm。
塔身七角七仏陽刻。
銘は竿部周囲全面に陰刻さる六地蔵とあれど七仏を刻す。その中の一体は或弥陀なりや不明。

## 華鬘

新田郡世良田村大字世良田
天台宗長楽寺

正法院　天文二年
榮乗一流　一貫二百

長二十六・四cm、幅三十三・六cm、輪郭幅〇・七cm。
金銅打抜。
蓮華唐草模様金銅打抜瓔珞七個の筈なれど何れも欠除、極めて粗雑なる作なるも当時衰退期に於ける在銘の遺品として（一七七）と併せ見る可きもの。
銘は結紐の緒締より垂れし二條の紐型に陰刻す。

## 華鬘

新田郡尾島町大字世良田
天台宗長楽寺

(一)
世良田山真言院　本願威徳坊榮尊
大和尚位　義忠　天文十四年乙巳敬白

(二)
世良田山真言院　本願真言院衆中
大和尚位　義忠　天文十四年乙巳敬白

長二十六・四cm、幅三十三・六cm。
金銅打抜。

ただし模様は左右均斉
栄尊は長楽寺第廿三世。
義忠は長楽寺第廿世、長楽寺法系考証文に常陸国行方郡西蓮寺義忠とあり。

## 五輪塔

山田郡梅田村大字上久方
臨済宗西方寺（墓地）

（後補）
松岩正根居士
（梵字）　孝子
敬白
頓證菩提者也
天文廿四乙卯年五月廿八日

地輪高二四・八cm、幅三十三cm。
空風水火の四輪は異物。

## 鰐口

新田郡生品村大字小金井
曹洞宗東雲寺
永祿七申子年九月十二日
願主　珠益沙門
径十九・八cm。
青銅製。

## 五輪塔

新田郡世良田村大字世良田
天台宗長楽寺（旧墓地）
天正拾年壬午臘月十一日
総高百四十三・五cm。
安山岩。
各輪上部より空、風、火、水、地の五文字を刻し地輪向右に紀年銘あり。

## 板碑

山田郡川内村大字西小倉
小泉家邸祠日天社境内

(一)
此佛不知由來記云至于今（カ）周宗
年辛夘四千七百五年了毀壞不新（置力）
弥陀王子時慶長六年辛夘十一月十五日
敬白

(二)
是（カ）処於斯奉再興以伸供養
依此善事現世安穏後生善處者也
（力）西王

十一月十五日
西王于時慶長六年辛夘

逆修善主本願周宗

高五十九・四㎝、幅四十二・九㎝、
頭部欠損、破片は社殿中に保存。
緑泥片岩。
種子弥陀三尊
古碑を利用し新たに銘を刻せしものの如し。
刄は丑。

(二)
高九十九㎝、幅三十九・六㎝。
緑泥片岩。
種子弥陀三尊。
古碑を利用し新に銘を刻せしものの如し。

## 画像板碑

邑楽郡邑楽村大字赤岩
真言宗光恩寺

藤原吉宜　藤原兼吉　結衆
紀真正　大春日光行　辛未
弥五郎入道　藤原安置　文永八
大檀那　六郎房　藤原國元
阿闍梨　日□友安　藤原時守
辛海　伴吉□　平貞吉　佛蓮□
□□恒吉　藤原貞□　八月□□
藤原光吉　日上□房　敬白
藤原友重　藤原助吉
藤原貞守

総高二百九十七㎝、幅七十二・六㎝、厚十九・八㎝。
地蔵立像、高八五・八㎝。
寺伝に依ると弘仁五年弘法大師遊化のときの草創という。当時徳川初期の縁起に「安置大師御作地蔵菩薩御丈八十八・一㎝、御堂鏤ニ七寶一本尊坐ニ智蓮一」云々とあるから、弘法大師作の尊像があり、信仰篤かりしもの、之を板碑に模し地蔵講結衆の二十名で造立したものである。
本尊は早くも失われているから必然に本板碑が「弘法の爪描き地蔵」と呼ばれたのであろう。

## 画像板碑

邑楽郡館林町木挽町
村社愛宕神社

右志者爲過去慈父出離
生死往生極楽成仏得道
文永第十年癸酉二月□敬
十三ヶ年十二人孝子白

上欠、総高二百一・三㎝、幅五十七・八㎝、厚九・九㎝。
地蔵立像、高九十七・四㎝。
碑の下部に本銘あり、十三回忌に当り亡父の爲め十二人の遺子共同供養せしものである。

## 異形板碑

邑楽郡邑楽村大字赤岩
新義真言宗光恩寺

建武二年　賢
　　阿
七月十五日　逆
　　修

高百三十二㎝、幅六十六㎝、厚さ五十九・四㎝。
安山岩。
表面頭部は板碑特徴の三角形をなし二条の横線を刻み、弥陀の種子を配す。
本県に他に類例はない。

「芸能」５９―６９頁は

個人情報が含まれるため非公開

「古文書」７０－１６６頁は

個人情報が含まれるため非公開

# 有形民俗資料

## ー漁労用具を中心としてー

### はじめに

東毛、特に邑楽、館林地方は、北に渡良瀬川、南に利根川、中央を谷田川、矢場川が流れる低地で、多々良沼、近藤沼、城沼、古城沼、茂林寺沼、蛇沼、板倉沼などの大小の池や沼が分布し、群馬の水郷といわれた地域でもある。こうした地形は、ひとたび洪水に見まわれるとなかなか水のひかない湛水になる。「蛙が小便しても水が出る」といわれるほどの水害の多い板倉町などでは、古くから屋敷の中に水塚を設け、納屋の天井や母屋の軒下に「揚げ舟」をつり下げて水への備えをして来た。

このような自然条件の中では、排水機場が整備され、土地改良が行なわれるより以前は当然のこととして農業は思うにまかせず、蓮根の掘りとりはもちろんのこと、漁業収入に頼ることもなく、古くからさかんに漁労が行なわれて来た。川の漁労と、池や沼の漁労との二つの漁労の伝承をもち、県下でも独特の漁具、漁法を現在に残している。その特色を上げると次のようになる。

1. アミ類の使用
　アミ類にも、投網、四ツ手網の外に袋網（マチアミ、ハリキリ）、サシ網、追いこみ網、などを豊富に使用している。
2. 多様なウケを使用
　ハチブセの外、ドジョウウケ、ウナギウケ、カジカウケ、ナマズウケ、ビンウケ、アミウケ、ゴキウケ、ゴキアミ、ダルマウケ、さらには糸網による網ウケ、グリアミ等の多種多様のウケを使用。
3. ハズアミの使用
4. ブッティ類の使用
　舟の上から使用するナゲブッティ、ブッティ、モロカキや、舟につけて沼の中をひきまわして魚をとるエビブッティ、ヒキチガイブッティがある。
5. ウナギカキの使用
6. フセブネやシバヅケ
　沼の中に舟を沈めておいて魚をとるフセブネ、沼の中にホヤや雑木の丸太などをふせこんでおいてフナやコイなどをとるシバヅケ（キリコミ、オオキリコミ）漁法がある。

その他の漁法を含めて、川と沼の漁法のそれぞれをもつ邑楽・館林の漁法の多様さと、これに対応しての漁具の存在は、海をもたない群馬としては注目すべきものであり、隣接する栃木、茨城、埼玉各県のそれとの比較対照も必要な作業ではあるが、早急な保存措置がのぞまれる。

### オキバリ

女竹の棒にウナギ釣バリをつけた糸をつけ時期によってくふうされたエサをつけて、夕方、用水や沼の中にしかけておき、翌朝上げてウナギ、ナマズ、コイなどをとった。ウナギの場合には、春先から彼岸ころまではトウキョウヒル（血を吸わないもの）、土用すぎるとタナッペラや子ガエル、八月上旬は生きたドジョウなどをエサとし、ササミミズ、トンボムシも使った。

ナマズを主目的にしたオキバリはトビツキといい、170㎝くらいの女竹の棒に、65㎝ほどの長さのカツ糸にハリをつけ、ミミズや生きたワッサの尻にハリをさして、夕方、沼のあちらこちらへさして来る。ウナギバリよりも浅くしかけるが、ナマズは一度にエサを食わず、近づいて様子をたしかめてからパクリと食いつくのでトビツキという。目印にはヨシの茎などを使う。

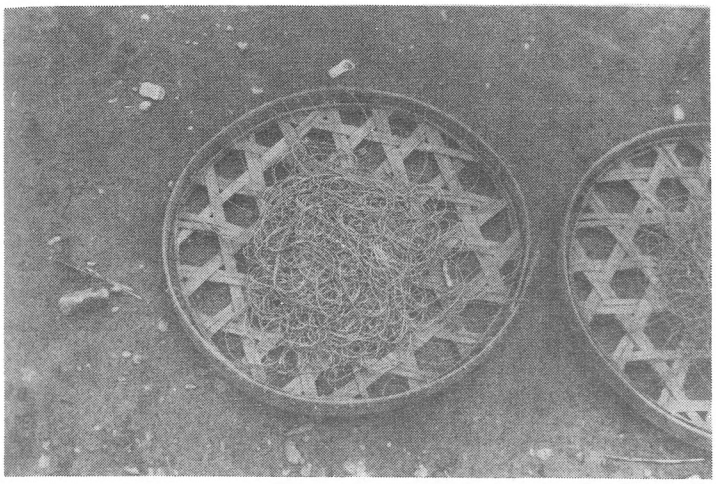
## ナガナワ

ナガナワは、海のハエナワ（延縄）と同形式のもので、県内では板倉沼と城沼で使用されただけのようである。

ナガナワは、ハリ間3尺（約90㎝）ときまっており一本のナガナワにはハリ80本、ナワの長さ40間以上（約72ｍ）が一枚となり、竹製の浅い平かごに入れられて、一戸、家族四人がかりで、二〇枚担うのがようやくだったという。

ハリは二種あり、夏はふつうの魚釣りバリを使用し、冬はアギ（カエシ）のないハリを使う。冬のハリはアカ（真鍮）の針金を切って自家製のハリを使用した。

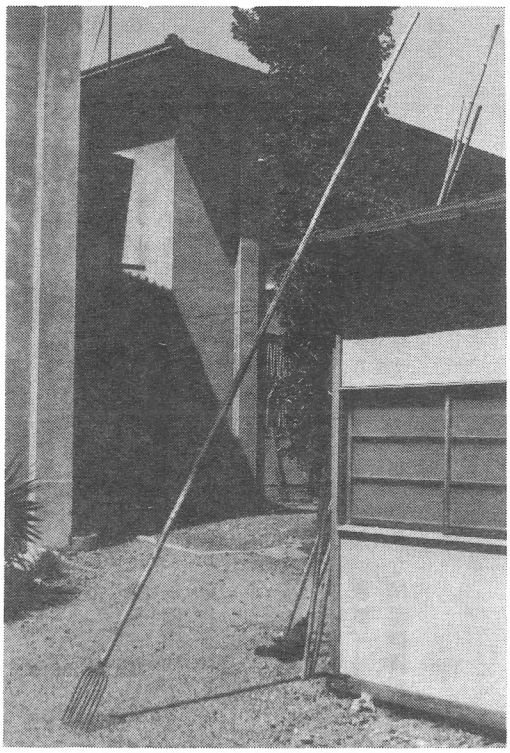
ヌカエビをエサとし、夕方、舟で沼の中に流して来て翌朝上げる。ふつう一枚で200匁から300匁（750～1125ｇ）のアカブナがとれるが、最高にとれた時は一枚一貫匁（3.75㎏）ということがあったという。群馬の漁具としては珍しいものである。



ナガナワ
（板倉町　新井七蔵）

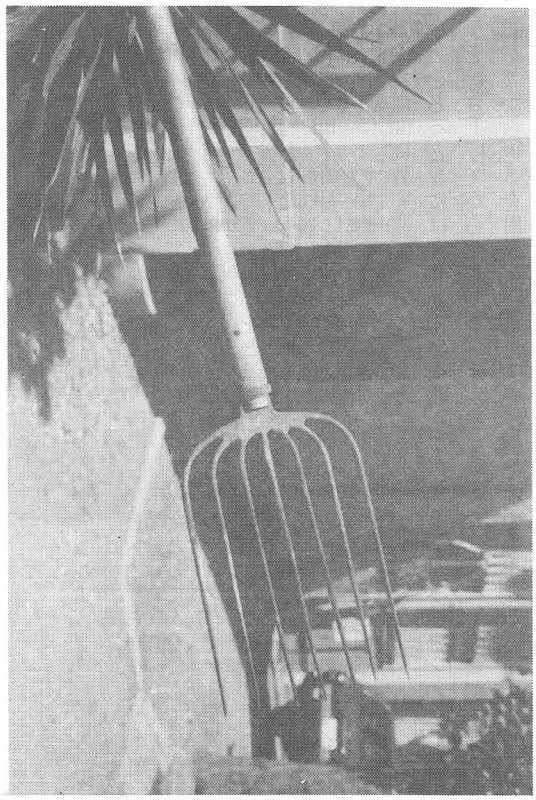
## ヤス

城沼で使用されて来たヤスは、コイやフナなど大きい魚を目的としたヤスのため、鍛冶屋に特別注文してつくらせたもので、カネが軟いと固いものを突いた時に刃先が曲ってしまってだめになるのだという。フナ用のものにはアギとよぶカエシがなく、コイ用のヤスにはアギをつけている。何れも舟の上で使用するもので、深い水の中を泳ぐ魚の動きをみながら突いたり、魚影だけでなく、魚の動きを示すアワをねらって5～6ｍ先の方に投げこんで突くナゲヤスという技法もある。したがって柄の長さも3.5～4.0ｍというもので県内の他地域ではみられない大形の漁具の一つである。



ヤス（コイトリ用）
（館林市当郷　関口常雄）

をかいてウナギをとる。ウナギカキを竿のように使い、舟を操りながら沼の中に突っ込み、後へかいてはね上げているうちにかかる漁法は多々良沼でみられる。舟べりに柄をかけてこじるようにするこじりかきの方法もある。沼の底にもぐっているウナギの穴をみつけ、目印の篠などを立てておいて、その中間をかいてとるのは板倉町でのとり方で、春先に多い。



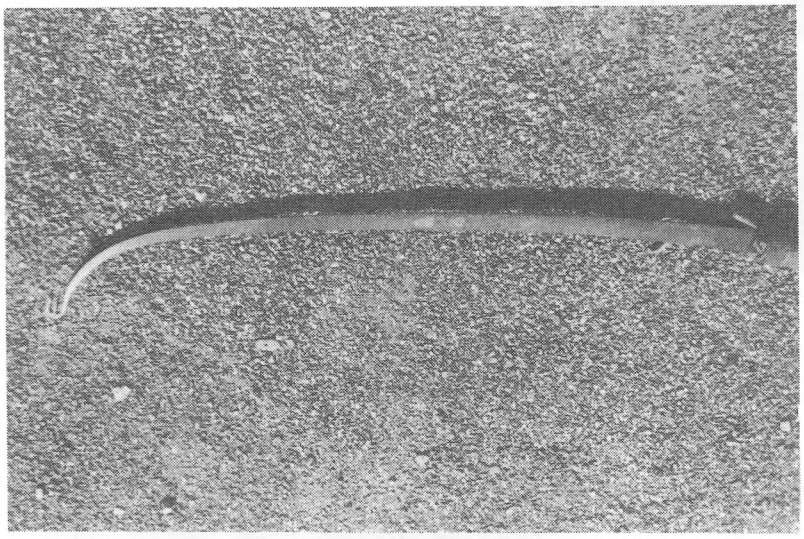
ヤス
（館林市当郷　関口常雄）

## ウナギカキ

カキヤスともいう。

水底のノロ（ヘドロ）の中をかくため、わん曲させるとともに刀のようにやや三角形のつくりとした先にカギ状の刃がつけてある。先端が三本のようになるものと、一本だけの文字通りカギ形になったものとがあるが、一本のものは欠けたために修理してできた形だという。ヤスの部分60㎝、柄の長さ250㎝。

板倉町、館林市の沼の漁労具として使われ舟の上から沼の底の泥土

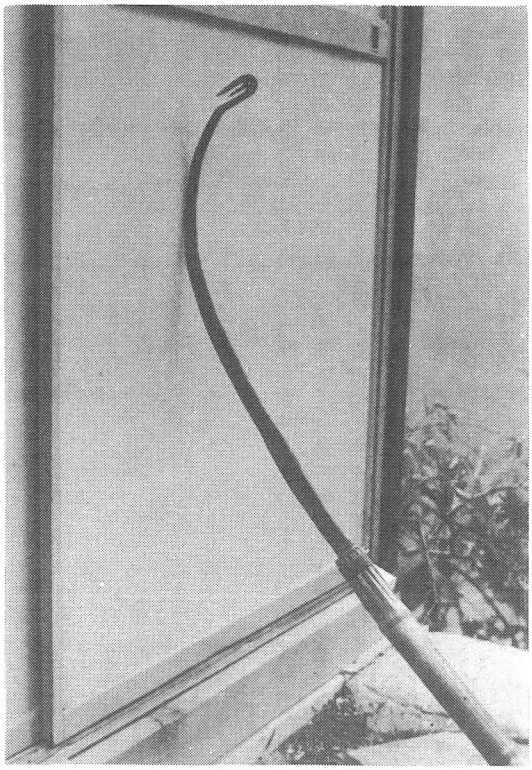


ウナギカキ
（館林市　日向漁業組合）

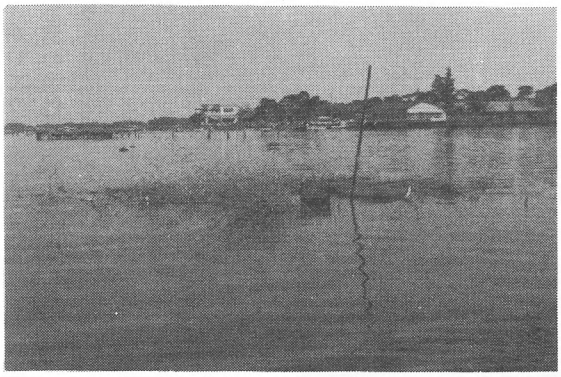
## キリコミ

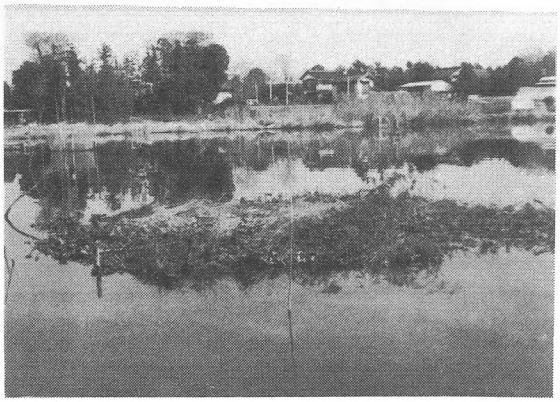
城沼で現在もやっている漁法で、秋、沼の中へソダや竹の枝、ホヤ（木の枝）をまとめて放りこんでおき、すみかとして入りこんで来るフナやコイ、ナマズ、ウナギなどをとるもので、シバヅケ（柴漬け）ともいう。フナやクチボソをとるためのものがふつうのキリコミで、コイを目的としたものはオオキリコミといい、後者は直径10㎝もの太い雑木を60～70坪、大きいのは100坪くらいの広さにしたものになる。オオキリコミの場合にはシンの部分と、まわりの部分との三つに分れるように間に竹を立てておくという。

魚をとるときにはキリコミの周囲をアミでとり囲み、マンノウでホヤをかき上げてから魚をとる。オオキリコミでは更に竹の簀で中部を囲んでからホヤを出し、ハズアミや投網で中の魚をとる。囲んでいるアミには四ツ手網や袋網をつけて、逃げ出す魚をとるくふうもしている。



ウナギカキ
（板倉町　新井七蔵）

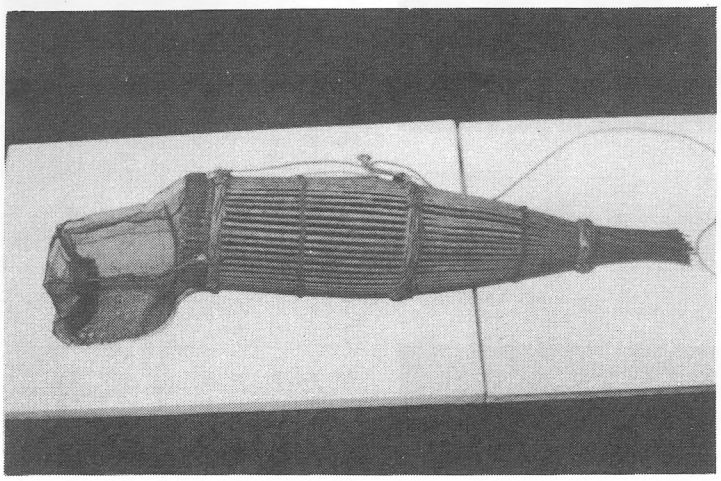




キリコミ
（館林市城沼）

## マルウケ

城沼では、ドジョウ、ウナギ、ナマズなどをとるための筒形のウケを総称してマルウケというが、最小のものはヤナギハヤをとるためのマルウケで、ザリガニ除けのアミをつけている部分を含めても全長45cm（アミの部分15cm）というもので、カエシは一つ。ネリエサを入れて、ひもで篠の棒などにつるして沼の中にふせておけばよい。ひかく的水面近くに下向きに下げておけばヤナギハヤは下の口から入りこんでとれる。（夏）　冬になると岸近くの草の根のところなどの浅い所に、エサなしで、無雑作にふせておけば、こんなことでと思うほど入っている。これをガラスでつくったのがガラスのビンドウというものである。

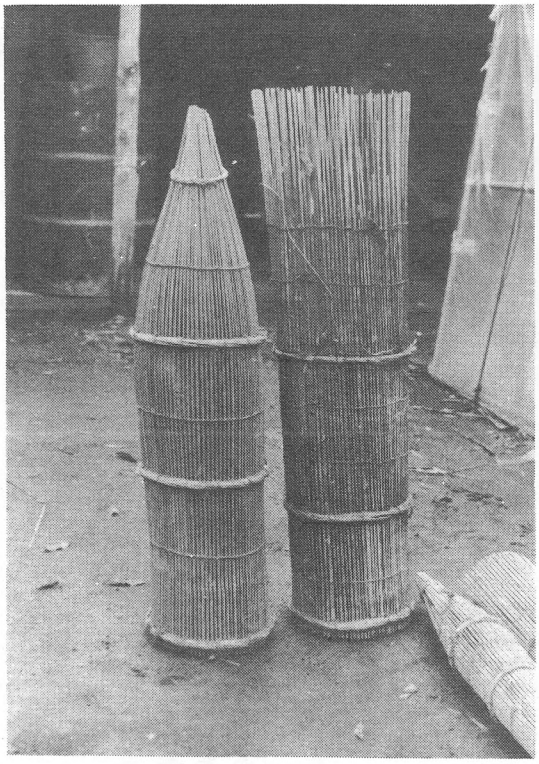


マルウケ（クチボソ用）
（館林市当郷　関口常雄）

## ドジョウウケ

カエシがクチゴシ一枚のものと、クチゴシ、ナカゴシの二枚になるものとがあるが、板倉のものは二枚のものが中心になる。大きさは使用する竹の太さ――竹ヒゴの太さと本数とできまるもので、一本の竹を割ってまとめるのが熟練者である。

コシタは、竹を長い三角形にけずって頭の方を二つ割り、または三つ割りにして割り切らずに残しておいて使うので、割った方がクチタガにつき、先端はカエシの穴の方になる。戦争前まではクチゴシの穴は小さくて、指の太さほどにつくっていたが、戦後早速に繁殖したアメリカザリガニの害を防ぐために穴を大きくしたり、城沼の場合には金網をつけているほどである。



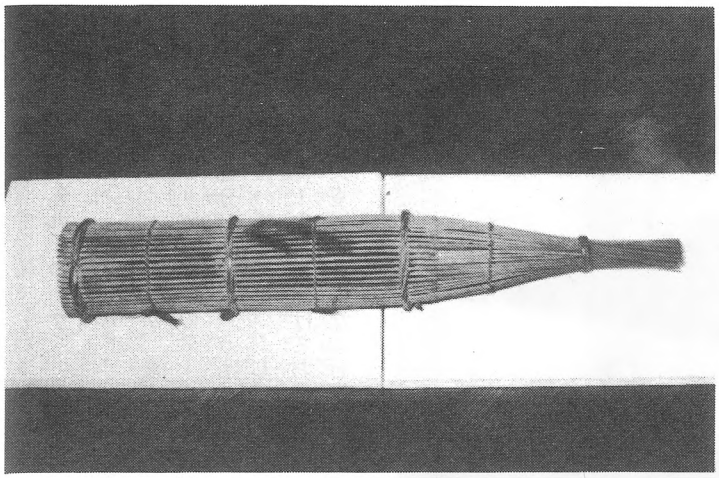
ドジョウウケ
（板倉町　老沼花蔵）

## ウナギウケ

ドジョウウケよりも細く、直径8cmくらいにつくり、クチゴシ、ナカゴシの二つをつけてウナギが逃げ出さないようにする。エサは女竹（篠の太いもの）または竹の細いものの先を二つ割りにしてウタウタメメズをはさみ、女竹の根元の太いところを輪にしてさしこんでとめたものをシリタガの方からさしこんでシリタガでとめる。

ミソウナギをとるものはクチゴシの穴を箸一本分くらいの細さとしたというが、ウケの穴のあけ方で上手、下手がきまる。

用水などのウナギが上って来そうなところにふせたり、沼の中にふせるが、沼の場合には底にくっつくようにしてふせる。目印にはマコ毛を結んでおき、夕方ふせて翌朝上げて来るのはドジョウウケと同じである。



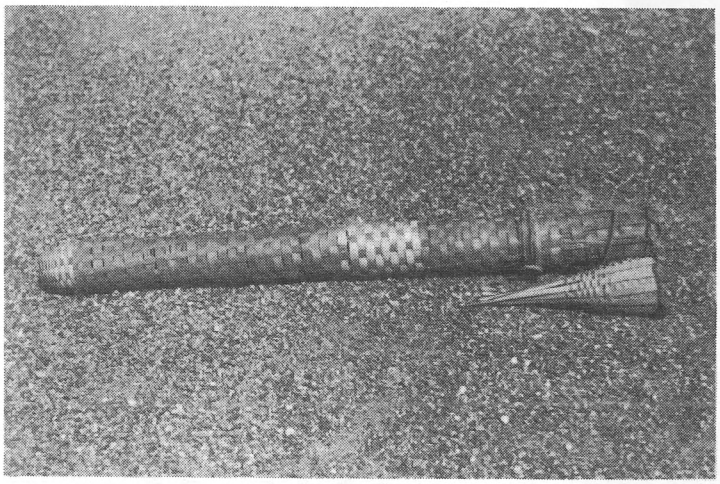
ウナギウケ
（板倉町　石山久林）

## ウナギウケ

通称ドカゴとよんだが、現在はウナギウケという。クチの方から一のタガ、二のタガ、三のタガと三本のタガがつくが、三のタガはおさえでなく、タガを内側から入れて無理にひろげるようにしてやったあとでソトタガをつける。シリタガは、エサを入れたり、魚を出したりするので外からかぶせる。

コシタは二つあり、口のところの一のコシタは小さく穴をつくり、ウナギが出られないようにしてある。

ミミズをエサにして用水などにふせ、翌朝早く引き上げるのは県下各地と同様である。

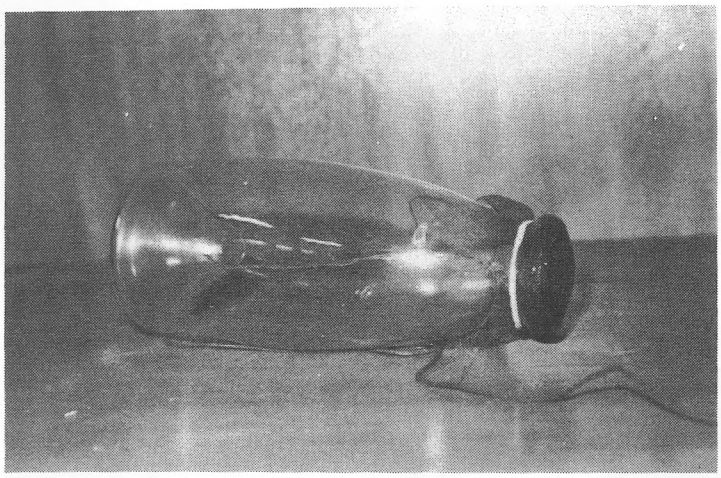


ウナギウケ
（桐生市 ― 県立博物館）

## ガラスウケ

ひかく的新しいもので、ガラス製のウケが一時的に使用された。ビンドウともいうが、ビンの底がカエシのように内側に入りこんで口がつき、シリにあたるところにはアミをかけて使う。ひもをつけて棒につるせるようにして、ネリエサを入れて沼の中にふせたが、透明なので魚の入りは悪くなかった。主としてヤナギッパヤという小魚だが、水アカやシブのようなものがつき易くて、たちまち汚れてしまうことと、ガラス製のためにショックに弱く、割れてしまう危険が多くて使わなくなった。

プラスチック製のものが代りに出まわって来たが、ガラス製よりも汚れが早いので、遊び程度にとるにはよいが、副業的にやろうとするには不都合といわれる。



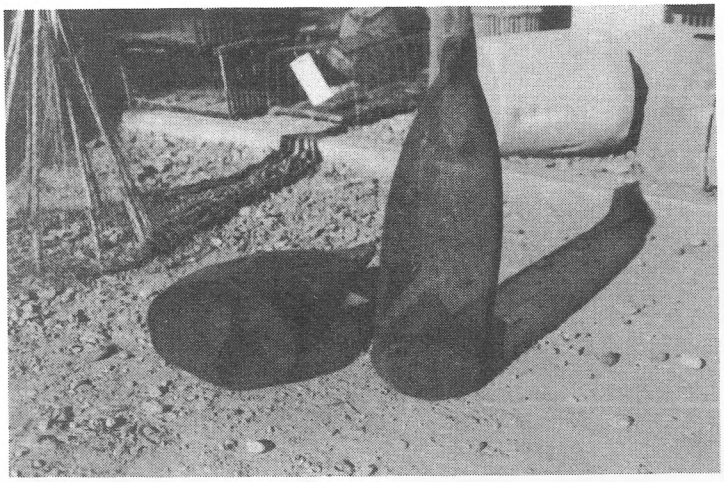
ガラスウケ（ビンドウ）
（板倉町　荒井由美）

## アミウケ

糸網でなく金網でつくったアミウケである。カエシは一つで、同じ金網を折り曲げてつくる。扁平に近いシリの一部だけ口を開けておき、ふせる時は洗たくばさみではさんでおくだけである。

夏は沼の中央部などに、竹竿にひもでつるしてふせるが、冬は、岸辺の水草の枯れた中を少し刈りとってアミがふせられてやや余裕がある程度の場所をつくり、ネリエサを入れてふせる。夏は沼底から15cmくらい上の場所にし、冬は20cmくらいの深さのところが良いといい、目印の棒を立ててておく。

アミウケの使用は46年春からのことで、埼玉の人のまねをしたのがはじまりといい、クチボソ（ヤナギッパヤ）をとるには最適で、金網もアカ（真鍮）製のものがよいという。



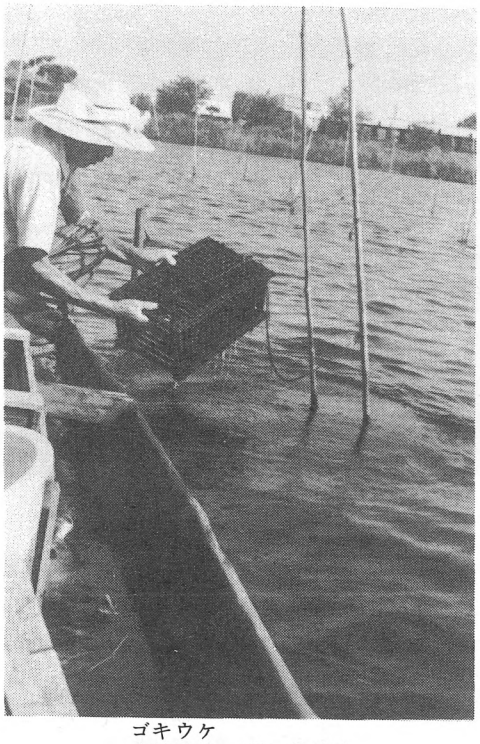
アミウケ
（館林市下三林　石川忠雄）

## ゴキウケ

竹でつくった四角のウケで、タテの長さがウケの大きさをきめる基本で、竹の根元の方の、厚みのある部分を割り、シュロナワで編んでから天井（上面）や底をつくる。ゴキウケのベロ（コシタ）の大きさは、魚のとれ方に直接ひびくので、絹糸を使ってウケの大きさにちょうど合うようなものにしてつけた。

ゴキウケは、鳥かごのようなもので、底も竹の簀のようなものになっているものが多かったが、これではエサを入れてふせるにも、魚の入りぐあいにもぐあいが悪いので、くふうされたのが杉皮の使用である。こうするとウケをしっかりさせ、長持ちさせると同時に、エサを入れても下へこぼれ落ちず、また底土と同じように見えるので魚が入りやすくなるという利点があった。

近藤沼がさかんであり、多々良沼は早くから禁止された。



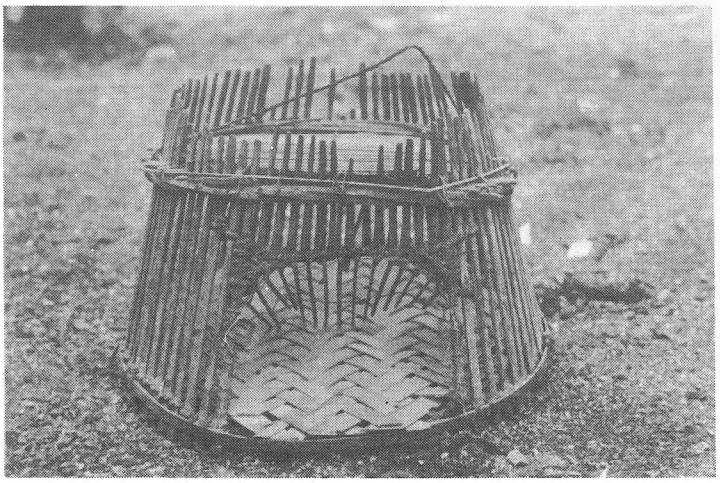
ゴキウケ
（館林市　関口常雄）

## ダルマウケ

竹ひごで円すい台のようにつくったウケのこと。上部はヤネヒゴ、側面はタテヒゴ、底部はアジロ、カエシはクチゴシ、サマ、コシタなどとよばれる。タテヒゴ、ヤネヒゴは、ともに竹ひごをシュロ縄で編んであるが、底は竹でアジロに編んでから、下からアジロオサエという竹をあてて、針金（銅線）でとめる。コシタは特別に細いひごをつくり、コシタスキという台の上で、絹糸で編んでからとりつける。

夕方、沼や川にふせて魚をとるが、エサには精麦の時に出る上糠を熱湯でこねて固めたものを使うが、コイをとるにはムギ（大麦）を入れておくことが必要である。目印にはヨシなどを使う。

ヤネにつけるひもは、クチに近い所につけては逃げられるので、後の方につけ、水から上げる時にもコシタが開かないよう

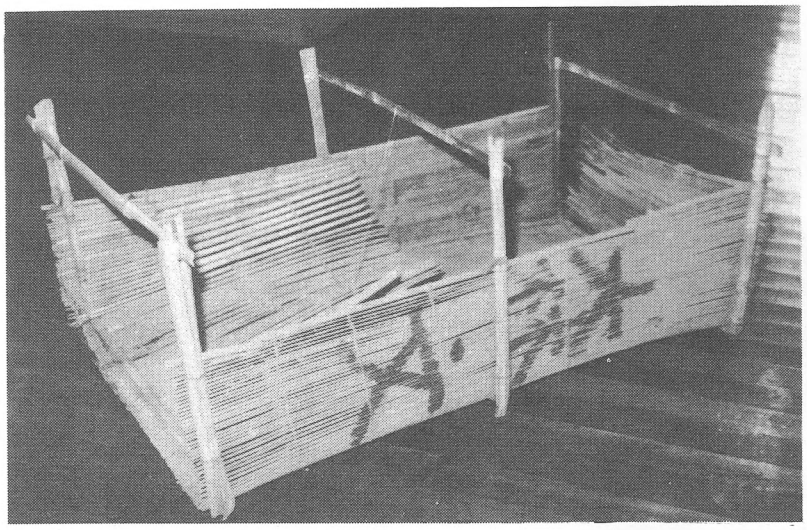


ダルマウケ
（板倉町　荻野長治）

にしている。

## カクウケ

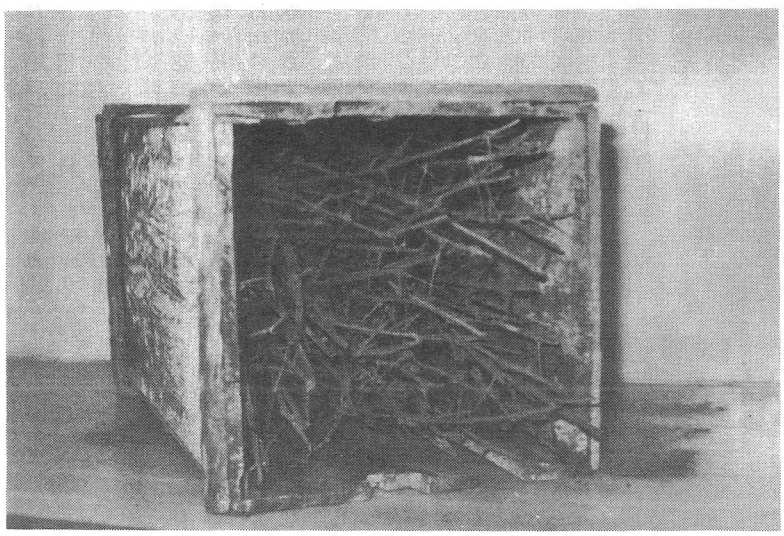
これは製作者がつけた仮の名で、他には例をみないものである。長男が義務教育学校を卒業したときの父からの贈り物として製作されたもので、一種のヤナ式につくられている。上りや下りの川魚をとるために用水（細い水路）いっぱいになるようにふせると、カエシの部分が上流側になり、川を下って来た魚がすべり上がり、カエシを越えてたまりの部分に落ちこみ、外に逃げ出すことができなくなる。上りの魚の場合でも同様である。



カクウケ
（板倉町　荒井由重）

## タルブセ

城沼で行なわれている珍しい漁具で、明治来から大正にかけてのころ、セメント樽を買って来て使ったのが最初で、次いで釘樽を利用したという。樽の中にホヤ（竹の枝や木の枝）をいっぱいつめて、沼の中の適当な場所へふせておく。夏はひんぱんに上げるが、冬は一ヵ月一回くらい上げてみる。エビ、ナマズ、ウナギ、ギギョウなどが入っていた。魚の習性をうまく利用した漁法で、魚が巣とするつもりで入るのを利用しているわけである。樽がなくなった現在では、箱を作って同様に使っている。

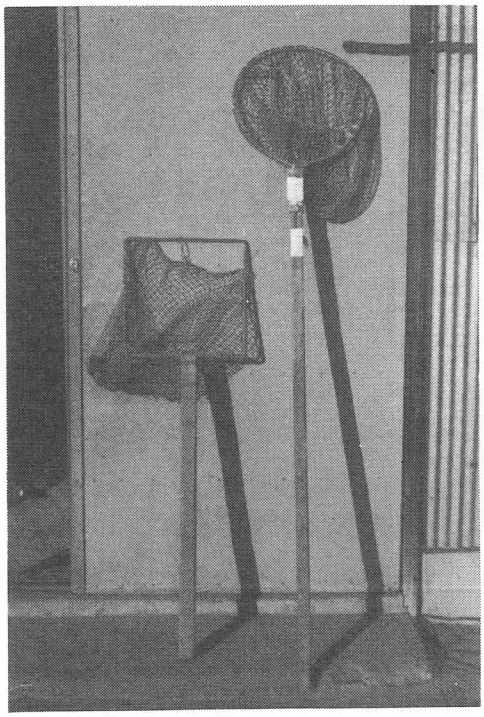


箱ブセ
（館林市当郷　関口常雄）

## シャクリアミ

追いこみ網での漁や、四ツ手網などで網に入った魚をすくい出したりするのに使うすくい網は、サデとかシャクリアミなどという。形は、古くは木の二又などになったのを使ったようで三角になっていたためでサデアミとかいわれたらしいが、現在のものは四角、または円形のものの二種である。鉄の輪が多く、木綿の網をつけた。一辺（または直径）は一尺（約30㎝）が標準とされ、板の長さ五尺（約1.5ｍ）くらいである。（多々良沼）

城沼ではタマアミ、またはタモともいわれ、定置網として使用した四ツ手網の中に入った魚をすくい出すほか、追いこみ漁の時、舟の下にかくれて、はりついたようになって出ないでいるヘラブナをとるために、舟底の下の方までもタマアミをさしこんですくいとる。こうすれば逃げこんだフナをとることができるという。



シャクリアミ
（館林市　日向漁業組合）

## ブッティ

城沼でブッティというのは、タマアミのように鉄で輪をつくり、これに袋網をつけ、長い柄をつけたすくい網で、キリコミの中などの泥深いところへ入ってしまった魚を、ノロ（ヘドロ）と一緒にすくいとるための漁具である。したがって下部は扁平になっており、泥切りが楽なようにしてある。

同種のものは板倉沼でも使われている。モロカキで、つくり方もほぼ同じであるが、モロカキの使用法の方がブッティよりもはっきりしている。沼の水が減る冬季など、沼の中や幹線堀の適当な所に、モロカキが使えるだけの巾の溝――モロを掘っておき、両端に目印の篠などを立てておく。ハズアミやその他漁で追われた魚が溝の中へ逃げこんで来るので、モロカキでかき出すようにすくえば中の魚がかんたんにすくいとれる。

ナゲブッティと同系の漁具である。

## ナゲブッティ

県下各地で使用されているビッテ（ブッティ）と同系のものだが、沼の中など広い所で舟の上から使用するために4ｍもある長い竹ざおを柄としてつけている。

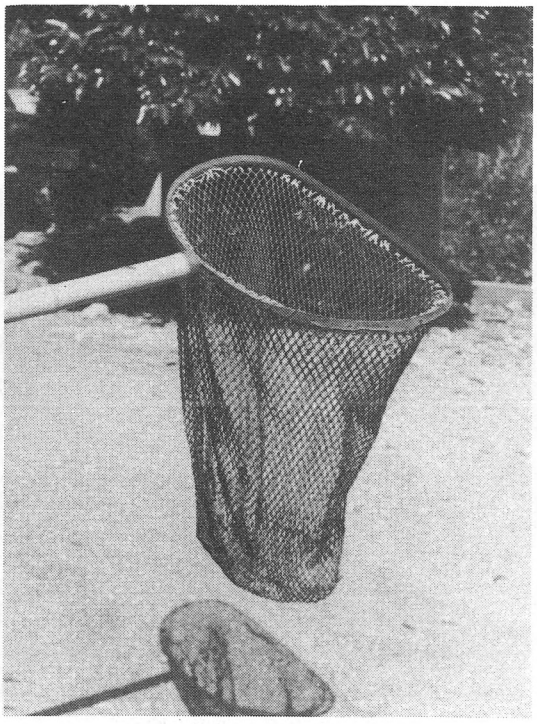
舟の上から沼や用水にナゲブッティを投げこみ、水底の泥をさらうようにして魚と泥とを一緒にすくい上げ、舟べりをテコのように利用して引き上げて魚をとる。

以前は、板倉沼のハスは自然生のとき、どこでもかまわず蓮根を掘ったので、沼の中の各所に穴があいていた。冬にはこの穴に魚が集まってくるので、こんなところをめがけてナゲブッティを投げこみ、フナなどの魚をとった。

ナゲブッティ
（板倉町　荒井七蔵）

## モロカキ

主として冬の漁法に使用した漁具で、金の輪に網をつけ、柄をつけたすくい網の一種で、沼の底をかいて魚をとった。特に沼や幹線堀などに、モロカキに相応したモロ（溝）を細長く掘り、モロの両端には目印の棒をさしておく。魚は各種の網で追われたりして、深くて安全と思われるモロの中に集まって来るので、2・3日おきくらいに出かけて行き、目印の棒をこするようにしてモロカキを突っこみ、一気にモロの中を手前の方までかき、魚をすくいとる。モロの巾はきまっており、逃げ出すこともできずにかんたんにフナをすくえるので、こたえられないほどうまみのある魚とりで、4kgくらいとるのはかんたんだったという。



モロカキ
（館林市当郷　関口常雄）

## ヒキチガイブッティ

ヒキチガイブッティを作るヒゴは少々太くて三角にけずって、水きり、泥きりがうまくゆくようにし、舟につけるために手ごろの竹の棒3本を使う。ブッティにとりつけるところは半分竹をけずってから火で曲げてカンナという名でよばれるが巻きこんでとめる。竹の長さはトゲシ5寸といって、ブッティの長さの5寸増しとし、水量が多いときは一尺増しの長さとして舟にとりつけるカギはカシの木でつくった。舟の右側、ヒダナにつけた。カギにつける竹はミヒロカタキ（3尋半）ときまっており、こうしたヒキチガイブッティをつけた舟が二艘で向き合って（ヒキチガイ）ひいて魚をとった。寒中（12月から2月）でも1回ヒキチガイをやると汗が出てくるので繻絆一枚でやるほどの重労働だったのでいつの間にかキチガイブッティとよばれたという。

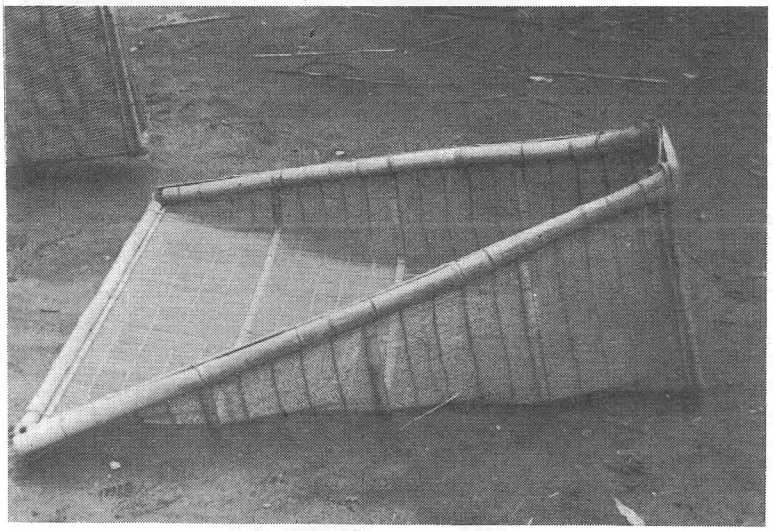
フナやザッコをとった。

ヒキチガイブッテイ
（板倉町　荒井七蔵）

ヒキチガイブッテイ
（柄を外にしてある）
（板倉町　荒井七蔵）

## エビブッティ

ヒキチガイブッティのように3本の竹の棒をつけてその先にカギをつけ、舟にとりつけて沼の中を夜間ひきまわしてエビをとる漁具である。一種のトロール漁ともいえるもので、ここぞと思うところをぐるぐるひいて、ひと晩に1石のエビをとったこともあるという。ヒキチガイブッティよりも巾広で、大きいが、竹ひごは細く、編み方もやさしい。板倉沼だけにしかみることができなかった漁具である。



エビブッテイ（柄を外にしてある）
（板倉町　荒井由重）

## 追いこみ網

一人、または二人で魚をすくいとるスクイ網のことで、川の流れに向かってセットし、上流から魚を追いこんで二人がかりですくいとる。また二人で両方から板を持って川の半分を引いて上り、川の縁の方に逃げている魚を追い出してすくい、引き続いて残り半分を下りの方へすくいとる。

一人でやる時も同様であるが、川の中の魚がかくれていそうな場所に網をあてて、片方の足で魚を追い出してすくい上げてとる。

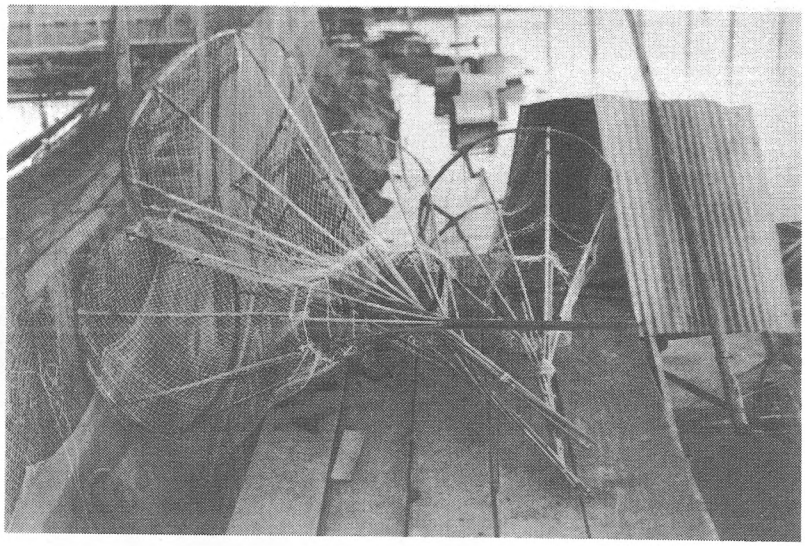
網は袋網でカエシはなく、近藤沼では口のところに支柱を入れて扱い易いようにくふうしている。

## ハズアミ

竹または鉄で輪をつくり、これに篠竹を六本または八本つけて円錘状のものを組み立てて、上部は一本にまとめて柄とし、筒状の網をつけて仕上げたハズアミは、一見「筒だから魚を囲いこむ道具」としか見えない。

秋から冬にかけて、水深が浅くなった時、魚を目がけてかぶせ、逃げようとする魚の力でアミを押し出したところを引き上げるので袋状になったアミの中へ魚を閉じこめてとるもので、投網の下部の袋と同じ形式になる。ナマズや雷魚の上にかぶせ、棒などで突いてアミの中へ追いこむこともする。

板倉町の場合には、風の吹く日など、風上から風下に向ってハズアミを使いながら舟を並べてとる「くだり」や「めったおし」があり、館林近藤沼では、魚を見ながらとる「見取り」がある。近藤沼のものは細くて、小さいハズアミを使う。



ハズアミ
（館林市　日向漁業組合）

## ハズアミ（大）

城沼のハズアミは、多々良沼や近藤沼、板倉沼とちがって、キリコミ漁で使用することが中心で、水深もあるノロ深い沼での作業で、舟の上で大きく扱うために細く、しかも長いものに特色がある。最下部の直径51㎝、57㎝、全長328㎝、341㎝、アミの長さは115㎝、105㎝、使用時にアミのたるむ（袋になる）長さが30㎝もあるということは、他にみられない大きさである。城沼という沼のもつ条件と、そこで行なわ

れた漁法が生み出した漁具の典形であるといえよう。

## 投　網

沼で使う投網は、川で使用するものよりも概して大きく、コイやヘラブナをとるためにアミ目は大きいので重量もある。しかし、最大で14尋10畳分ほどで、目方にしても1貫500匁（約6kg）。編むときのアミ目の大きさと目数によって投網の大きさを決める。投網の下端、袋になる部分を「ヤ」といい、ヤをかけることによってかぶせられた魚はこの中へとじこめられることになる。（城沼）

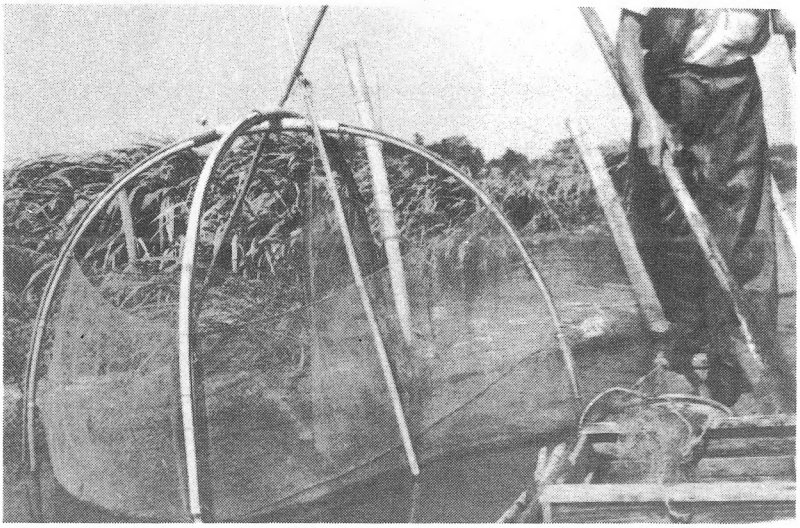
沼で舟の上から投網を投げるとき、大きく開きすぎても沈む時間が長くなってしまって魚が逃げてしまうし、小さくひろげたのでは魚はとれない。魚の種類、ひろがりの大きさ、気温、風向きと沼の地形などによって自在に投げ分けるには相当の経験年数が要求される。オモリには、ナツメ、管、カキノタネ、クサリ型などがあり、最近はクサリ型が支配的である。（板倉）

## 四ツ手網

四ツ手網は、一辺約1mから5mまでの正方形の網の四隅に支柱をつけてはり、中央上部でつり上げられるようにした網で、小さいものは手で操作できるが、大きいものは上下させるためには柱をたて、滑車で上下させるため、タモを使用する。

春先、フナ、続いてコイが産卵のために岸辺にくるため、丸太でヤグラを組み、足場を固めて太い竹竿や丸太を張り出して滑車をつけ、これに大きな四ツ手網をつるす。水底におろした網の上を魚が泳ぎまわるのを待って、時期を見て滑車で一気につり上げ、フナやコイをすくいとる。岸で一服しながら手軽にできるのどかな春の風景であった。

多々良沼では一切禁止されている。



四ツ手アミ
（館林市　関口常雄）

## ハッキリ

ハリキリとか地獄アミの別名がある。

大小いろいろあるが、袖網と袋網をつないで、竹竿を立てて袖網を川巾いっぱいにひろげてはっておき、川を下って来た魚がいや応なしに中央の袋網の中へ入りこんでしまい、逃げられずにとられるというで地獄アミという。

袋網は、口元から六分目（一寸二分）、四分目（八分）、三分目

（六分）とアミ目の大きさをこまかくしてあり、三か所以上のカエシをつけている。袋網には竹で輪をつくって袋の支柱として丸くしている。末尾は巾着のようにひもでしぼってあり、ひもの末端は、竹の竿にしばりつけておいて、魚をすくい上げる時に開けて出す。

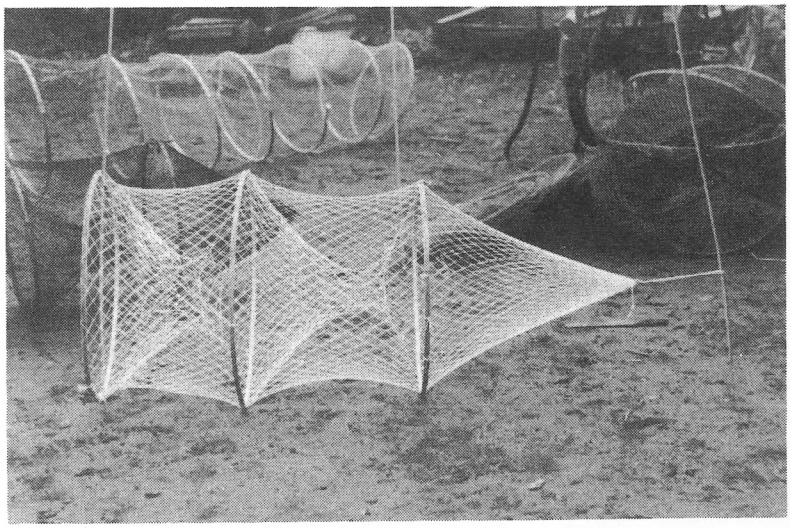
フナやコイ、その他の魚、何でもとることができる。またほとんど三ヵ月とか半年の間ハリキリにしておくのでハッキリの名もそこからつけられた。

ハッキリ（ジゴクアミ）
（板倉町　蓮見由次）

## グリアミ

板倉ではグリアミ、城沼ではアミウケという。30年ほど前からアミウケが使われ出したが、当時は綿糸を使用したために水に弱く、ナイロン糸を用いるようになってから竹製のウケにとって代って主役になった。

網の編目は6分（一寸二分目）で、四月末から五月末のノッコミ期に、産卵のために川を上って来て岸辺近くにやって来るフナやコイをとるために川や沼の岸辺にふせる。ウケの口の方に篠竹をさしてアミウケの位置をきめるとシリタガの部分にあたるひもをひいてもう一本の支柱に結びつけてはる。寒い日には深く、暖い日には水面近くにふせる。地面につけず、エサも入れない。秋の10月から11月にかけては「下り」の魚がとれる。アミをひろげるタガは、最



グリアミ（フナ、コイ用）
（板倉町　蓮見由次）

初のころは竹を割って輪にして入れたが、最近のものは金タガを入れている。たたむと薄くなり、取扱いや運搬にも便利である。

## フクロアミ

ウナギとりを主目的としたアミで、マチアミとして使用する。台風などで沼や川が増水して流れる時、夜間、ハリキリにしておき、水の力でアミのフクロが開き、下りウナギが入るようにする。袖網があり、片袖五間（約9m）、フクロの長さもほぼ同じで、口の下部にはオモリをつけてある。糸網のコシタは三つある。

大雨の後など、城沼から板倉沼まで約4kmの間に5組ほどフクロアミがかけられることがあるが、多い人は一網で20～30貫（約75～113kg）とったこともある。

フクロアミ
（館林市　関口常雄）

## コイトリアミ

サシアミの一種であるが、アミの目に刺さるというよりは、アミに巻かれて身動きできなくなるようにつくられる。ウキは桐をけずった手製、オモリも手製で、アミを張っているだけの重さで間に合うために――沼の水は流れないので軽いものを使っている。大正ころ編んだもので、深いものは深さ約3m、長さ約40m、浅いもので深さ約1m、長さ約14mある。

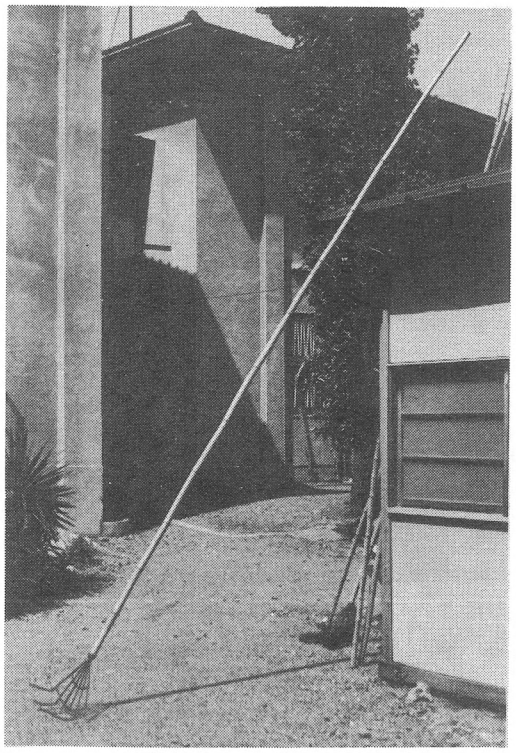
## マンノウ

城沼で行うキリコミ（柴漬け漁）に使う道具で、二本の刃の太いものは、太いキリコミの丸太や枝を出す時に使うもので、農具の万能よりもやや太く、しっかり作られている。こまかなキリコミを出す時に

マンノウ
（館林市当郷　関口常雄）

使うものは、熊手に似たもので、刃もひろがり、ホヤをかき寄せられるようにつくられている。柄の長さは4m以上もあり、舟の上の作業に合せてつくられている。県下では、館林周辺の沼しかみられない漁具である。

近藤沼でゴキウケやアミウケをふせる時に使用するマンノウはやや小さく、一本のカギ状のものもある。



マンノウ
（館林市当郷　関口常雄）

## サシアミ

戦後の或る時期、海の漁具のサシアミが使用されるようになり、一部近藤沼でも現在使用されているが、他では禁止された。一枚ササリとよぶ一枚網と、三枚ササリとよばれる三枚網との二種があり、アミの大きさにも様々のものがあるが、アミの目の中に魚がささってとれる。特に三枚ササリの場合には、一枚のこまかな編目のアミの両側に大きな編目のアミが一緒についていて、一方から入った魚はこまかい目のアミを押し出して反対側のアミの間に自分の入る袋をつくってしまい、絶対に逃げられないしくみになり、大小の別なくとれるため、地獄網の別名もあるほどである。こうしたこともあって現在では禁止されるところが支配的なのである。

## 多々良沼の舟

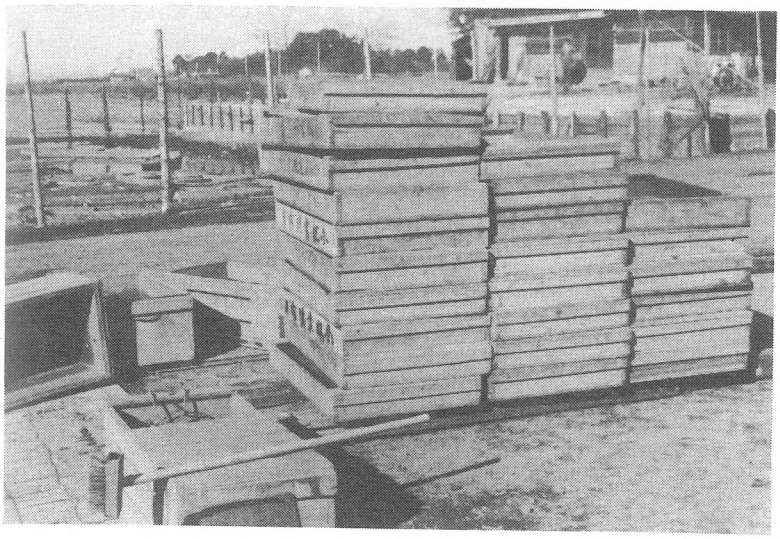
舟は浅い平底のもので、長さ三間半ほど、定員六人の小舟である。もちろん舟べりはなく、ハイタはふくらみもなく、シキに対して直角に近い角度で、ヘサキの反りもない。多々良の舟の特色は、こうしたことに加えてコオリワリとよぶ板がヘサキからトモまでつけられていることで、これは、冬の間、オイコミ漁などで氷の中などへ入るときのくふうだというが、舟としての安定や、性能的にはやや劣る面があ

多々良沼の舟
（館林市　日向漁業組合）

るといわれている。古い、素人っぽい舟でありそうした面で特色をもっている。

## 運搬箱

とった魚は、販売先へ運ばれるため運搬箱に入れられる。特に変ったところはないが、杉板で製作された平箱で、25kg入りのものが最近使用され、各地の釣り堀などへ向けて運ばれる。軽トラックなどへの積みこみ、積みおろしの便を考えての箱である。



運搬箱
（館林市　日向漁業組合）

## ボテ

とった魚の容器として、生け簀にしたり、運搬具として使用するボテは、ザル式のものや、平かごを二枚使うカサネ、下部のふくらんだダルマブテや、腰につるすものもある。県下では、西毛のビク、利根のハケゴ、各地のコシゴなどの名があるが、板倉、館林地方ではボテが一般的のようである。

材料は竹を使用し、ふつうはかご屋に注文するが、大きいものは一尺六寸（尺六）というのもある。最近はへっており、ビニール製のものもみられる。また野菜かごに網袋をつけたり、そのまま使用したりする例もみられるようになった。

（阪本英一）

ボテ各種
（板倉町　荒井由重）

「植物」１８５－２０４頁は

個人情報が含まれるため非公開

## 総　括

1. 第一次調査カード「小平サンショウ魚」について。小友出入沢のワサビ畑（地点$C_2$)には幼生段階から成体にいたるまでかなりの個体を確認し得た。種はハコネサンショウウオである。
2. 全地点を通じて蜉蝣目１３種、毛翅目１９種、襀翅目１０種、双翅目１１種、鞘翅目４種、蜻蛉目７種、半翅目１種、広翅目１種　計６６種の底生昆虫をみる。
3. このうち地質時代遺存種としてのムカシトンボの幼虫は全地点においてみとめられ、かつその分布密度の高いことは特筆すべき事項である。
4. 底生昆虫６６種のうち腐水段階からみると、明確に決定しかねるもの１４種を除いて、$Os$ ３７種、$Os$～$\beta ms$ １４種、$\beta ms$ １種であり、汚染されない水域、または汚染度の低い水域の種が占めており、$\alpha ms$または$\beta Ps$、$\alpha Ps$、のような腐水性のつよいものは全くみられない。

　この地域の川は隣接桐生市の桐生川上流域とともに調和のとれた清浄な水域の区域として保全につとめるべき地域である。

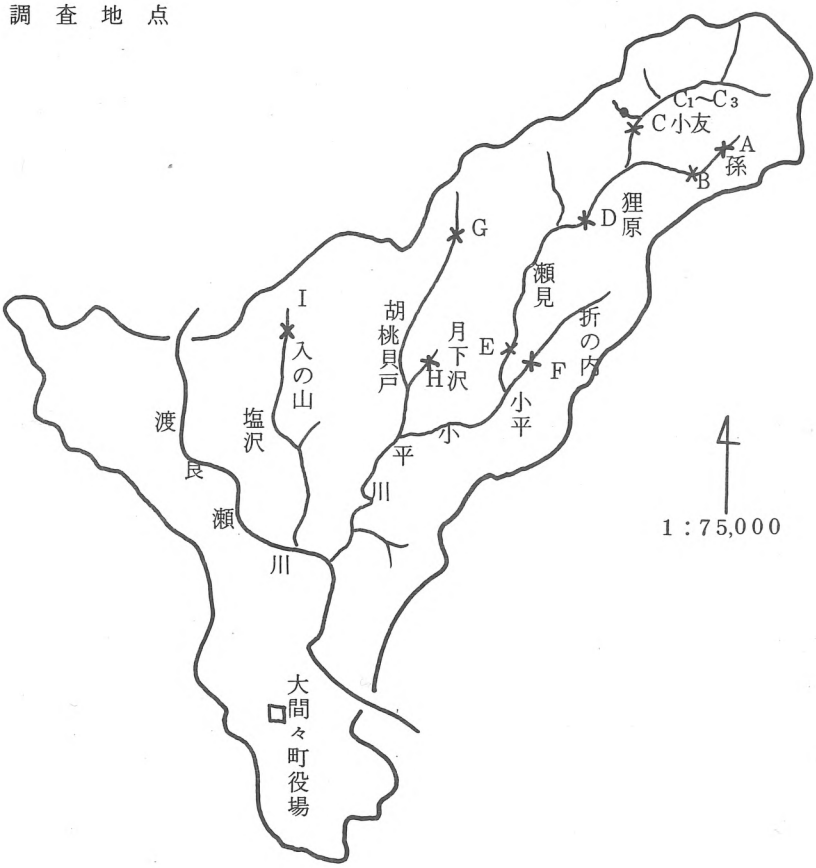
5. 底生昆虫以外の生物についてみても、サワガニの広い分布、カワノリの存在、全地点にわたるカジカの分布など前項の底生昆虫と同様汚染のすすまない自然水域の姿がはっきりとみられる。　　（五味礼夫・関根和伯・富岡克寛）

| 目 | 種名 | | 腐水段階 | 調査地点 A | B | $C_1$ | $C_2$ | $C_2$ | D | E | F | G | H | I |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 双翅目 (11) | 1. Dixidae sp. | ホソカ科の一種 | *Os* | | | | | | ● | | | | | |
| | 2. Tipula sp. TA | ガガンボ科の一種 | *Os* | | | | | | | | | | ● | ● |
| | 3. Tipula sp. TC | 〃 | *Os* | | | | | | | | | ● | | |
| | 4. Holorusia sp. HA | 〃 | *Os* | | | | | ● | | | | ● | | |
| | 5. Pedicia sp. PA | 〃 | *Os* | ● | ● | ● | | | ● | | | ● | | |
| | 6. Antocha sp. | 〃 | *Os* | ● | | | | | | ● | | | | |
| | 7. Eriocera sp. EB | 〃 | *Os* | | | | | | | | | ● | | |
| | 8. Eriocera sp. ED | 〃 | *Os* | ● | | | | | | | | | | ● |
| | 9. Simulium sp. | ブユ属 | *Os*～*βms* | | | | | | ● | | | | | |
| | 10. Chironomidae sp. | (緑色種)ユスリカ科 | *Os* | | ● | ● | | | ● | ● | | ● | ● | |
| | 11. Tabanidae sp. | アブ科 | | | | | | ● | | | | | | |
| 鞘翅目 (4) | 1. Eabrianax granicolis | ヒラタドロムシ科 | *βms* | | | | ● | ● | | | | | | |
| | 2. Coleoptera sp. (Ⅳ) | 鞘翅目の一種 | | | | | | | | | | ● | | |
| | 3. Hydrophilidae sp. (Ⅱ) | (成虫)ガムシ科 | | | | | | | | | | | | ● |
| | 4. Athemus sp. | | | | | | | | | | | | | ● |
| 蜻蛉目 (7) | 1. Mnais strigata | カワトンボ | *Os*～*βms* | ● | | | ● | ● | ● | | | ● | ● | ● |
| | 2. Epiophlebia superstes | ムカシトンボ | *Os* | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| | 3. Sinogomphus flavolimbatus | ヒメサナエ | | | | | | | | ● | | | | |
| | 4. Stylogomphus sp. | サナエトンボ科 | *Os*～*βms* | | | | | | | ● | | | | |
| | 5. Lanthus fujiacus | ヒメクロサナエ | | | | | | ● | ● | | | ● | | ● |
| | 6. Davidius sp. | サナエトンボ科 | *Os*～*βms* | ● | | | | | | ● | | ● | ● | ● |
| | 7. Anotogaster sieboldii | オニヤンマ | *Os*～*βms* | | | | | | | | | | | ● |
| 半翅1 | 1. Aphelochirus vittatus | ナベブタムシ | *Os* | | | | | | | ● | | | | |
| 広翅1 | 1. Protohermes grandis | ヘビトンボ | *Os* | | | ● | | | | ● | | | | ● |
| | 各地点別昆虫種数 | (1)は筒巣のみの種 | | 19 | 14 (1) | 12 (1) | 10 | 17 | 16 | 22 | 8 | 23 | 8 (1) | 24 |
| 筒の巣み | Goerajaponica | ニンギョウトビケラ筒巣 | | | | | | | | | | | ✦ | |
| | Neoseverinia crassicornis | オオカクツツトビケラ筒巣 | | | ✦ | | | | | | | | | |
| | Uenoa tokunagai | クロツツトビケラ筒巣 | | | | ✦ | | | | | | | | |
| その他の生物 | プラナリアの一種 | | | ● | | | ● | ● | ● | | ● | ● | ● | |
| | Gordius aquaticus | ハリガネムシ | | | | ● | | | | | | ● | | ● |
| | イトミミズの一種 | | | ● | | | | ● | | | | ● | | |
| | ヒルの一種 | | | | | | | | ● | | | | | |
| | Semisulcospira libertina | カワニナ | | | | | ● | | | | | | | |
| | Potamon dehaani | サワガニ | | ● | ● | | | ● | ● | ● | | ● | ● | ● |
| | Cottus potlux | カジカ | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| | ○ Onychodactylus japonicus | ハコネサンショウウオ | | | | | ● | | | | | | | |
| | ○ Prasiola japonica | カワノリ | | | | ● | | | | | | | | |

第7表　大間々町小平川水系を中心とした水生動物相　48. 9. 7～9. 8

| 目 | 種 | 名 | 腐水段階 | 調査地点 A | B | $C_1$ | $C_2$ | $C_3$ | D | E | F | G | H | I |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 蜉蝣目 (13) | 1. Ephemera japonica | フタスジモンカゲロウ | Os | ● | ● | | | | | | | ● | | |
| | 2. Paraleptophlebia sp. PA | トビイロカゲロウ属 | Os | | | | | | | | | | | ● |
| | 3. Ephemerella sp nF | マダラカゲロウ属 | Os | | | | | | | ● | | | | |
| | 4. Ephemerella sp nay | 〃 | Os | | | | | | | ● | | | | |
| | 5. Ephemerella rufa | アカマダラカゲロウ | βms | | | | | | | ● | | | | |
| | 6. Baëtis sp | コカゲロウ属 | Os～βms | ● | ● | | | ● | | ● | | ● | | ● |
| | 7. Baëtiella japonica | フタバコカゲロウ | Os | | | | | | | ● | | | | |
| | 8. Isonychia japonica | チラカゲロウ | Os～βms | | | | | | | | ● | | | |
| | 9. Dipteromimus tipuliformis | ガガンボカゲロウ | (Os) | | ● | | | | | | | | | |
| | 10. Epeorus hiemalis | オナガヒラタカゲロウ | (Os) | ● | | | | | | | | | | |
| | 11. Epeorus uenoi | ウエノヒラタカゲロウ | Os | | | | | | | ● | | | | |
| | 12. Epeorus latifolium | エルモンヒラタカゲロウ | Os～βms | | | | | | | ● | | | | ● |
| | 13. Epeorus curvatutus | ユミモンヒラタカゲロウ | Os | ● | ● | | | | | | ● | ● | | ● |
| 毛翅目 (19) | 1. Rhyacophila articulata | トワダナガレトビケラ | Os | | | ● | | ● | | | | ● | | ● |
| | 2. Rhyacophila niwae | ニワナガレトビケラ | Os | | | | | | ● | | | | | |
| | 3. Rhyacophila sp. RD | ナガレトビケラ属 | Os | | | | | ● | | | | | | |
| | 4. Rhyacophila sp. RE | 〃 | Os | | | ● | ● | | | | | ● | | ● |
| | 5. Rhyacophila sp. RH | 〃 | Os | | | | | | | | | | ● | |
| | 6. Rhyacophila sp. | 〃 | (Os～βms) | | ● | | | | | | | | | |
| | 7. Mystrophora inops | インプスヤマトビケラ | | ● | | | | | | | | | | ● |
| | 8. Dolophilodes sp. | カワトビケラ科 | | ● | ● | | | ● | ● | ● | | ● | | |
| | ditto pupa | | | | ● | | | | | | | | | |
| | 9. Stenopsyche griseipennis | ヒゲナガカワトビケラ | Os～βms | ● | | ● | | | | ● | ● | | | ● |
| | ditto pupa | | | | | | | | | | ● | | | |
| | 10. Arctopsyche maculata(M) | シロフツヤトビケラ | (Os) | | | | ● | ● | ● | | | ● | | |
| | ditto pupa | | | | | | | | | | | ● | | |
| | 11. Arctopsyche sp. A | ツヤトビケラ属 | | ● | ● | | | | | | | | | |
| | 12. Hydropsychodes brevilineata | コガタシマトビケラ | Os～βms | | | | | | | | | | | ● |
| | 13. Hydropsyche ulmeri | ウルマーシマトビケラ | Os～βms | | | ● | | | | ● | ● | | | ● |
| | 14. Diplectrona sp. DB | ミヤマシャトビケラ無料 | | | | | ● | | | | | | | |
| | 15. Perissoneura paradoxa | ヨツメトビケラ | Os～βms | | | ● | ● | | ● | | | | | |
| | 16. Psilotreta kisoensis | フタスジキソトビケラ | Os | ● | | | ● | | | | | | | |
| | 17. Goera japonica | ニンギョウトビケラ | Os～βms | | | | | | | | ● | | | |
| | 18. Neoseverinia crassicornis | オオカクツツトビケラ | | | | | ● | ● | ● | | | ● | | |
| | ditto pupa | | | | | | ● | | | | | | | |
| | 19. Dinarthrodes japonica | コカクツツトビケラ | | ● | | ● | | | | | ● | | ● | ● |
| 積翅目 (10) | 1. Nogiperle japonica | ノギカワゲラ | Os | | | | | | ● | | | | | |
| | 2. Nemoura sp. | オナシカワゲラ属 | Os | | | | | ● | ● | | | | | |
| | 3. Protonemura sp. | | Os | ● | | | | ● | | | | | | |
| | 4. Amphinemura | | Os | | | | | | ● | ● | | ● | | |
| | 5. Togoperla limbata | キベリトウゴウカワゲラ | Os | | | ● | ● | ● | | | | ● | | |
| | 6. Paragnetica tinctipennis | オオクラカケカワゲラ | Os～βms | ● | ● | | | | | ● | | ● | | |
| | 7. Oyamia gibba | オオヤマカワゲラ | Os | | ● | | | | | ● | | ● | | ● |
| | 8. Perle sp. | | Os | | | | | | | ● | | | | |
| | 9. Acroneuria sp. | モンカワゲラ属 | Os | ● | ● | ● | | ● | ● | | ● | ● | ● | ● |
| | 10. Alloperla sp. | ミドリカワゲラ属 | Os | | ● | | | ● | | | | | | |

第1図　調　査　地　点




第6表　調査地点およびその概況　48.9.7～8.

| 調　査　地　点 | 標　高 | 日　時 | 天　候 | AT | WT | PH | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | m | | | ℃ | ℃ | | |
| A孫、上流部 | 650 | 48.9.7 14：00 | はれのち くもり | 19.6 | 15.0 | 7.4 | |
| B孫、下流部 | 600 | 15：00 | くもり (小雨) | | | | 砂防ダム下、暗い杉林の中 |
| $C_1$小友・出入沢本流 | 480 | 13：00 | くもり | 19.8 | 15.5 | 7.0 | |
| $C_2$小友・出入沢ワサビ畑 | 500 | 11：45 | 雨のち くもり | 19.7 | 14.6 | 6.8 | ハコネサンショウウオ、サワガニ |
| $C_3$小友・出入沢ワサビ畑横 | 500 | 11：45 | くもり | 19.7 | 14.6 | 6.8 | ワサビ畑に平行の1m未満の沢 |
| D狸　原 | 400 | 10：15 | はれ | 27.0 | 15.0 | | |
| E小平川瀬見バス停 | 290 | 16：00 | 小雨 | 20.4 | 17.2 | 7.6 | 上流にトンネル工事黒色のボタ川岸に多し。腐水菌あり |
| F折の内の沢に入り第一の橋 | 300 | 16：30 | 雨 | 19.0 | 17.0 | 7.4 | |
| G胡桃貝戸橋より3.3Km上流 | 450 | 48.9.8 10：10 | はれ | 18.5 | 15.2 | 7.1 | 杉林のひかげを流れる沢 |
| H月下沢橋より1.5Km上流 | 350 | 11：00 | はれ | 21.9 | 16.5 | 6.8 | 杉林あれど日あたりよし |
| I入の山(塩沢の上流) | 350 | 12：00 | はれ | 24.0 | 17.3 | 7.1 | |

(5) そ の 他

茂林寺沼……館林市堀工にあり、沼及び湿原は県指定の天然記念物になっているが、近年汚濁が著るしい。現存する水生植物はコウホネ、サンショウモ、エビモ、少量のヒシ及びヒメビシ等である。$NH_4$－Nは城沼に次いで多く、特に$cl^-$が多く昭和49年3月の測定では130ppmに達しており、東毛地方の池沼では類をみない。しかし冬期の沿岸帯底生動物調査ではカワコザラガイ、ハブタエヒラマキガイ、アナンデールヨコエビ、ベニイトトンボ、オオモノサシトンボ、セグロトビケラ等が採集されており、早急に環境保全策をとる必要がある。

蛇沼……茂林寺沼と同じく堀工にあり、夏季は古城より$NH_4$－Nも植物性プランクトンも少い。水生動物ではカワコザラガイ、オオモノサシトンボ、ベニイトトンボ、コフキトンボ、セグロトビケラ、カンテンコケムシ、淡水海綿類、ヤハズハネコケムシ等が多数生息しているが、沈水植物はごく少量のエビモを除いてはみられない。昭和48年末から館林市の汚水処理場が沼の北端にでき、処理水が沼に流入する危険がある。

多々良沼……古くは東毛地方で最大の水生植物相、水生動物相を擁したが、近年はみるかげもない。夏季は植物性プランクトンが多いが$NH_4$－Nは少い、水生動物ではヌマガイ、イシガイ、マシジミ、トブガイ、マルタニシ、カワコザラガイ、ハブタエヒラマキガイ、ヒメタニシ、ヒメモノアラガイ、サカマキガイ等の軟体動物とカンテンコケムシ、淡水海綿類等が多い。しかし年間の水位変動が大きいために沿岸帯の底生動物相は多くはない。近年は多々良沼漁業協同組合によりゲンゴロウブナ、コイ等の稚魚放流が行われており、関西系の淡水魚、ハス、ワタカが自然増殖している。特にワタカの生息量は非常に大きい。館林市の城沼等と共に環境保全策の万全をきし自然を甦らせたいと願う。

谷田川……邑楽郡千代田村の赤岩附近の湿地に発し、湿田地帯をぬい下る谷田川は近藤沼、城沼、板倉地区の池沼群の水を集め渡良瀬川に入る全流程20㎞の低地河川である。河岸にはヨシ、マコモ、フトイ等の挺水植物が茂り、川底にはエビモ、セキショウモ、クロモ、ヤナギモ、ミズオオバコ等が揺れ、魚類も20種を下らない。谷田川での詳細な調査はなされていないが、ワカサギ、モクズガニ、カワコザラガイ、ベニイトトンボは採集されている。その他にテナガエビ、アナンデールヨコエビ、オオモノサシトンボ、チョウトンボ、コフキトンボ、マイコアカネ、カンテンコケムシ、ヒメテンコケムシ、ヤハズハネコケムシ、淡水海綿類等の生息を推定できる。更に精査を要する河川である。しかし周辺の部落、水田から多量の汚濁水が供給されており、特に館林市の排水及び汚水処理水が流入し、河川は急激に悪化している。

## 二 大間々地域渓流の動物

この調査は、大間々町小平川上流域における「小平サンショウ魚」(第一次調査カードによる)について確認を行うと共に、本町内の渡良瀬川に東側から流入する渓流水域の動物についての詳細をあきらかにするためにおこなった。

**調査地点** 調査地点は第1図に示すように各支川を通じてA～Iまで計11地点である。

**方　　法** 地域が山間の小流であり、河床は不規則であるため定量採集による各地点間の比較は無理であり、妥当な結果を期待しがたいため、定性採集を中心として行った。

**地点の概況** 第6表にその概況を示した。これでみても判るとおり$P^H$は6.8～7.6で通常の値であり、水温は何れの地点でも気温よりかなり低い値を示している。

**動物の結果** 9月7日8日の2日間で確認得た動物は第7表に示してあるが、底生昆虫については各種についてその腐水段階を附記した。

沼畔に至る。昭和４０年頃までは水生植物も豊富にみられたが、現在ではごく少量のエビモを除いてすべて衰滅した。しかし$NH_4$−Nも植物性プランクトンも少い、水生動物は多く夏季の沿岸調査では３１種にのぼり、東毛の池沼で最多を記録した。しかもそのうち90％はβ中腐水性動物であり秋季から冬季にはセグロトビケラを採集している。沼は淡水海綿類（カワカイメンが優占）が多く、特にアナンデールヨコエビの生息量が卓越している。その生息量は８月下旬では沿岸帯１㎡に1,200個体を記録した。その他イトトンボ類も多く、同期の１㎡にベニイトトンボ幼生６２個体、オオモノサシトンボ７１個体を確認した。古城はこれら動物相からみて、群馬県の低地湖沼の中でも超一級のものと考えられる。

だが水の更新はほとんどなくcl⁻が多い（１９７４年2月２２日cl⁻ 63.6 ppm）。

従来は沼の西端に雑木林を擁していたが、現在は切りはらわれ、沼につき出すような形で宅地造成がなされた。ここに人家ができれば、小さな沼の生物はひとたまりもなく消失してしまうであろう。現在日本の湖沼におけるヨコエビの生息量は著るしく減少している。

詳細な検討がなされていないが、古城でのヨコエビの生息量は本邦でも有数な部類に入るのではあるまいか。これだけの沼は東毛にはない。古城は現在第一番に環境保全策を急ぐ必要があると考えられる。

以上の３池沼は東毛地方では最も生物相が豊富であり清澄な沼である。しかし各池沼とも本邦唯一の種とか珍品が生存するわけでもない。個々の生物ではなく、多くの生物群集の生息を許す生活環境を持つ水域として指定していただきたい。

Bランク

(1) 針ケ谷沼　板倉町海老瀬字小保呂

径１００ｍの方形沼で水田及び人家にかこまれている。水生植物が多く、アサザ、トチカガミ、ガガブタ、エビモ、マツモ、クロモがみられる。水生動物も多く、特にイトトンボ類が顕著であり、８月下旬の調査では１㎡につき１２０匹の幼生を記録した。その他淡水海綿類やタナゴ類も多い、しかし人家にかこまれており汚濁化されつつある。

(2) 坂田沼　板倉町海老瀬字小保呂

長径２００ｍ、短径３０−６０ｍの長形沼である。沿岸はヨシ、マコモ、ハスがみられるが、沈水植物はエビモ等が少量生息するするだけである。沼は蓮田を通じ水田との間に水の出入があり、現在コイ、ゲンゴロウブナを養殖している。透明度は小さく、植物性プランクトンは東毛の汚濁池濁池沼、城沼や茂林寺沼に次いで多い。

しかしながらテナガエビやアナンデールヨコエビが少量ではあるが生息しており、イトトンボ類も多い。

(3) 権現沼　板倉町海老瀬字峰

長径３５０ｍ、短径５０ｍの長形沼で、一峰神社と海老瀬貝塚群にはさまれた谷間にみられる。沿岸はヨシ、マコモがあり、西端にはオニバスの生息する枇杷沼がある。この沼はヌマガイ、ドブガイ等の軟体動物がみられ、タナゴ類も多い。魚類の調査は不完全であり、更に精査を要する。詳細に検討するとタイリクバラタナゴ以外にタナゴ、アカヒレタビラ、ヤリタナゴ、ゼニタナゴ、ミヤコタナゴのいずれかが生息している可能性がある。

(4) 柄　池　板倉町海老瀬字小保呂

谷田川の河川敷内にあり径１００ｍの円形の沼で、西端は谷田川に通じている。沼の東側は谷田川の堤防になり、周囲はヨシ、マコモ、ガマでおおわれている沈水植物は少く最大水深は６ｍであった。水の更新は大きく、植物性プランクトンは少い、しかし中央底は凹入しており、水の更新は表層近くで行われると考えられ、底層の$NH_4$−Nは１０ppmに達していた。今回の調査で確認された水生動物はあまり多くないが谷田川と連らなる環境からみて、詳細にしらべるとテナガエビ、モクズガニ、ワカサギ等の生息がみられるかもしれない。

まれている。汀線はヨシ、マコモにおおわれ、エビモ、マツモ、クロモ等の沈水植物も多く、当地方では最もよく自然状態が保たれている。8月下旬に沼中央部で水質調査を実施したが、$NH_4-N$は少なく、水深5.1 m、底水温16℃であった。（第5表）水生動物も多く、特に小形軟体動物が豊富であり詳細な調査により、より多くの生物相が確認されると推定できる。

第5表　肘曲沼と行人塚沼の水質

肘曲沼　1973年8月28日　pm3：00−3：30測定　水深5.1　透明度1.08 m

| 水深(m) | WT(℃)(AT) | PH | DO ppm | DO % | $NO_2-N$ ppm | $NH_4-N$ ppm | chlorophyl A | chlorophyl B | mg/m³ C |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 32.6 | 6.2 | 8.79 | 173.1 | 0.01 | 0.07 | 7.1 | 10.0 | 28.1 |
| 1 | 29.4 | 6.2 | 9.89 | 183.2 | 0.02 | 0.07 | 14.1 | 23.3 | 37.5 |
| 2 | 28.4 | 6.2 | 5.75 | 104.5 | 0.04 | 0.10 | 14.1 | 22.0 | 21.7 |
| 3 | 27.3 | 6.4 | 2.32 | 41.4 | 0.04 | 0.12 | 39.2 | 74.9 | 56.3 |
| 4 | 21.3 | 6.6 | 0.57 | 9.1 | 0.06 | 0.94 | 63.3 | 179.2 | 65.4 |
| 5 | 16.0 | 6.4 | 0.39 | 5.7 | 0.05 | 1.10 | 75.3 | 202.9 | 96.8 |

行人塚沼　1973年8月27日　am10：30−11：00測定　水深7.7 m　透明度1.92 m

| 水深(m) | WT(℃)(AT) | PH | DO ppm | DO % | $NO_2-N$ ppm | $NH_4-N$ ppm | chlorophyl A | chlorophyl B | mg/m³ C |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 30.1 (33.0) | 6.4 | 7.94 | 149.1 | 0.007 | 0.75 | 5.4 | 10.1 | 25.1 |
| 1 | 28.3 | 6.6 | 7.73 | 140.3 | 0.01 | 0.80 | 9.8 | 16.9 | 24.2 |
| 2 | 27.6 | 6.6 | 5.55 | 99.6 | 0.01 | 0.70 | 19.2 | 31.6 | 42.0 |
| 3 | 26.0 | 6.6 | 4.20 | 73.1 | 0.01 | 0.70 | 21.9 | 36.3 | 21.8 |
| 4 | 22.3 | 6.6 | 2.68 | 43.6 | 0.02 | 1.00 | 41.6 | 72.5 | 58.5 |
| 5 | 15.5 | 7.0 | 2.38 | 33.9 | 0.02 | 1.50 | 66.8 | 169.9 | 198.6 |
| 6 | 10.6 | 6.8 | 1.19 | 15.3 | 0.03 | 2.80 | 26.7 | 54.5 | 44.8 |
| 7.5 | 9.0 | 6.8 | 0 | 0 | 0.10 | 6.50 | 35.4 | 76.9 | 35.2 |

(2)　行人塚沼　邑楽郡板倉町海老瀬字中新田

径100−150 mの円形沼で、汀線は南から西側をヨシ、マコモ、ヒメガマ、ハスにおおわれ、北から東側は町道をへだて水田がある。

沼は東毛随一の水生植物相を擁し、ガガブタ、クロモ、セキショウモ、トチカガミ、ホザキノフサモ、マツモ、エビモ、ヒシ、ヒメビシ、シャジクモ類等がみられ、特にハゴロモモの大群落はみごとである。

東毛地方の池沼は透明度1 m前後、水深1−2 mまでが大半であるが、行人塚沼は透明度1.9 m、水深7.7 mに達し、現在では珍らしく深く清澄な沼である。8月下旬、沼中央部での測定結果は第4表にみるように、表層水が30℃でも底層水は9℃にすぎない。また、4〜6 m層に植物性プランクトンが多く、多数のフサカも同層で群遊していることがわかった。低水温帯の存在は北方系生物、たとえばワカサギ等の生息の可能性がある。生物相の調査は不十分であり今後の調査により多くの生物相が追加されるであろう。

しかし沼の底層には多量の$NH_4-N$が滞留しており、沼畔にある生活棄物と人家からの汚濁化が心配される。沼は小形であり、一度汚濁されると急速に生物相は衰退する可能性がある。

(3)　古　　城　館林市羽附字大袋

径50 mに満たない略円形の小形沼であるがヨシ、マコモ等を主にした湿原を通じて城

ることは全く不可能であった。ただ各種の水生植物の密生状態からみて動物群集を精査すれば興味深い結果が得られるのではないか。

谷田川　藤木橋上流側の滞溜水域で各種の沈水植物が多く水面はサンショウモ、ウキクサが多くプランクトンネットの曳行不可能であった。

他の6池沼の動物性プランクトン種の出現状況は第4表に示すとおりである。

優占種、行人塚沼は枝角類のBosminopsis deitersi ゾウミジンコモドキが沼中央部で優占種である。本種はおおむね中栄養～貧栄養の湖沼水域の生活者である。沼中央部で水深7 m までの垂直採集を行った資料では優占種が橈脚類のThermocyclops hyalinus である。また沼の岸寄りの水域でもThermocyclops hyalinus が優占種である。柄池もThermocyclops hyalinus が優占種であるが坂田沼は趣をことし富栄養から中栄養の水域に生活する輪虫類のBrachionus diversicornis ツノワムシが優占となっている。

針谷沼の6種、権現沼の7種、肘曲沼の7種はそれぞれ特に優占種としてきわだって多い種はなくほぼ一様である。

種数　種の数から各池沼を比較してみると夏期における動物性プランクトン種数は行人塚沼が最も多く13種であり、他の針谷沼6種、柄池、権現沼、肘曲沼各7種、坂田沼5種に比して目だって多い。このことは調査の粗密差にもかかわりがあろうがすくなくとも行人塚沼が調和のとれた良好な自然状態を保持している沼であると言えよう。

総括　動物性プランクトンの種の状況からみて板倉町における各池沼の現状は館林市の城沼、多々沼、近藤沼などの工場排水の害をうける前のプランク状況によく似て調和のとれた状態を残しており、群馬県の平地沼池の典型的な夏期のタイプを示している。

東毛地域の多くの池沼が汚染が進行して以前の自然状況が著しく変化しているのに板倉町の池沼の多くはいまだに調和のとれた中栄養～富栄養の水域として、生物相からみて過去の自然状態を残しているのはたとえば針器沼、行人塚沼、肘曲沼のように流入河川がなく何れも湧水によって涵養され、工場排水、生活廃水などの流入がないことによるものであろう。ただ柄池をのぞいて他の沼は水の更新がまことにすくないからひとたび廃水流入や廃棄物投棄などがあるとたちまち強腐水の死の沼に急変する可能性があると思う。この残された自然を保護するためには廃水流入についての規制が絶対に必要な要件である。

ロ　館林市古城の動物性プランクトン

採集ネットは岸からの投入曳行のため採集が岸寄りの水域に限られており予察程度の調査に終った。動物性プランクトンは3種類で枝角数のBosminopsis deitersi ゾウミジンコモドキ、Diaphanosoma brachyurum オナガミジンコ、橈脚類のEodiaptomus japonicus ヤマトヒゲナガケンミジンコそれにNaupliusだけであった。このうち優占種はEodiaptomus japonicus である。

### 3. 環境保全施策の急がれる池沼

東毛地方の池沼は区画整理や土地改良等により現存するものは、すべて小形の池沼である。そのため汚濁水が伸入すると短期間で生物相を衰滅させる危険がある。また一方では当地方は県全体からみると、いわゆる辺地にあたり、低湿地帯にはかなり自然が残存してあり個々の池沼は、それぞれ特徴を持っている。ここではこれら池沼をA、Bランクに分けのべてみる。

Aランク（環境保全地区に指定すべき水域）

(1) 肘曲沼　邑楽郡板倉町大高島字高鳥

長径100 m 短径20－30 m の沼で谷田川の堤防の外端にある、沼は人家から離れ、周囲は水田にかこ

(2) 動物性プランクトン

イ 板倉町区域内池沼群の動物性プランクトン

本地域内の１０ヶ所の水域を調査したがこのうち次の４水域はそれぞれ下記の理由で動物性プランクトンの記載ができないた第４表にみられる６池沼についてのみ述べる。

蛭田沼　プランクトン採集はおこなったが固定液のホルマリン不足のため資料が分解して検鏡不能。

内　沼　（御手洗沼、猪子沼とも云う）ヒシ、サンショウモで全域がおおわれプランクトンネットの曳行ができず、採集不能。

枇杷沼　権現沼に近接する枇杷沼は東毛地域で亡びさったと思われたオニバスの群落を今回の調査で発見した沼であるがオニバスのほかフラスコモ、ミズワラビ、ミズオオバコ、キクモ、トリゲモ、ヒシなどが密生しプランクトンネットを曳行す

第４表　板倉町諸池沼の動物性プランクトン　⊕優占種

| 調査年月日 | | ２０、Ⅷ、４８ | | | ２７、Ⅷ、４８ | | | 28、Ⅷ、48 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 池沼名 / 種 | 針谷沼 | 行人塚中央 | 行人塚沼岸より | 行人塚沼7m垂直 | 柄池 | 権現沼 | 肘曲沼 | 坂田沼 | 出現池沼数 |
| 原動生物 | Ceratium sp | | + | | + | | | | | 1 |
| | Eudorina sp | | + | + | + | | | | | 1 |
| 輪虫類 | フクロワムシ Asplanchna priodonta | + | + | + | + | + | + | + | + | 6 |
| | ツノワムシ Brachionus diversicornis | | | | | | | | ⊕ | 1 |
| | ウシロヅノツボワムシ Br. forficula | | | | + | + | + | + | + | 5 |
| | Brachionus sp | + | | | | + | | | | 2 |
| | Conochilus sp | | | | | | | + | | 1 |
| | Lecane sp | | | | | + | | | | 1 |
| | Monostyla sp | | | | | | + | | | 1 |
| | ハネウデワムシ Polyarthra trigla | | | | + | | | | | 1 |
| | Philodina sp | | | | | + | | | | 1 |
| | Rotatoria sp | | | + | | | | | | 1 |
| 枝角類 | ゾウミジンコモドキ Bosminopsis deitersi | + | ⊕ | + | + | | + | + | | 4 |
| | オナガミジンコ Diaphanosoma brachyurum | + | + | + | + | | + | + | | 4 |
| | タマミジンコ Moina macrocopa | | | | + | | | | | 1 |
| | オカメミジンコ Simocephalus vetulus | | | | + | | | | | 1 |
| 橈脚類 | ヤマトヒゲナガケンミジンコ Eodiaptomus japonicus | + | + | + | + | + | + | + | + | 6 |
| | ノコギリケンミジンコ Eucyclops serrulatus | | | + | | | | | | 1 |
| | Thermocyclops hyalinus | + | + | ⊕ | ⊕ | ⊕ | + | + | + | 6 |
| | (nauplius) | + | + | + | + | + | + | + | + | (6) |
| だに類 | ミズダニ類 | | | + | | | | | | 1 |
| 昆虫類 | フサカ | | | | + | | | | | 1 |
| | 出現プランクトン種数 | 6 | 7 | 8 | １１ | 7 | 7 | 7 | 5 | |

採集調査　五味礼夫、　種検定　片山満秋。

１９７３年度文化財総合調査（東毛地方）として取りあげた水域は１４ヶ所ある。他に期間内の調査は実施されなかったが、参考水域として館林市の近藤沼を加え、１５水域について水質の環境をのべる。

まず有機汚濁水の指標となる溶存している$NH_4$−Nをみると、夏季の表層では城沼、近藤沼を除くと、いずれも0.7 ppm以下である、すなわち蛭田沼、針ケ谷沼、行人塚沼、柄池、谷田川（藤木橋近く）は0.5−0.7 ppm、坂田沼、権現沼、肘田沼、内沼、多々良沼、蛇沼、城沼（尾部）、古城は0.06−0.4 ppmである。夏季における表層の$NH_4$−Nはあまり多くないようであるが、底層には多量の滞留がある。針ケ谷沼は1.9 ppm、坂田沼は4.3 ppm、行人塚沼4.6 ppm、蛭田沼7.0 ppm、柄池に至っては10.3 ppmに達しており、板倉地区の水深の大きい、しかも水の更新の少ない沼での滞留が著るしい。（第２表）

$NH_4$−Nは藻類に吸収されたり、酸化されたりして急速に減少していく、一方では、その結果藻類が異常に増殖をする。藻類が含有するクロロフィル量（chlorophyl A）を指標として藻類の現存量を推定してみると、夏季の表層におけるchlorophyl Aは坂田沼５９mg／m³から行人塚沼１３mg／m³、肘曲沼７mg／m³、柄池６mg／m³となる。（第２表）中栄養湖、湯の湖では$NH_4$−N 0.01−0.05 ppm、chlorophyl A 4−33mg/m³であり富栄養化しているといわれている。また完全なる富栄養湖、諏訪湖では$NH_4$−N 0.03 ppm、chlorophy A 30−600mg/m³である（１９７３）、この報告と比較してみると、例外に属する藻類の異常増殖水域、城沼のchlorophy A 164−245mg/m³、茂林寺沼の120mg/m³（早春のchlorophyA量から夏季の値を推定した）は除外しても坂田沼、蛭田沼、多々良沼、針ケ沼、権現沼は明かに藻類の増殖量が著るしい。次いで古城、蛇沼が続き、水表面をすべてサンショウモやウキクサにおおい尽されてしまった内沼と谷田川に連なり、水の更新の大きい柄池を除くと行人塚沼及び肘曲沼が低地富栄養として、ほぼ正常で清澄な姿と考えられるのではあるまいか。

第３表は調査池沼の沿岸帯に生息する底生動物群集の現存量（個体数で示してある）である。前述の行人塚沼、肘曲沼、それに古城では清澄な湖沼に生息するβ中腐水性動物及び貧腐水性動物が総個体数の７０−８５％を占めている事も、上記を証明していると考えられる。

第３表　東毛地方の池沼の沿岸帯底生動物の現存量（個体数／２２５m²）

調査は１９７３年８月６日〜２９日に実施、但し茂林寺沼は１９７４年３月４日に調査した。（　）は％を示す。また貧腐水性動物はアナンデールヨコエビであり、α強腐水性動物はホシチョウバエとシマハナアブの幼生である。

| | α強腐水性動物 | β強腐水性動物 | α中腐水性動物 | β中腐水性動物 | 貧腐水性動物 | 総個体数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 蛭田沼 | | 10.4 (23.8) | 22.4 (51.2) | 10.9 (24.9) | | 43.7 |
| 権現沼 | | 1.9 (4.8) | 27.4 (68.0) | 10.9 (27.1) | | 40.2 |
| 柄池 | | 1.7 (8.1) | 12.9 (62.0) | 6.2 (29.8) | | 20.8 |
| 針ケ谷沼 | 0.3 (0.6) | 4.5 (10.4) | 12.2 (28.0) | 26.6 (60.8) | | 43.7 |
| 坂田沼 | | 1.4 (6.6) | 6.0 (28.5) | 12.7 (60.4) | 0.9 (4.3) | 21.0 |
| 行人塚沼 | | 5.1 (4.1) | 31.1 (24.8) | 89.1 (71.1) | | 125.3 |
| 肘曲沼 | | 1.4 (0.9) | 18.6 (12.3) | 131.4 (86.8) | | 151.4 |
| 城沼北岸尾曳橋近く | | 31.0 (98.4) | 0.5 (1.6) | | | 31.5 |
| 城沼北岸中央部 | | 65.6 (92.1) | 5.6 (7.8) | | | 71.2 |
| 城沼北岸最下流部 | | 0.8 (30.7) | 0.8 (30.7) | 1.0 (38.4) | | 2.6 |
| 蛇沼 | 1.2 (2.1) | 4.5 (7.8) | 50.0 (87.2) | 1.6 (2.8) | | 57.3 |
| 多々良沼 | | 11.2 (35.3) | 20.0 (63.1) | 0.5 (1.6) | | 31.7 |
| 古城 | | 12.8 (11.2) | 13.7 (12.0) | 60.5 (52.9) | 27.3 (23.9) | 114.3 |
| 茂林寺沼 | | 1.1 (3.5) | 0.2 (0.6) | 29.4 (95.7) | | 30.7 |

(6)

定は終了していないので種名は略したが、現在のところヌマカイメンSpongilla lacustrisとカワカイメンEphydatia fluviatilisは確認しているが他に数種ある。

## 2. 池沼群の水質環境と動物性プランクトン

### (1) 水質環境

第2表　東毛地方の池沼の水質

各池とも中央部で測定した。Sは表層水、Bは底層水をあらわす。
※茂林寺沼は春季の測定値である。夏季（8月）のchlorophyl Aの推定値は表層120mg／m³、底層180mg／m³ぐらいとなる。

| | 調査年月日 | WT ℃ (AT) | 水深 cm (透明度) | DO ppm (%) | pH | $NO_2$−N ppm | $NH_4$−N ppm | chlorohylA mg／m³ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 坂田沼 S | 1973. 7. 21 | 30.0 | 303 | 8.56 | 6.6 | 0.01 | 0.3 | 59.3 |
| 坂田沼 B | am 12:15 | (26.8) 24.5 | (78) | (160.3) 0 (0) | 6.8 | 0.01 | 4.3 | 35.7 |
| 蛭田沼 S | 1973. 7. 9 | 26.8 | 325 | 11.99 | 6.8 | 0.37 | 0.5 | 46.1 |
| 蛭田沼 B | am 11:30 | (26.8) 21.9 | (87) | (211.8) 0 (0) | 6.8 | 0.04 | 7.0 | 35.7 |
| 針ケ谷沼 S | 1973. 7. 5 | 28.0 | 360 | 6.99 | 6.8 | 0.01 | 0.6 | 34.1 |
| 針ケ谷沼 B | am 11:15 | (28.6) 24.3 | (92) | (120.0) 0 (0) | 7.0 | 0.12 | 1.9 | 26.6 |
| 権現沼 S | 1973. 7. 21 | 27.6 | 230 | 5.20 | 6.8 | 0.40 | 0.3 | 30.4 |
| 権現沼 B | pm 3:15 | (27.8) 27.5 | (93) | (93.2) 2.88 (51.4) | 6.6 | 0.40 | 0.7 | 12.9 |
| 行人塚沼 S | 1973. 7. 5 | 29.8 | 740 | 7.77 | 6.4 | 0.01 | 0.5 | 13.5 |
| 行人塚沼 B | pm 2:00 | (29.8) 14.6 | (225) | (144.9) 0.28 (3.8) | 6.4 | 0.03 | 4.6 | 22.3 |
| 肘曲沼 S | 1973. 8. 28 | 32.6 | 510 | 8.79 | 6.2 | 0.01 | 0.07 | 7.1 |
| 肘曲沼 B | pm 3:00 | 16.0 | (108) | (173.1) 0.39 (5.7) | 6.4 | 0.05 | 1.1 | 75.3 |
| 柄池 S | 1973. 7. 21 | 27.0 | 542 | 2.32 | 6.8 | 0.87 | 0.7 | 6.1 |
| 柄池 B | am 11:15 | (26.8) 19.5 | (208) | (41.2) 0.10 (1.6) | 7.0 | 0.38 | 10.3 | 20.1 |
| 内沼 S | 1973. 8. 29 | 28.4 | 45 | 3.25 | 6.2 | 1.85 | 0.06 | 6.2 |
| 内沼 B | am 10:00 | (31.5) 26.2 | (>45) | (59.0) 2.30 (40.1) | — | — | — | — |
| 城沼 S | 1973. 8. 8 | 32.0 | 126 | 18.17 | 6.6 | 0.25 | 1.0 | 245.0 |
| (尾曳橋近く) B | am 11:30 | (30.5) 28.7 | (38) | (353.5) 0.78 (14.3) | 6.2 | 0.09 | 2.7 | 17.0 |
| 城沼 S | 1973. 8. 9 | 32.2 | 118 | 26.25 | 8.6 | 0.09 | 0.3 | 164.3 |
| (最下流部) B | pm 1:05 | 30.5 | (31) | (512.7) 7.21 (136.4) | 6.8 | 0.20 | 0.4 | 202.2 |
| 茂木寺沼 S | 1974. 3. 4 | 11.9 | 124 | 23.08 | 6.0 | 0.16 | 1.0 | 138.0※ |
| (中央部) B | pm 2:50 | (19.2) 10.0 | (36) | (303.8) 16.48 (207.9) | 6.0 | 0.13 | 1.1 | 158.1 |
| 多々良沼 S | 1973. 8. 1 | 27.2 | 229 | 14.87 | 6.2 | 0.16 | 0.2 | 40.2 |
| 多々良沼 B | pm 1:15 | (28.3) 24.6 | (88) | (264.6) 3.89 (66.0) | 6.4 | 0.23 | 0.3 | 36.5 |
| 蛇沼 S | 1973. 8. 24 | 27.6 | 119 | 2.68 | — | 0.22 | 0.3 | 20.2 |
| 蛇沼 B | am 10:00 | (24.8) 27.4 | (110) | (48.0) 1.94 (34.6) | — | 0.22 | 0.3 | 13.1 |
| 古城 S | 1973. 8. 23 | 30.4 | 138 | 8.60 | — | 0.21 | 0.4 | 30.5 |
| 古城 B | pm 2:00 | (30.5) 28.2 | (70) | (162.3) 5.96 (108.0) | — | 0.24 | 0.4 | 21.4 |
| 近藤沼 S | 1971. 8. 13 | 33.0 | 120 | 17.48 | 8.2 | 0.10 | 1.1 | — |
| 近藤沼 B | pm 2:00 | 29.5 | (>120) | (346.8) 1.58 (29.4) | 6.4 | 0.25 | 1.1 | — |
| 谷田川 S | 1973. 7. 9 | 26.2 | 198 | 2.84 | 6.4 | 0.82 | 0.7 | 2.6 |
| (藤木橋近く) B | pm 3:20 | (27.5) 26.5 | (>198) | (49.6) 2.99 (52.6) | 6.6 | 0.77 | 0.7 | 13.2 |

現が著しく減少した。今田の調査ではヒメテンコケムシは権現沼と行人塚沼、カンテンコケムシは蛭田沼、針ケ谷沼、行人塚沼、肘曲沼、古城、近藤沼、多々良沼、蛇沼、茂林寺沼で採集された。

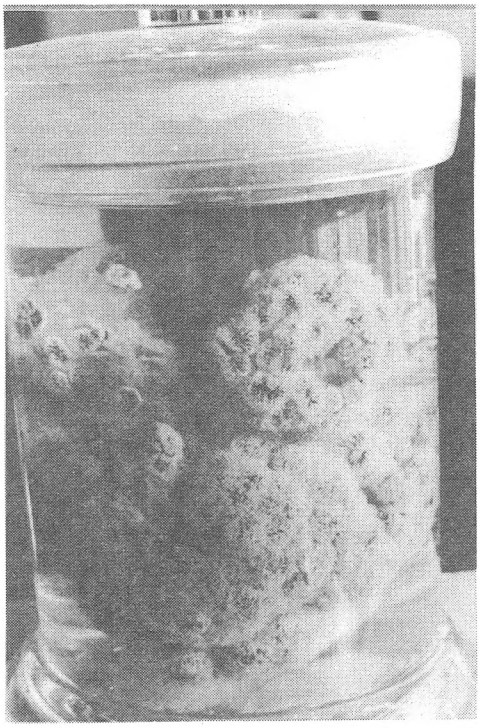


**photo 6　カンテンコケムシ**
Pectinatella gelatinosa
多々良沼産　1973 8 1　採集

(15)　ヤハズハネコケムシ Plumatella emarginata
触手動物門苔虫綱ハネコケムシ科

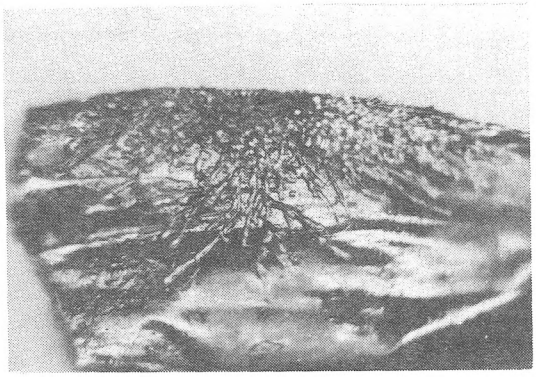


**photo 7　ヤハズハネコケムシ**
Plumatella emarginata
蛇沼　産　1973 9 22　採集

木の枝状に分枝した形をして、ヨシやマコモの茎や杭に附着して生活をする触手動物である。本種も前2者と同様に珍らしい動物ではなく、湖沼にごく普通に生息していたが、近年は少なくなって来た。今回の調査では権現沼、針ケ谷沼、古城、蛇沼で採集されたが、詳細な調査をすると他の池沼からも採集されるであろう。

(16)　淡水海綿類
海綿動物門尋常海綿綱タンスイカイメン科

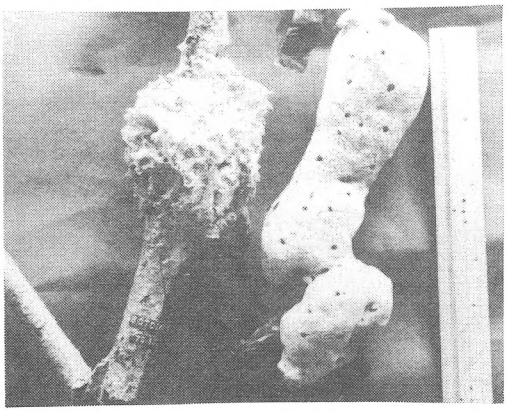


**photo 8　淡水海綿類**
肘曲沼、蛭田沼産
1973 8 28　各地の水域に多い

東毛地方の池沼には淡水海綿類は多産しており、さほど珍らしくもない。しかし1度固着すると終生自力での移動ができないため、汚濁水に弱く、近年各地でその姿を消している。今回の調査ではほとんど全域、すなわち蛭田沼、権現沼、柄池、針ケ谷沼、坂田沼、行人塚沼、肘曲沼、古城、近藤沼、多々良沼、蛇沼、茂林寺沼で確認された。なかでも古城、多々良沼、権現沼、針ケ谷沼に多産し、古城を除くと、がいして透明度の小さいプランクトン生物の多い池沼の生息量が大きい

尚館林市城沼では昭和40年以後は採集されていない。（昭和40年以前は筆者等の調査がないので不明である）城沼では絶滅してしまったと考えられる。また淡水海綿類の同

日本蜻蛉学会会員大森武昭氏や関根の調査によると館林・板倉地方が本種の北限になると考えらる。採集は肘曲沼、行人塚沼、坂田沼針ケ谷沼、柄池、蛭田沼、内沼、谷田川（藤木橋近く）、館林では古城、蛇沼、茂林寺沼等であり生息量も大きい。大森氏によるとイトトンボ類の生息域として当地方の池沼は、きわめて貴重なものであるとのことである。

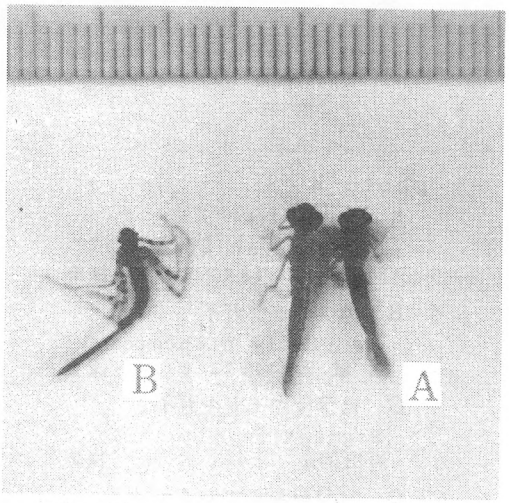



**photo 5**

**A　ベニイトトンボ**
Ceriagrion nipponicus
古城産　1973. 7. 23　採集

**B　オオモノサシトンボ**
Copera tokyoensis
古城産　1973. 7. 23　採集

(9)　オオモノサシトンボ Copera tokyoensis
節足動物門昆虫綱モノサシトンボ科

日本における本種の分布はごく限られており、現在のところ関東平野の下流域と信濃川下流域に局在している。東毛地方では坂田沼、針ケ谷沼、柄池、内沼、古城、近藤沼、多々良沼、蛇沼、茂林寺沼に産する。東毛地方の動物としては前記ベニイトトンボと共に特筆すべきものであり、その水域環境の保全施策が必要である。

(10)　アオモンイトトンボ Ischnura senegalensis
節足動物門昆虫綱イトトンボ科

本種の北限は関東平野であるが、他に岩手県船越での採集記録がある。東関東では生息が確認されているが本県での記録はなかった。

しかし昭和42年5月と7月に大森氏は近藤沼で3個体を採集し、北関東での生息が記録された。だが今回の調査では他の水域からの採集はない。

(11)　コフキトンボ Ceielia phaon
節足動物門昆虫綱トンボ科

雌個体の中にはミヤマアカネに似た褐色の帯状斑があり、基部がだいだい色の異色型（俗にオビトンボと云う）がある。この雌の異色型個体は本邦では所々で採集されているが、群馬県での記録はない。しかし今回の調査時に、大森氏は行人塚沼と権現沼で異色型個体を採集し、県内での生息を確認した。

(12)　マイコアカネ Sympetrum kunkeli
節足動物門昆虫綱トンボ科

7－10月に平地や低山地の池沼に出現するが、生息地は限定されている。本種は昭和42年に大森氏により坂田沼、多々良沼で採集されており、今回権現沼で採集された。しかしながら本種は県内の他の池沼では生息の記録はない。

(13)　チョウトンボ Physthemis fuliginosa
節足動物門昆虫綱トンボ科

6－8月に平地の池沼に姿を現はす、ごく普通のトンボである。チョウのようにひらひらと飛ぶ特異な飛翔型であり、かつて邑楽郡の池沼には多産した。その後、著しく減少し姿がみられなくなったが、今回、行人塚沼、蛭田沼、針ケ谷沼、古城、多々良沼で採集された。東毛地方では除々に復活していると考えられるが県内の他水域では殆んど記録がない。

(14)　カンテンコケムシ Pectinatella gelatinosa
ヒメテンコケムシ Lophopodella carteri
触手動物門苔虫綱ヒメテンコケムシ科

両種とも無色透明の寒天状物質が多量に分泌され、塊状の群体はその中に埋まっている。

ヒメテンコケムシは日本各地に、カンテンコケムシは関東以西の湖沼にみられる動物で、さほど珍らしいものではないが、近年その出

annandalei 節足動物門甲殻綱ヨコエビ科

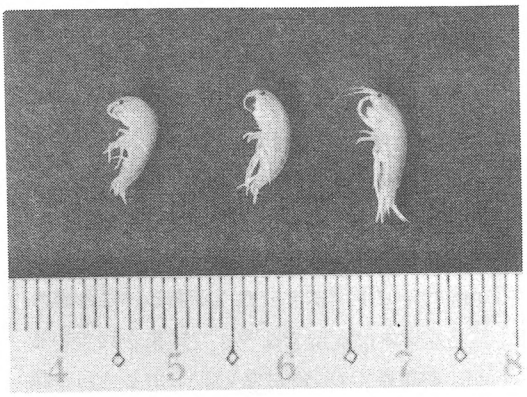


**photo 3 アナンデールヨコエビ**
Anisogammarus annandalec
古 城 産　　1974 2 22 採集

本来は汽水性で北海道から九州にかけての河川や沿岸汽水域に分布している北方系種である。東毛地方の池沼には、かなり多く分布していたが汚濁水を嫌い消失していった。

現在では坂田沼、館林市の茂林寺沼、古城に生息する。前2沼では少ないが、古城では多産し、沿岸帯の底生動物群集では周年を通じ優占種ないしは亜優占種である。特に秋季から春季までは沿岸帯底生物群集の約80％を占めている。

(5) カワネジガイ Camptoceras hirasei
軟体動物門腹足綱カワネジガイ科

大正末期まではインド特産として知られていたが、その後関西方面で発見され、関東でも知られて来た。群馬県では昭和9年に渡良瀬川と下川淵で採集されたが、その後の確認はなかった。戦後では昭和26年に五味により館林市多々良沼からの流出河川、江川で発見されただけであるが、今回、板倉町の肘曲沼の沿岸帯2ヶ所の調査で4個体を採集した。

(6) カワコザラガイ Ferrissia nipponica
軟体動物門腹足綱カワコザラガイ科

殻長4.5㎜ほどの小形でだ円形、陣笠様の小貝で、薄く弱い殻は淡黄色から黒褐色である。本種は本州から九州までの池沼沿岸部の石礫や落葉、挺水植物に付着している。特別

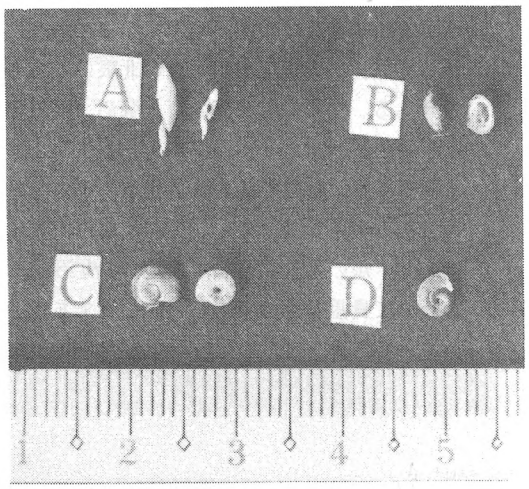



**photo 4**
**A カワネジガイ**
Camptoceras hirasei
肘田沼産　1973 8 28　採集
**B カワコザラガイ**
Ferrissia nipponica
古 城 産　1973 8 23　採集
**C ヒラマキモドキガイ**
Segmentina nitidella
肘田沼産　1973 8 28　採集
**D ヒラマキミズマイマイ**
Gyraulus convexiusculus
Spirillus　名水域に多い

珍らしい種ではないが近年その数が減少しているので記載した。

(7) ヒラマキモドキガイ Segmentina nitidella
軟体動物門腹足綱ヒラマキガイ科

分布は広く北海道から沖縄までといわれているが、殻長7㎜ほどの円盤状の小形貝であり見おとされている。しかもヒラマキミズマイマイ、ハブタエヒラマキガイ等と混同されているため、本種の記載は群馬県では初めてであると思われる。採集地は肘曲沼であり、かなり多く生息しているが他水域では確認されていない。

(8) ベニイトトンボ Cariagrion nipponicum
節足動物門昆虫綱イトトンボ科

関東以西では局所的に分布しているが、群馬県の東北地方が本種の北限になる。筆者の一人関根は昭和42年8月に大泉町八重笠沼で本種を採集しているが、現在は消失している。

第１表　東毛地方に生息する注目すべき水生動物

※筆者等による採集はおこなわれていない
※※１９７３年９月２４日、関根により死個体が採集された

| 動物名＼池沼 | 行人塚沼 | 針ヶ谷沼 | 肘曲沼 | 坂田沼 | 権現沼 | 蛭田沼 | 柄池 | 内沼 | 古城 | 蛇沼 | 茂林寺沼 | 近藤沼 | 多々良沼 | 城沼 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ワカサギ | ○※ | | | | | | | | | | | | | |
| モクズガニ | | | | | | | | | ○※※ | | | | | |
| テナガエビ | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| アナンデールヨコエビ | | | | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | |
| カワネジガイ | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| カワコザラガイ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | |
| ヒラマキモドキガイ | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| ベニイトトンボ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| オオモノサシトンボ | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| アオモンイトトンボ | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| コフキトンボ（異色型） | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | |
| マイコアカネ | | | | | ○ | | | | | | | | ○ | |
| チョウトンボ | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | | | | ○ | |
| カンテンコケムシ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| ヒメテンコケムシ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | |
| ヤハズハネコケムシ | | ○ | | | ○ | | | | ○ | ○ | | | | |
| 淡水海綿類 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 合計 | 7 | 7 | 6 | 6 | 6 | 5 | 4 | 2 | 9 | 6 | 6 | 4 | 5 | ○ |

日本各地の内湾の磯や河口から、さらに上流まで遡っている。かつては利根川本流では渋川近辺で採集され、鏑川上流でも記録されている。今回の調査では７月と９月の上旬に谷田川の藤木橋近く（板倉町）で漁師により６匹採集された。池沼では谷田川に連らなる柄池ではワカサギと同様に生息の可能性がある。また９月２４日に館林市の古城において死個体を採集した。古城では生息の可能性が十分にある。

(3)　テナガエビ　Palaemon nipponensis
節足動物門甲殻綱テナガエビ科

北海道以外の本邦全土の低地の河川・湖沼に広く分布する種である。かつては東毛地方の池沼には多産し、地域の水産物として重要な位置を占めていたが、環境の悪化につれヌマエビ、スジエビ、ヌカエビ等も共に滅亡した。現在では利根川（明和村、昭和橋近く）で採集されており、谷田川にも生存していると推定できる。しかし東毛地方の池沼では衰滅したと考えられていたが、今回の調査で板倉町の坂田沼において雌１個体を採集した。抱卵しており、再び沼にかえしたが生存を確認できた。

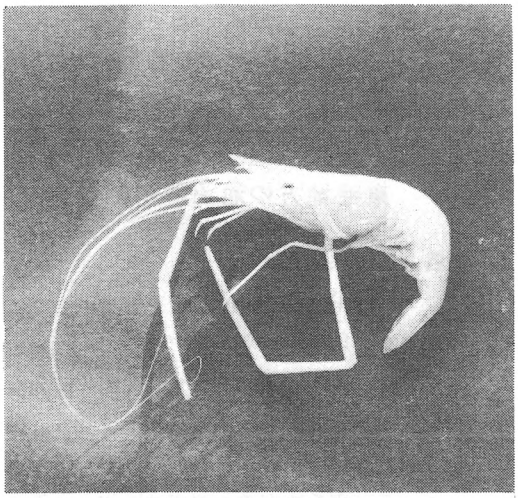


**photo 2　テナガエビ**
Palaemon nipponensis
坂田沼産　　１９７３　８　２８　採集

(4)　アナンデールヨコエビ　Anisogammarus

# 動　　物

## 一　東毛地方の池沼群の動物

1.　注目したい水生動物

2.　池沼群の水質環境と動物性プランクトン

3.　環境保全施策の急がれる池沼

## 二　大間々地域渓流の動物

## は　じ　め　に

東毛地方の動物調査については、多くの池沼群をもち豊富な動物相の予想される館林市、邑楽郡地域から第一次調査のカード提出がないため、この区域については著者らが合議して地域を選定し、池沼の動物に関しては板倉町をえらび、現地と連絡のうえ行った。

また渓流域については桐生市および大間々町区域内が期待のできる区域と予想したが第一次調査カードは大間々町の一項目だけで桐生市からは一件もないのでこれを除外して大間々町についてのみ調査を行った。東毛地方の調査としては区域にかたよりがあるが、これ以上の理由による。なお調査に際して調査員としての筆者ら三名のほかに、池沼のプランクトンの検定については片山満秋、トンボ類の現地調査と種の同定については大森武昭、渓流動物の現地調査と検定については宮原義夫の三氏の多大の協力を得たことを特に附記したい。（五味礼夫）

## 一　東毛地方の池沼群の動物

### 1.　注目したい水生動物

(1)　ワカサギ　Hypomesus olidus

脊椎動物門魚綱キュウリウオ科

ワカサギ自体は特記するべき魚類ではあるまい、しかし北太平洋系のこの魚は昨今、湖沼の環境悪化に伴い、各地の湖沼から姿を消している。東毛地方の池沼では昭和２０年頃までごく普通にみられ、特に館林市、城沼には多産していた。だが、その後順次減少し昭和３０年迄に東毛地方のすべての池沼から消失してしまったといわれている。

今回の調査で板倉町行人塚沼に少量ではあるが生息しているとの聞きこみを得た。筆者等の採集はないが池沼環境からみても、生息の予想はできる。今後の精査が必要である。

ワカサギは少量ではあるが谷田川には遡上しており、柄池等も生息の可能性はある。

(2)　モクズガニ　Eriocheir Japonicus

節足動物門甲殻綱イワガニ科

photo 1　モクズガニ
Eriocheir Japonicus
谷田川（藤木橋近く）産　1973 9 6 採集

# 補　　遺

太田市の文化財 …… 221

笠懸村の文化財 …… 225

館林市の文化財 …… 227

# 太田市の文化財

## ー建造物と彫刻についてー

### 一、大　光　院

所在地　太田市金山町三七ノ八

＜概観＞

天下をほぼ掌中にした徳川家康が、忍ノ城に芝増上寺、観知国師を迎いて、祖先崇敬のため新田義重の菩提所建立の意を伝えたのは、慶長十六年（一六一一）一一月二九日であったという。普請奉行には土井利勝、成瀬正成、観知国師があてられ、新田氏ゆかりの金山南麓に義重山大光院新田寺が竣工されたのは、慶長十八年四月であった。開山には観知国師の弟子・武州滝山大善寺第三世然誉が迎えられた。世に「子育て」として名高い呑竜上人である。浄土宗鎮西派、関東十八檀林の一寺と称される名刹であるが、多くの人々の帰依を受け今なお地域社会との深い関係を保ちながら法灯を継承発展させている。

1. 建造物

（本　堂）

間口十一間、奥行九間三尺で屋根は瓦葺入母屋造りである。大正十四年に大改修がなされているが、創建当時の構造はよく残されている。特に内部は大きな改造もなく、当初の華麗な姿をよくとどめている。

（庫　裡）

東西八間、南北十間の瓦葺入母屋造りの大きな構造物である。本堂と同様に大正十四年に改修がなされている。

（吉祥門）

間口三間半、奥行一間半、屋根は瓦葺切妻で簡素な造りである。中門として建立されたものであるが、元和元年（一六一五）大阪落城の時にちなんで、吉祥門と名付けられた伝承をもつ。瓦の葺きかえ、袖垣の修理がなされているほかはほとんど創建のままである。

昭和四七年九月二六日付で、太田市の重要文化財の指定をうけている。

（水　屋）

愛くるしい四人の童子が水槽を支えるというモチーフの青銅製の水槽は、参詣に来る人々に大へん親しまれている。その水槽には、次の銘が刻されている。

紀元二千五百四十年七月吉辰

武陽川口住

請負人　嶋崎平五郎

同鋳造人　永瀬正吉

この水槽にかかる水屋は、蒿沢介之助の手になる破風板への彫刻で注目さるべきである。

蒿沢介之介の経歴、作品等については、まだ研究が不足しているので、紹介はひかえる。今後の課題と考えられる。

（鐘楼堂）

瓦葺き、入母屋造りで、石造基壇上に建つ。以前は明治四二年鋳造の梵鐘が下げられていたが、太平洋戦争中、供出させられたので、昭和三三年に新鋳したものがそれにかわっている。

大光院の鐘楼は、五代将軍、綱吉の寄進により、伊豫守推名良寛が元禄十一年九月竣工したことが伝承されている。しかし、現存のものは、後世の修復が著しい。

2. 彫　刻

（阿弥陀三尊立像）

木造　像高　阿弥陀如来　九五センチ
観音菩薩　五〇センチ
勢至菩薩　五〇センチ

本堂内陣に安置され、如来は安阿弥快慶の作であり、両脇侍は大仏師運慶の作という寺伝がある。しかし、姿勢、玉眼および白豪、肩の線、衣の流れとそこに描かれた模様、両脇侍の宝冠、全体の量感等いずれの点からも江戸期の仏像の特色を示しており、しかも、三尊ともに同一仏師の手になるものと思われる。江戸初期の作品と考えるのが妥当であろう。

（その他）

呑龍上人自作木像
像高　一五〇センチ
元和七年十二月作と伝える。

騎馬八幡大菩薩木像
像高　一五センチ
建久八年正月吉日源義重の墨書銘あり。

徳川家康木像
像高　六〇センチ
寛永十三年十二月、家光寄進と伝える。

新田義重木像
像高　六〇センチ
慶長十八年四月、家康寄進と伝える。

水屋破風彫刻（前記・略）

## 二、正　法　寺

所在地　太田市脇屋甲五六二

〈概観〉

長禄三年（一四五九）当時の住僧の筆記になる縁起一巻によると、脇屋山正法寺は延喜年中（九〇一～九二三）山城国醍醐山聖宝僧正が東国遊化の時、檀越六孫王源経基の情願により開基されたという。その後、新田義重以下新田源氏の尊崇をうけ、堂塔がそなわり古義真言宗としての寺観をととのえた。特に新田義貞の弟、脇屋義助の熱心な帰依をえて、その菩提所となっている。元禄から文化の頃までは、門前町が形成されるほどの隆昌を見せていた。しかし、文化四年二月二八日の大火で本堂、庫裡ともに灰燼に帰し、現在では仁王門と観音堂を残すのみである。

1. 建造物

（観音堂）

銅板桧皮葺入母屋造りで、間口五間、奥行六間である。享和三年（一八〇三）に建立されたもので、前面に唐様の向拝がある。創建当時は草葺であったと思われるが、現在は銅葺になっている。

（仁王門）

二階建、入母屋造りで、現在は瓦葺である。貞享二年（一六八五）に建立され、間口五間、奥行三間の規模であるが一階の両側一間半四方の空間に仁王像が安置されている。

太田地域では、当仁王門のように完全な形のものは外になく、江戸初期の様式をよく保存している点でも貴重であろう。

2. 彫　刻

（聖観音立像）

寄木造　像高　一五五センチ

聖観音像は、寄木造のうえに漆箔をほどこされ、宝冠座、顔面の一部、衣文等に華麗な藤原期の様式を残しているが、一面、写実的、理知的な手法を多分にもつので、鎌倉時代初期の造顕と推定されている。各部均斉のとれた仏像で、貴重な存在である。

（地蔵金仏）

青銅製　総高　二〇三センチ

像高　一二六センチ

地蔵尊は境内の木立の下、石造基檀の上に鎮座しており、一般には「濡れ地蔵」として親しまれている。二米余の大きな像で、台座蓮弁に次のような銘文が刻まれている。

頌　日

錫聲脱悪　一切有情

転輪受楽　悟覚永生

上劦新田郡脇屋山正法寺十六世

導師　阿闍梨良海代

宝暦十年庚辰三月十五日

下野国天明

鋳物師大工

丸山孫右衛門清光

宝暦十年（一七六〇）に佐野の鋳物師により鋳造されたことが明らかである。

（仁王像）

寄木造　像高二五〇センチ

貞享二年（一六八五）仁王門の建立時に安置されたもので、作者は勅法眼康祐と伝えられる。破損も少なく、なかなか力感のあふれた巨像で、特に太田地域では貴重な作品であるといえよう。

（ミコシ）

仁王門の中空に固定されているため、精査できなかったが、装飾の少ない簡素な造りである。現在は全く使用されていないということだが、作者等の追跡をしておく必要があろう。

## 三、太田宿・本陣書院

所在地　太田市本町二〇ノ五五

所有者　橋本正己

太田市本町の橋本家は、元和八年（一六二二）本陣に指定され、その後代々、太田宿の名主、御林守、問屋などをつとめ、徳川幕府崩壊の慶応三年まで、太田宿のかなめのような存在であった。現在同家に所蔵されている本陣宿場関係等の約千点と推定される古文書類も、江戸時代太田の歴史を構築するには欠かせぬ資料である。

現存する書院は、江戸城西の丸書院に範をとったものといわれ、天保五年（一八三四）に造られ、筒井伊賀守により「含翠館」と命名された。書院上段の間、入側の孔雀の板戸絵等がよく原形を保ち、往時の豪華をしのばせている。

日光例幣使街道沿いの宿場には、このように原形を保持する書院は他に例をみないもので、この観点からも貴重なものである。

## 四、さざえ堂

所在地　太田市大字東金井一六五

さざえ堂は、新田氏の始祖、義重が京都からの養姫である祥寿姫の菩提を弔うために建立したという伝承をもつ祥寿山曹源寺の本堂である。

曹源寺は創建以来二度の火災にあっており、寺に保持されている「観音堂再興之図」によれば、現存する「さざえ堂」の竣工は寛政五年（一七九三）であり、大工棟梁は龍舞村町田兵部栄清、覆棟梁は西矢島村野口源左衛門栄政であった。

さざえ堂は木造方型で、方六間。屋根は宝形桟瓦葺で、正面には一文字瓦の葺きおろし向拝があり、身舎のまわり四方に屋根が裳階のようにめぐっている。その屋根に接して回廊を設け勾欄をつけているの

で、外景は重層にみえる。屋蓋の軒組はふた軒の扇垂、四隅には太い尾垂がみえ、軒の反りは強くない。

軸部は身舎が十九本の通し柱と二本の管柱とから成り、正面の一間の柱のない部分は正面の横桁と直裏の通し柱の頭とを太い梁でつないでいる。外観は重層にみえるが、構造的には単層で、機能的には三階である。

堂の内部構造は極めて特殊な構造をなし、参拝者は一方通行で同じ所を二度通らずに元の位置に戻れるようになっている。そこで、堂内に安置されている坂東・西国・秩父の各札所の観音像を模した百体の観音像を、参拝者は流れるように拝めるようになっている。

この仏堂形式は、三十三観音または百観音の信仰を背景にして、関東・東北地方において十八世紀に考えだされた構造である。更に仏教にある右繞三匝（ウジョウサンソウ・右めぐり三回）の儀礼をも建築の構造に表現したとも考えられる。

なお、埼玉県児玉町の成身院、福島県会津若松市の正宗寺にあるさざえ堂と合わせて、「日本三さざえ堂」といわれているが、その中でも曹源寺のさざえ堂は、最も規模が大きい上に、保存状態も良いものである。他地域のさざえ堂が崩壊しつつある現在、ますます貴重なものと考えられる。

## 五、冠稲荷神社本殿並びに聖天宮

所在地　太田市細谷一

冠稲荷神社は天治二年（一一二五）創建と伝えられる古社で日本七稲荷の一つである。また、社伝によれば、承安四年（一一七四）源義経が兄頼朝の追捕を逃れて奥州に向う途中、冠の中に納めてあった伏見稲荷の神霊を奉納したため冠稲荷神社とよばれるようになったと伝えられる。

本殿は元禄三年（一六九〇）に再建された建物で、作者は不詳であるが、みごとな彫刻がなされている。

聖天宮は安政四年（一八五七）佐波郡下渕名の名彫工として知られた弥勒寺音次郎と音八の親子による作で、八棟造りといわれる複雑な屋根の構造をもち、内部および周囲にすぐれた彫刻がほどこされている。

昭和四七年に市の重要文化財として指定された。

## 六、その他

1. 受楽寺

所在地　太田市金山町二一ノ五

（山門彫刻）

木　彫

岸大内蔵、岸太輔の作

（養老の滝）

木彫　高さ五〇センチ

「藪塚大原」の銘があり、彼地に在住したことのある、岸大内蔵の作かもしれない。

2. 霊雲寺

所在地　太田市飯田町二三三

（釈迦如来像）

未調査

3. 横山稲荷合祠の弁財天

所在地　太田市東本町二九の四

（弁財天坐像）

木彫　像高七〇センチ

横山稲荷は、横山家の屋敷稲荷として祠られてきた。昭和初頭に

近所にあった弁天堂が移転をよぎなくされた時に合祠されたものである。

像は一面八臂、玉眼、頭上に鳥居を載せ、宝冠をつける。台座をふくめて華やかな色彩を施し、地元の人々は「日本三弁天の一体」と称していたようである。

彫り、宝冠、容姿等から江戸末期の作と考えられる。

4. 円福寺

所在地　太田市別所字山越

古義真言宗の寺院で、御室山金剛院という。新田氏宗家の四代政義が開いた。墓所には鎌倉時代から南北朝期の五輪塔と多層の石塔十七基余りがあり、東毛の石造美術品の所在地として貴重である。

（十二所神社・神像）

木造　神像十六体　高さ二〇～三〇センチ

円福寺内の十二所神社に安置されているもので、神像の背面には、「元正元年（一二五九）己未六月五日、右志者為阿闍梨静亀」「元正元年己未九月十八日、白山権現十一面観世音」「正元元年己未十月六日、貴船大明神」等の刻銘がみられる。

比較的保存状態の良い四体が、昭和五〇年九月二二日に市の重要文化財に指定された。

5. 長手の三仏

所在地　太田市長手

未調査

6. 萩原の石仏

所在地　太田市只上字清水

未調査

# 笠懸村の文化財

## 一、古文書

1. 高橋守夫家

所在地　新田郡笠懸村西鹿田二六一七

(1) 農業百年日記　一冊

(2) 文政十二年（一八二九）旅日記　一冊

（農業百年日記・記載例）

Ⓐ 文政九年（一八二六）丙戌歳地配

春夏秋風雨程善シ　正二月至寒故暑早来

十日先於口即口秋来而猶如是

右同年穀稼

大麦九斛三斗　春蕎麦廿八籠　壱斗二升

小麦十二俵　田前田十四俵　貢六俵壱斗二升

大豆二石五斗　麻田七俵　貢二俵二斗六升

小豆二斗二升　木綿

粟四斛二斗　藁麦壱斛三斗

胡麻七斗二升　岡稲三俵壱斗

小角豆壱斛一斗

芋五十負　秋製一輪車

Ⓑ 天保二歳次（一八三一）辛卯百穀地配

正月無雨寒厳、二月中旬雨多、従是春陰、小雨日々、大麦被侵水而黄、到八十八夜後未種芋、又未集取木葉是則多雨故也、三月ヨリ雨多、四月八日雨比後天気好シ、節々肖口陽気寒十日後節、五月涼シ、六月七月暑甚、八月与四箇月旱、八月十七日何佐見林

沼水口漁ズ、九月十月十一月口口口口、十二月雪二度、
秋利根川辺芳原ニ芳之穂ニ稲実ル、
口井水少山村尚太矣

蕎三十七　内二ツ半母分　田　六畝二八分　十四俵　貢五俵
大麦六斛
小麦十一俵　鹿田四俵半
豆壱斛
小豆三斗　藁麦七斗　貢一俵ト二斗六升
大豆二斛五斗
胡麻五斗二升

©弘化十戊申歳（一八四八）百雑分区
正月雪寒二月雨少三月雨多四月煖雨多五月暑半六月十六日迄雨多
是後暑甚雨無至七月十四日初雨残暑甚強雨無至二八日雨八月雨九
日嵐九月雨甚経彼岸尚暑櫛楊多開東隣杜丹一花開十月十一月猶煖
十二月無雨雪

蚕三十三筐　六月養原蚕ニ槌得繭一斗
大麦十石二斗
小麦十三俵
大豆三石
小豆
豇豆
荏七斗二升
田十二石　貢五俵二斗一升八合壱夕七才
田村和万家

2.
所在地　新田郡笠懸村鹿一三一四

(1)上野国新田郡鹿田村御検地水帳　一冊
（元禄六葵酉年）
(2)天明四辰年名寄帳　一冊
上野国新田郡鹿田村

## 二、建造物並びに彫刻

1.
正一位稲荷大明神社殿
所在地　笠懸村阿左美一七八二
江戸時代より農民から養蚕の神として信仰を集めている。
間口十六尺、奥行十八尺。社殿の後半部に、別棟でなく、奥の院が奉置されている構造をもっている。十八世紀頃の建立と思われる。

2.
高松山長寿院
所在地　笠懸村阿左美二一三〇
当時の阿弥陀堂三世住職が、妻の菩提を弔うため、明和二年（一七六四）に建立したものである。寺号は、

| |
|---|
| 高松院殿前中書法誉性心涼翁大居士<br>長寿院殿応誉照月英感大禅定尼 |

という住職とその妻の法名からとられたものである。
間口四七尺、奥行四一尺。木造瓦葺。

3.
阿弥陀堂
所在地　笠懸村久宮字臥竜奄二九三
本尊　阿弥陀如来坐像　木造　三〇センチ
脇侍　四天王立像　木造一一五センチ
本尊、四天王立像ともに天保期の製作であろう。堂は大正期に建立されたもの。

4. 薬師堂

所在地　笠懸村阿左美二一三〇

本尊　薬師如来坐像　木造一〇センチ

脇侍　童子像（二体）　木造二一センチ

文化二年（一八〇五）の製作である。

# 館林市の文化財

## 一、金　銅　仏

1. 銅造地蔵菩薩立像

所在地　館林市大島（観音）

所有者　観音部落

造立年号　宝永五年九月吉日

（一七〇八年）

総高　一三六センチ

刻銘　奉造立六十六部供養仏

宝永五戌子九月吉日

上刄邑楽郡観音村敬白

法印祐慶（以下略）

2. 銅造地蔵菩薩座像

所在地　館林市大島（山王）

所有者　吉祥寺

造立年号　宝暦八年（一七五八年）

総高　一四七センチ

吉祥寺北方一〇〇メートルほどのところにある地蔵堂に安置。俗に、日限地蔵とよばれている。

刻銘　開眼導師　法印慈観

吉祥寺一代、供養仏

奉納経日本西国六十六部

別当吉祥寺　願主西岸

施主惣邑中

宝暦八年戊寅春二月二十四日
（以下略）

3.

銅造聖観音座像

所在地　館林市堀工

所有者　茂林寺

造立年号　元禄三年（一六九〇年）

総高　二三三センチ

茂林寺境内、高さ約二〇〇センチの石垣上に安置されている。

刻銘　奉鋳冶金銅聖観音索多之像

右願望意趣者住居川俣村金子茂右衛重春之妻法名涼室

妙清大姉余姻矣

因慈起立這箇尊像者也　伏願涼室断永劫流転若依妙智

慈悲力頓証果乍生浄土而己旦時

元禄三庚午年三月二十二日

東上野国邑楽郡館林大久保村高瀬善兵衛直房嫡孫

同名太郎兵衛直正仁長男

願主

高瀬清左衛門重房生年十歳時

敬白　（中略）

於江戸鋳物師石屋之指図

江戸坂江町

近江屋善兵衛利長

江戸神田鍋町鋳物師

太田久右衛門長儀

江戸松屋町石屋

泉屋助右衛門

右以有因労功之故記　其名者也

4.

銅造大日如来座像

所在地　館林市緑町

所有者　遍照寺

造立年号　享保四年（一七一九年）

総高　一八九センチ

像高　一三六センチ

元、富士嶽神社（市内小桑原）の御神体であったが、神仏分離のさい当寺に移された。

刻名　享保四己亥天十一月吉口

奉建立　大日如来

願主　賢海

館林町中

同　領中

佐野領中

（中略）

宇田川善兵衛

藤誉清光　藤原重勝作

（以下略）

## 二、建築・彫刻

1.　愛宕神社・本殿

所在地　館林市西本町

間口四尺、奥行三・四尺、神明造銅板葺。寛文九年（一六六九）館林宰相綱吉の再築。

千木に三葉葵の紋章あり。懸魚、下紅梁、象鼻、蟇股に同時代の特徴あり。

2.

薬師堂、本堂

所在地　館林市当郷

草葺、向拝銅板瓦棒葺、本堂柱は大面取、向拝柱角面取。

斗栱の作製の違い、棰の継手から向拝は後補か。棰木配りは古い。

棟札によれば文化年間の再建。従前の薬師如来鋳造は元亀三年（一五七二）の天明産（東京根津美術館蔵）。また、同年同所鋳造の鰐口があったが、戦時中供出させられた。

3.

天福廃寺聖天堂残存彫刻

所在地　館林市台宿町、五宝寺。

館林宰相綱吉城主時代の再建と伝えられる聖天堂は、本寺天福寺廃寺にともない荒廃す。

内務省は保存費七五〇円を交付し、恢復をはかったが、大正元年（一九一二）焼失。その残存彫刻五点が、五宝寺に保存されている。

4.

武家屋敷

所在地　館林市城町一四ノ三七

所有者　館林市

旧館林藩士（十七俵二人扶持）の旧居であり、武家屋敷の構造をよく伝えている。現在、市史跡に指定されている。

5.

武家屋敷

所在地　館林市尾曳町

所有者　山田秀夫

百石取り館林藩士の旧宅。

## 三、板　碑

1.

所在地　館林市西本町

所蔵者　愛宕神社

年号　文永十年二月（一二七三）

高さ　二〇三センチ

巾　五四、五センチ

仏種子　地蔵像陽刻

頂部欠

2.

所在地　館林市青柳

所蔵者　鑓田周作

年号　弘安十年八月彼岸（一二八七）

高さ　四六、七センチ

巾　一五、二センチ

仏種子　弥陀

種子の下に「泰母」とあり、その下に蓮台

3.

所在地　館林市台宿町

所蔵者　五宝寺

年号　永仁五年正月（一二九七）

高さ　一二〇センチ

巾　四三、五センチ

仏種子　弥陀

不動曼荼羅種子、五輪塔二基陰刻。上下部共に欠。

4.

所在地　館林市城町

所蔵者　館林市立図書館

年号　正和三年（一三一四）

高さ　七三センチ

巾　二六、五センチ

仏種子　弥陀

下部年号両側に光明真言

5.
所在地　館林市下三林
所蔵者　小暮栄一
年号　康永二年正月六日（一三四三）
高さ　五一センチ
巾　一八センチ
仏種子　弥陀

6.
所在地　館林市大島（正儀内）
所蔵者　春昌寺
年号　観応二年六月二三日
（一三五一）
高さ　一一八センチ
巾　三〇、三センチ
仏種子　弥陀
光明真言、花瓶一対。下部右一部欠。

7.
所在地　館林市赤生田
所蔵者　塩田正
年号　延文二年一一月一一日
（一三五七）
高さ　七二センチ
巾　二二、五センチ
仏種子　釈迦

8.
所在地　館林市大島（正儀内）
所蔵者　春昌寺
年号　延文六年二月（一三六一）
高さ　六四センチ
巾　一九センチ
仏種子　弥陀

花瓶一個

（川島維知）

東毛地方の文化財

昭和51年3月25日　印刷
昭和51年3月30日　発行

編集　群馬県教育委員会　文化財保護課

発行　群馬県文化財保護協会

〒371　前橋市大手町一丁目1の1

TEL　0272－23－1111（代表）

印刷　前橋謄写堂